国際的なフィールドにおいて働くには：
J-BINGO プロジェクト　テキスト(Ver1.1)

青山学院大学社会情報学部
J-BINGO プロジェクト

目次

1. はじめに 1

2. 国際的なフィールドにおいて働くとは？ 2

2-1. 国際機関とは何か 2

2-2. 国際連合で働く 4

2-3. 国際 NGO で働く 8

2-4. 民間企業で働く 9

3. 国際的なフィールドで活躍する人々のキャリアパス 12

4. 国際的なフィールドにおいて働くために必要な能力や経験 85

5. 国際的貢献の一歩をインターンシップから始める 87

5-1. J-BINGO プロジェクトの仕組み 87

5-2. 国際機関でのインターンシップ参加に求められること 92

5-3. 岡田(J-BINGO プロジェクト 2017～2018 年度在籍生)のインターン体験談 93

5-4. 坂倉(J-BINGO プロジェクト 2017～2019 年度在籍生)のインターン体験談 105

5-5. 橋本(J-BINGO プロジェクト 2018～2019 年度在籍生)のインターン体験談 119

6. おわりに 131

謝辞 132

1. はじめに

昨今では、北東アジア情勢の緊張の高まりや難民、移民問題などによる地域情勢の不安定化、マルチ外交と米中、日米などバイ外交の複雑化、環境問題のような地球的規模の課題解決の遅れなど、国際的課題が山積みである。このような国際的課題を一国政府や民間だけで解決するのは大変困難であり、国際機関が非常に重要な役割を果たしている。国際連合(以下、国連)をはじめとする国際機関は各国の分担金により成り立っており、外務省発表のデータによると、日本の国連への分担率はアメリカに次ぐ 2 位の 9.68%であり、2017 年は 244.2 百万ドル分担している。しかしながら、国際連合が 2014 年に発行した文書によると、日本からの国連本部と各機関への人的拠出は 約 790 名、全体の 2.5%にとどまっており、国際社会において日本の発言力が非常に低いという問題の原因の一つとも考えられる。日本が国際社会において大きな存在力（プレゼンス）を維持し続けるためには、資金面での貢献だけではなく、さらなる人的貢献も今後、必要になってくるだろう。

青山学院大学社会情報学部では、2015 年度に J-BINGO プロジェクトが発足した。J-BINGO プロジェクトの最終目的は、青山学院大学から国際機関における職員候補となる人材を輩出することであり、在学中に、国際機関で働く日本人職員との接触、および国際機関でのインターンシップなどを行う。

1 年生は、English Communication Ⅰ・Ⅱの授業の一環として、国際機関で働く日本人による講演会が年に複数回開催されている。2 年生は、プロジェクト演習入門Ⅰ・Ⅱにおいて、3 年生で国際機関でのインターンシップに挑戦する前段階として、国際機関についてヒアリング調査を行い、インターンシップに参加する条件等を調査する。3 年生は、プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱにおいて、学生自身の今後進みたいキャリアを踏まえて、国際機関でのインターンシップを通じた人的国際貢献を行う。

本テキストは、これから J-BINGO プロジェクトに参加する学生の今後のキャリアビジョンを描く上での参考になればとの思いから、作成している。

2. 国際的なフィールドにおいて働くとは？

「国際的なフィールドにおいて働く」という言葉を聞いて、どのようなイメージを頭に浮かべるだろうか。2017 年度の J-BINGO プロジェクトのゼミにて、皆で議論をしたところ、「英語を使って働く」、「テレビ電話をよく行っている」、「競争が激しい」、「人材の流動性が高い」、「働く人一人一人の能力が高い」「外資系企業だとクビになりやすい」などのイメージがあるようだった。昨今では、「グローバル人材」の必要性についても、多く議論されているが、実際に国際的なフィールドにおいて働くこととは、どういうことなのか。この章では、この点に焦点をおいて話を進めていく。

2017 年度の J-BINGO プロジェクトのゼミにて、皆で議論をした時には、まず、働くことを、以下の 3 つのポイントに分類した。①どこで、②誰のために、③誰と協業して働くか、の 3 つである。そうすると、働くこととは、以下の 5 つの方法があることが分かる。①国外で働く、②国内で外国のお客様のために働く、③国内で国内のお客様のために海外の人と協業して働く、④国内で国内のお客様のために海外のことを理解して働く、⑤国内で国内のお客様のために海外のこととは無関係に働く。上記に挙げた 5 つの方法のうち、4 つは海外と関わっている。海外と関わりながら働く、すなわち国際的なフィールドにおいて働くことは、今後、グローバル化が進むに連れて、全く特別なことではなく、むしろ必然的に働かなければいけない時代が迫ってきているとも言える。

本章では、所属先で分類して、例えば国連とはどういう組織か、どういう職種、仕事があるかなどを説明する。他にも分け方はあるので、自分なりの方法で、ぜひ将来就きたい仕事を見つけてほしい。

2-1. 国際機関とは何か

国際機関も、あまり聞きなれない言葉である。国際機関の定義は多数あるが、ここでは常磐大学国際学部教授・渡部茂己の考察を紹介する。

> *国際機構（次の項目で述べますが、国際機構も、国際組織、国際機関と呼ばれるものも全く同じものです）とは、国連や世界銀行や欧州連合(EU)などのように、国際社会の約束にもとづいて、各国がつくった組織体のことです。（中略）*
>
> *なお、法令上は、きちんとした定義はされておらず、「条約法に関するウィーン条約」や「国と国際機関の間及び国際機関の間の条約法に関するウィーン条約」という国際法においては、「国際機関とは、政府間機関をいう（"international organizations" means an inter-governmental organization）」との規定があるだけです。*
>
> *国際機構が、国家と違うのは機能的存在（対照的に言うならば、国家や構想上の世界連邦は、*

権力的存在）として、何か特定の目的（任務、機能、役割）が与えられており、それ以外のことをすることができないということです。

また、国際機構は、いわゆる NGO とも違います。NGO は、国際社会ではあるいは国連との関係では、国際的な組織をさしますが、それは、非政府間国際機構とか、国際民間団体などと呼ばれています。ようするに、非政府の（つまり民間の）、そして非営利の団体です。それ以上の定義をすることはできないでしょう。

『新国際機構論(上)』によると、上記の概念は狭義の国際機関であり、この考え方の中では、国連をはじめ、300 機関程度存在する。広義の定義では、赤十字国際委員会(ICRC)、アムネスティ・インターナショナル(AI)などの民間の国際協力団体(NGO：非政府間国際機関、民間団体)、国際決済銀行(BIS)のような国際共同企業、ゼネラル・モーターズのような多国籍企業(MNC または TNC)も国際機構として捉えることができる。しかし、これらの団体は、設立の基礎、組織や活動を規律する法、構成員の性格、権限や任務などが、それぞれ異なっており、同じ国際機関として扱うことは不適切である。

『新国際機構論(上)』によると、国際機関の歴史は、19 世紀前半まで遡る。近代国際社会は、18 世紀のヨーロッパに成立して以来、人々の生活は、主として国家の領域内で営まれ、国境を越える活動は例外であった。ところが 18 世紀から 19 世紀にかけて、市民革命や産業革命、交通通信技術の急速な進歩によって、人々の活動範囲は、従来の境界線に囲まれた国家の枠から、世界へと広がっていった。ヨーロッパの国々は、こうした動きに対応するため、国際秩序の再編成に 3 つの方向性を持って取り組むことになった。3 つの方向性とは、①植民地獲得などによる自国の領域の拡大、②二国間の通商航海条約の締結による通商・交流関係の拡大、③多数国間条約による共通関心事項である。これらの 3 つの方向性のうち、①と②は従来の国家の枠組みを基本的に前提とするが、③は国家間の合意を基礎とするとはいえ、国家とは別の組織を創り出し、それによって国家自身が一定の制約を受けることになり、個々の主権国家が存在する伝統的国際社会からの変革の可能性を潜在的に持つものであった。国連やユネスコに代表される国際機関は、19 世紀の国際社会に誕生したこうした動きの延長線上に捉えることができる。

表 1 代表的な国際機関

the United Nations (国連)の主要機関
- 総会
- 安全保障理事会
- 経済社会理事会
- 国際司法裁判所
- 事務局

国連の自立的補助機関
- UNEP (国連環境計画)
- UNDP (国連開発計画)
- UNICEF (国連児童基金)
- UNU (国連大学)

Specialized or Functional International Organizations／ 専門的国際機構
- FAO (国連食糧農業機関)
- IFAD (国際農業開発基金)
- ILO (国際労働機関)
- IMO(国際海事機関)
- ITO (国際電気通信連合)
- UNESCO(国連教育科学文化機関)
- WHO (世界保健機関)
- WIPO (世界知的所有権機関)
- WMO (世界気象機関)
- World Bank Group (IBRD,IDA,IFC,ICSID,MIGA)(世界銀行グループ)
- IAEA (国際原子力機関)
- ISA(国際海底機構)
- WTO(世界貿易機関)

Regional International Organizations etc.／地域的国際機構など
- EU(欧州連合)
  - ① European Parliament（欧州議会）
  - ② Council of the European Union（欧州理事会）
  - ③ European Commission（欧州委員会）
  - ④ The Court of Justice of the European Communities（欧州裁判所）
- APEC(アジア太平洋経済協力会議)
- ASEAN(東南アジア諸国連合)
- NATO(北大西洋条約機構)
- OECD(経済協力開発機構)
- OIC (イスラム会議機構)
- OPEC(石油輸出国機構)

（渡部国際機構・国際法研究所の情報を元に作成）

2-2. 国際連合で働く

国際機関は、数多く存在するがその中でも最も知名度が高いとされるのが国連である。しなしながら、国連の詳細についてはあまり知られていない。本章では、国連設立の経緯から、国連での仕事内容まで、より具体的なイメージを持てるよう説明する。

【国連設立の経緯】

国連は、1945 年 10 月 24 日に正式に発足した。その時の加盟国（原加盟国）は 51 カ国だったが、現時点では、国連加盟国の数は 193 カ国である。国連を設立しようという考えは、第二次世界大戦（1939～1945 年）の渦中で生まれた。戦争を終わらせるべく協力していた世界の指導者たちは、平和をもたらし、将来の戦争を防止するような仕組みを作る必要を強く感じていた。指導者たちは、すべての国が世界的な組織を通じて協力すれば、これは実現すると悟り、この組織となるべきものが国連だった。

【国連とは何か】

国連には、4 つ目的が存在する。その目的とは、①全世界の平和を守ること、②各国間の友好関係を発展させること、 ③貧しい人々の生活を向上させ、飢えと病気と非識字を克服し、互いの権利と自由の尊重を促進するために共同で努力すること、④各国がこれらの目的を達成できるように助けるために中心的役割を果たすこと、である。

国連は、上記の 4 つの目的のもと、各国が協議する場として設けられた。お互いの立場に対する理解を深め、話し合いによる問題解決を目指し、可能な限り合意をもとに行動することが、紛争を避けるために最善の道だからである。また、平和と安全保障の問題に限らず、社会問題や経済の分野でも、人類の幸福な未来を築くためには、異なる人びとが常に話し合いをできるような仕組みがあることが大事となる。このように、国連は基本的に主権国家同士の話し合いであり、直接行政を行わない。行政とは、例えば、道路を作ったり、福祉政策を行ったりすることであり、それは全て国の責任である。国連ですることは、例えば基本的人権とは何を目指すのか、それを護るためには何をしたら良いのか、ということを話し合い、合意し、明文化された人権宣言を護ることを約束し合い、また、毎年集まって、各国がそれを守っているかをチェックすることである。人権を護るための政策を行うことや法律を作ったりするのは、国が行うことである。国連での話し合いは、最高機関である総会をはじめとして、安全保障理事会や社会経済委員会、それらの多数の下部委員会や専門委員会で行われ、多数の決議文が作られている。これらの決議文は、主権国家である各加盟国が認識を共有することによって、一定の方向性を持った解決策を促すことができる。しかしながら、特に社会経済分野において、規範的な決議文を打ち出し、各国に解決を促すだけでは、なかなか現実問題の解決に結びつかないことが多い。そこで、国連で合意した規範を現実化させるため、いくつもの専門機関や基金が設立された。これに関しては次節で説明をする。

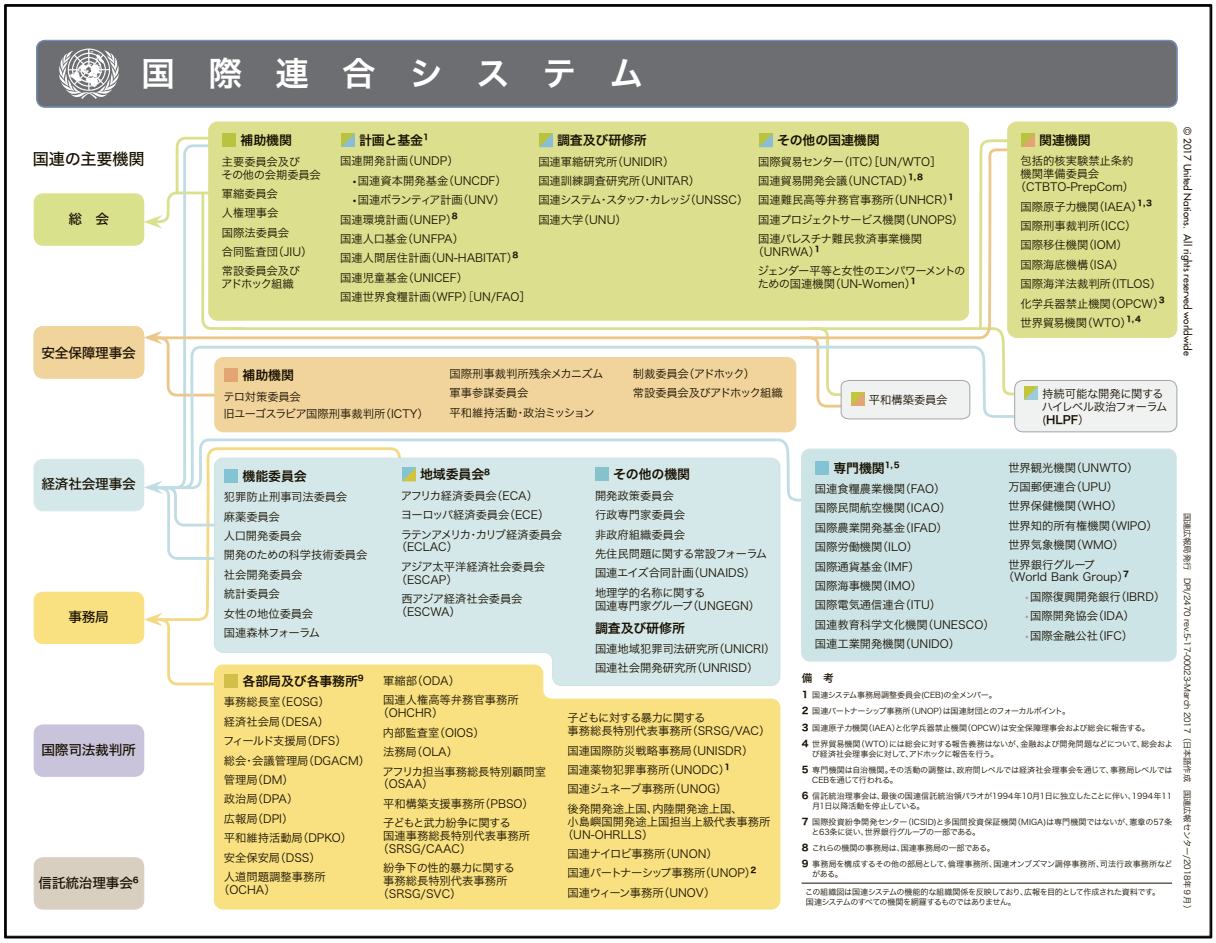
国連は主権国家同士の話し合いの場だが、これは個人や市民団体は協議に加わらず、国民を代表して

政府が参加する、ということである。しかし、国益を主張する政府の代表のみが集まっても、なかなか議論が進まないことも多々ある。そこで、特に経済や社会の分野では、色々な見方を反映させるためにも、NGO などを参加させようという動きが、最近多くなって来ており、NGO がオブザーバー(発言権はあるが議決には加われない)としての参加を認められている。NGO に求められていることは、実体験に基づいた、現場からの経験報告や問題点の指摘や分析であり、政府レベルでは見えにくい、実際的なアイデアや問題の解決策を提示してもらうことである。NGO に関しては、次節で詳しく説明する。

【国連本体とその他の国連システムに属する国際機関について】

さて、国連は合意した規範を現実化させるため、いくつもの専門機関や基金が設立されたと説明した。また、そのほかの経緯で設立された機関もあり、本章ではそれらの専門機関や基金、いわゆる「国連システム」と呼ばれている機関について説明をする。

国連の主要機関は、総会、安全保障理事会、経済社会理事会、事務局、国際司法裁判所の 5 つである。その他に、国連は合意した規範の現実化のために設立された、国連開発計画(UNDP)、国連児童基金(UNICEF)などの総会に属する機関が存在する。総会に所属している機関は、国際協力や途上国支援のため、実際の現場における援助を行っている機関や、調査及び研究を目的とした機関など、国連の自立的補助機関である。それから、専門性が高く、それぞれの分野での政府間の実質的な協議の場であり、専門性を生かしたコーディネーションや途上国に対する技術援助などを行っている専門機関が存在する。これらに分類されるのが、国連教育科学文化機構(UNESCO)や世界保健機構(WHO)、国際労働機構(ILO)などの機関である。この他には、ブレトン・ウッズ機関が存在する。ブレトン・ウッズ機関とは、開発援助では最大手の世界銀行(World Bank)グループ、マクロ経済と通貨の安定を保つために設立され、近年では通貨経済危機に陥った国の救済に使われている国際通貨基金(IMF)、貿易のルールを作り、自由化を促進するために作られた世界貿易機構(WTO)である。



（引用元：国連広報センター）

図１　国際連合システム

【国連で働く】

個人として国連に関わる方法は 2 つある。国際公務員として働く場合と、専門家として仕事を請け負う場合がある。国際公務員として働く場合は、①空席広告に応募する、②JPO 派遣制度を利用する、③YPP を利用する、の 3 つの方法が存在する(詳細については、表 2 参照)。国際連合広報センターによると、国連には、193 の加盟国出身の約 4 万 4,000 人の職員が働いている。その内訳は、世界フィールド・オペレーション：54%、地域委員会：6%、裁判所、法廷：4%、その他の勤務地：7%、本部：29%である。

専門家として働く場合は、報告書ベースとなる調査、途上国に対する技術支援など様々な仕事がある。この場合、官庁や大学、専門家の団体を通じて紹介されたり、ボランティアとして働くという手もある。ボランティアとして働く場合、国連ボランティア(UNV)や、国連と一緒に仕事をしている NGO を通じて仕事をする場合もある。

表２　日本人が国際機関職員になるための主な方法

	①空席広告	②JPO 派遣制度	③YPP
実施機関	各国際機関	外務省	国連事務局
年齢制限	特になし	35 歳以下	32 歳以下
学歴	修士号以上 (※学士号＋追加的な職歴２年で応募可能なポストもある。)	修士号以上	学士号以上 (※大学は既卒であること。大学最終学年では応募できない。)
職歴	２年以上	２年以上	問わない
ポイント	毎日多くの国際機関から様々な空席広告が出るので、随時応募することができる。	日本人の中での競争であるため、空席広告より倍率が低い。	学士号のみ、職務経験無しで応募可能。

（外務省「国際機関人事センター、国際機関で働こう！」を元に作成）

2-3. 国際 NGO で働く

【国際 NGO とは何か】

NGO とは、Non-Governmental Organization の略称で、直訳すると「非政府組織」である。NGO について国際的に統一した定義はないが、広い意味では「政府以外の全ての組織」ということになる。この意味においては企業や経済団体なども含まれることになる。しかし、実際には非営利を目的とする組織のことを指し、企業や経済団体は除かれる。「非営利」という言葉にも表れているように、NGO は基本的には営利を目的とはしない。NGO と共によく使われる言葉に NPO(Non Profit Organization:非営利組織)があるが、こちらは、企業とは一線を画し、営利を目的としない市民活動であることを明確にするために用いられることが多い。

NGO は、その活動の対象によって、例えば、環境 NGO、人権 NGO、開発 NGO などに区別される。また、その活動の形態によって、海外活動型 NGO、資金援助型 NGO、政策批判型 NGO、などに区分することもできる。国際協力分野の NGO は、途上国に対して資金援助を行ったり、物資を援助したり、人材派遣、研修員受け入れなどを行っている。また、国内向けに途上国の実情や援助の必要性を子どもたちに伝える「開発教育」を行う NGO もある。

NGO の国際協力活動において、多くの経験と歴史を有しているのは欧米諸国である。欧米においてはキリスト教による慈善の精神があり、戦前から植民地活動を通じて第三世界と接触していることもあって、古くから NGO の活動が活発であった。特に、1950 年から 60 年代にかけては、ヨーロッパが戦後復興を果たし、新興独立諸国に対する援助の必要性が叫ばれ始めた時期であり、欧米諸国において数多くの NGO が誕生している。日本も、敗戦後、多額の援助を受け入れることにより立ち直り、また、ごく最近まで日本が被援助国であったという事実は忘れてはいけない。物資が不足していた時代に、多

くの日本人を救った、ララ(LARA: Licensed Agency for Relief of Asia)物資、ケア(CARE: Cooperative for Assistance and Relief Everywhere)物資もNGOの活動の賜物である。表3に、代表的な国際NGOを示した。日本では、1961 年に、オイスカ・インターナショナルが設立されたのをきっかけに、1970 年代にかけて設立される団体が増えた。

表3 代表的な国際NGO

西欧における代表的な国際協力NGO ・ OXFAM(オックスフォード飢餓救援委員会・イギリス) ・ 世界のためのパン(ドイツ) ・ NOVIB(オランダ国際開発協力組織・オランダ) ・ CARE international(国際ケア機構・アメリカ) 日本における代表的な国際協力NGO ・ オイスカ・インターナショナル ・ 日本赤十字社 ・ シャプラニール=市民による海外協力の会 ・ シャンティ国際ボランティア会

(「浜野隆著『国際協力論入門 -地域と世界の共生-』を元に作成)

【国際NGOで働く】

国際NGOで働く方法は、国内と海外の主に2つに分けられる。国内である仕事としては、総務(総会や理事会の開催、年次報告書の作成、会員サービスなど)・会計、 広報(イベントの企画・会報の編集など)、資金調達(募金プログラムの作成や補助金、助成金の申請など)、 プロジェクトの企画立案やモニタリングなどある。海外では、プロジェクトの立案～実施・運営～事後評価、政府・国際機関や他のNGOとの交渉・調整、現地採用スタッフの雇用に関わる業務が存在する。

2-4. 民間企業で働く

民間企業とは、政府、国連、NGO 以外の、営利目的の経済団体である。民間企業は、日本の学生が、大学在学時に就職活動において目指し、進む先として、最も多い分類だと考える。国際機関やNGO 以外にも、表 4 のように国際的な舞台で活躍できる仕事は多く存在する。また、国際的なフィールドにおいて働くというと、どうしても外資系の企業をイメージしがちだが、国内企業でも、海外と関わる職種は数多い。加えて、国際開発・国際協力の分野における活動をしている民間企業もある。国際開発・国際協力への関わり方は様々で、企業の CSR 活動の一環や民間の開発コンサルティング企業など、事業そのものが国際協力だったり、国際開発・国際協力の人材育成を行っている民間企業も存在する。

表４　国際的なフィールドにおける代表的な業務、職種および職務内容

業種	職種		職務内容
多くの業種に共通な職種	1	海外戦略・海外事業企画	全社戦略を踏まえ、海外での研究開発・生産・販売などと行った事業展開や経営戦略を企画・立案する。
	2	(国内企業の) 海外マーケティング戦略策定	海外の市場ニーズを分析し、市場環境の変化等も踏まえて商品の販売方針を策定し、営業部門に指示・浸透させる。
	3	(外資系企業の) 海外マーケティング戦略策定	海外本社の意向と国内の市場・ニーズを双方反映させた商品・販促企画を行い、海外本社との情報共有・伝達、マーケット情報の伝達を行う。
	4	海外営業	海外市場でマーケティング戦略を実行し、新規顧客の開拓、顧客との信頼関係構築による取引拡大等の販売活動を行う。
	5	資材・調達・購買	海外調達先を選定・交渉し、生産に必要な資材の数量を検討し、適切なタイミング、品質、価格、納期で海外から購入、調達する。
	6	国際ロジスティックス (物流)	原材料の調達から生産・在庫・販売にいたる海外流通のプランを策定し、通関・各種手続き等の業務プロセスを管理する。
	7	国際会計/財務	国際的会計基準に基づき、海外企業との取引、外資系企業との提携、資金調達等に関する会計・財務業務、その他業務を担う。
	8	国際法務/税務	売買契約、金融取引など海外ビジネスに必要な法律知識を持ち、交渉、契約書作成、訴訟業務などについて、法的処理や書面発行・管理などを行う。
	9	知財・ライセンス	海外での特許取得、特許侵害訴訟、ライセンス導入、クロスライセンスなど知財に関わる戦略策定・実務を弁護士の協力を得て行う。
	10	国際人事	海外での現地採用や国内での外国人採用などにおける、採用方法、雇用条件、給与・報酬・人事考課などの基準策定や労務管理などを行う。
	11	戦略的M&A	法令、定款、社会的規範、業界団体のガイドライン等の関係規則に従い、M&Aの提案・交渉を実施する。
製造業・建設業	12	海外企業への委託研究開発、共同開発	製品開発を海外企業に委託する際、国内本社との情報共有、開発環境の共通化、セキュリティ対策などを行う。
	13	海外工場・インフラ施設の施工	海外に工場・電力・インフラ等のプラントを建設し、安定稼働させる。各プロジェクトの人員・収支・工程管理のマネジメントを行う。
	14	海外事業所・工場のマネジメント、スタッフ管理	海外事業所における、工場生産、営業、財務などを掌握し、現地の意向も汲んだスタッフ体制を確立し、マネジメントを行う。
	15	現地工場の生産技術責任者 (エンジニアリングマネージャー)	国内の専門技術、生産ラインのオペレーション、企業経営方針等を海外の現地スタッフに指導し、生産体制を確立する。
	16	海外工場での生産管理・品質管理	海外の現地工場で生産する商品の生産計画を策定・管理する。また生産コスト、商品の歩留まり実績管理、品質不良の改善策等を検討・実施する。
	17	海外工場・事業所などでの財務・経理管理	現地の税法、商習慣等理解し、経理業務、財務会計、生産コスト・人件費等の管理会計業務全般を行う。
金融・サービス業	18	海外拠点、店舗・事務所における責任者	海外拠点等の責任者として、業務オペレーション伝達、現地スタッフの教育、経営戦略の立案と実施、国内本社や地域統括部門への報告等を行う。
	19	運輸・倉庫事業の現地事務所の責任者	海外事務所の責任者として、現地と現地、現地と日本の物流にかかわる諸業務の管理、現地スタッフの管理等を行う。
	20	海外事業展開の支援(銀行)	企業の海外事業展開に対して、財務戦略、為替リスク、事業戦略などのコンサルティングや業務サポート、資金的ソリューションの提案を行う。
国際開発・国際協力	21	プロジェクトの企画・管理運営、評価	海外プロジェクトを企画し、適切にプロジェクト評価を行いフィードバックして、プロジェクト管理運営する。
	22	個別分野の専門家	いずれかの分野(ローテクからハイテクまで、行政から研究分野まで)の専門知識と国際経験を持ち、国際機関や海外プロジェクトの業務を遂行する。

（友松篤信編　『グローバルキャリア教育：グローバル人材の育成』を元に作成）

【主な参考文献】

・ NGO 活動教育研究センター編『国際協力の地平―21 世紀に生きる若者へのメッセージ』昭和堂 2002 年

・ 関西 NGO 協議会「国際協力に関する進路・就職」 http://kansaingo.net/study/job/ 2019 年 1 月 20 日アクセス

・ 外務省国際機関人事センター「国際機関で働こう！」 https://www.mofa-irc.go.jp/dl-data/2019brochure.pdf 2019 年 1 月 31 日アクセス

・ 国連広報局「国連のここが知りたい(中学・高校生向け)」http://www.unic.or.jp/files/about_un.pdf 2019 年 1 月 20 日アクセス

・ 国連広報センター「国連の職員とは」 http://www.unic.or.jp/working_at_un/un_staff/ 2019 年 1 月 20 日アクセス

・ 友松篤信編『グローバルキャリア教育：グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版　2012 年

・ 浜野隆著『国際協力論入門 –地域と世界の共生–』角川学芸出版　2002 年

・ 横田洋三著『新国際機構論(上)』国際書院　2006 年

・ 渡部国際機構・国際法研究所　『「国際機構」とは？　(国際機構の概念)』 http://www.swatanabe.com/ios.htm 2019 年 1 月 20 日アクセス

3. 国際的なフィールドで活躍する人々のキャリアパス

国際的なフィールドにおいて活躍している、日本人のキャリアパスと必要とされる能力や経験について把握するため、インタビュー調査を行った。調査対象は、国際機関(国連、国際 NGO 等)、民間企業などで働く 10 名である(表 5 参照)。

表5 取材者リスト

1. 国連工業開発機関(UNIDO) – 村上秀樹氏
2. 経済協力開発機構(OECD) – 村上由美子氏
3. 国際移住機関(IOM) – 佐藤美央氏
4. 国際協力機構(JICA) – 梅本真司氏
5. 国境なき医師団日本(MSF) – 今城大輔氏
6. アイ・シー・ネット- 野間口剛氏
7. プロジェクトアブロード – 木村洋平氏
8. Selan – 樋口亜希氏
9. White Star Capital 等 – 長尾俊介氏
10. 牧浦土雅氏

調査は、J-BINGO のプロジェクトの講演会で講演をされた方、日本最大の国際協力イベントである「グローバルフェスタ JAPAN 2018」でお会いした方などに依頼をした。

インタビューは、3 つのパートに分類して実施した。3 つのパートとは、①現在の仕事内容、②現在までの経験(学生時代の経験、前職、海外経験など)、③将来国際的に働きたい学生へのアドバイスである(図 2、3 参照)。キャリアパスに関しては、本章に記載する。国際的に働くために必要な経験や能力に関しては、調査結果を第 4 章にて記載する。

取材内容

① 現在の仕事について
- 現在の仕事内容について(目標、KPI 等)
- 現在のポジションについて（肩書き、ミッション等)
- 現在働いている組織について(日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)
- 現在の仕事上で成功したこと、失敗したこと
- 現在の仕事を通じて学んだこと

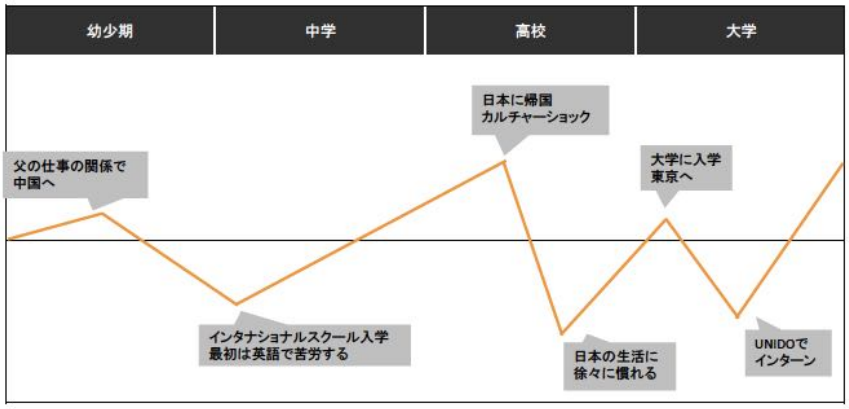
② 現在までの経験について
- 海外経験について
  (幼少期、学生時代、社会人の期間における滞在国、学校、海外旅行、課外活動、使用言語、取得資格等)

解答例

	滞在国(留学・転勤等)	学校(インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動(ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
幼少期～中学	日本(~5歳) 中国(5歳~16歳)	日本人学校→インター	香港、マレーシア、フィリピン、ベトナム		中国語、英語、日本語	中国語検定3級
高校	中国(～高2、計11年) 日本(高2～3、1年半)	インター→ 公立高校普通科			中国語、英語、日本語	英検準1級
大学	日本	青山学院大学 社会情報学部	中国、タイ	UNIDO インターン(広報)	日本語、英語	TOEIC945点
社会人						

- 現在までの人生のグラフ
  (挑戦、決断をしたきっかけ、理由、悩み、決断をする際の軸、学んだこと、成功経験、失敗経験などを、お話しを伺いながら、私の方で記入し、確認していただいた後に、ガイドに掲載する予定です。)

解答例



- 日本人であることのメリット、デメリット

図2　取材内容(ページ1)

③ 将来国際的に働くことを目指している若者へ

- 国際的に働くために必要な能力とは何だと思いますか？
- 学生時代にやっておいた方が良いことは何だと思いますか？
- 学生へメッセージをお願いします。

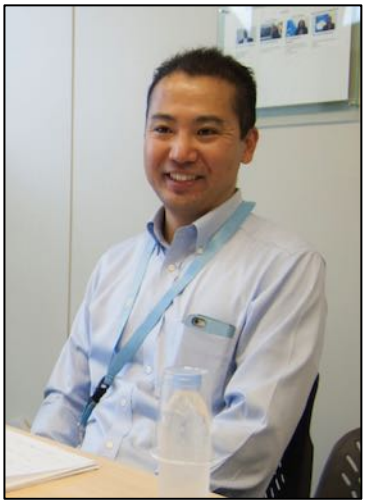
図 3 取材内容(ページ 2)

Interview1:UNIDO 東京事務所次長 - 村上秀樹

“好きこそ物の上手なれ“

● PROFILE

1975 年、熊本県生まれ。1999 年、東京大学教養学部卒業。卒業後、電機メーカーで海外マーケティングなどを担当し 3 年近く勤務。その後、2003 年に米・インディアナ大学大学院公共経営修士課程修了。大学院在学中には、国連工業開発機関ウィーン本部にてインターンシップを経験。卒業後は、開発コンサルティング会社勤務を経て、2013 年より国連工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所次長。



● PART1: 現在の仕事について

Q. 現在の仕事内容について

UNIDOとは、産業という分野からの途上国支援を専門的に行っています。UNIDO全体の職員のうち、8割が本部のウィーン(オーストリア)に、残りの2割の人たち本部以外の国で活動しています。東京のUNIDOオフィスもその一部です。

UNIDOのウィーン本部の活動は、3つに分けることができます。一つ目は、途上国で生産された農作物に加工などをして付加価値をつけて、流通できるようにすることです。二つ目は、各国の基準を満たすよう農作物を生産し、輸出をできるようにするという貿易支援です。そして三つ目が、クリーンな開発の支援です。日本でも昔公害とともに発展してきたという歴史がありますが、途上国では同じことを繰り返さないよう、新しい機械や技術を導入する際に、なるべく省エネのものや、太陽光を使ってみたりしています。以上が UNIDO の大きな3つの柱で、それをウィーンの本部が行っています。

東京オフィスの仕事内容は、その 3 つの全てに関わります。産業が途上国で発展する一つのきっかけというのは、先進国の企業が途上国でビジネスを展開することです。日本企業が途上国に進出して、ビジネスを展開して、利益を得ながら日本の技術を使ってもらったり、日本の人作りや物作りなども途上国に導入してもらう

といった技術移転を後押ししている活動をしているのが東京の事務所になります。

Q. 現在の仕事の目標について

私たちの直接的な目標は、やはり一社でも多くの日本企業に、途上国に海外展開してもらうことです。ですが、最終的に目指しているのは、活動を通じて途上国に多くの仕事が生まれ、途上国の人たちが貧しさから抜けれる手伝いをすることです。

Q. 現在のポジションについて(肩書き、ミッション等)

次長なので、マネジメントをメインに行っています。一方で、私はドナー担当という重要なポジションにもついています。ドナー担当とは、政府とのつなぎ役です。国連は、政府機関との深いつながりが重要なところがあります。日本の場合、日本政府から予算を頂戴しているので、日本政府に活動内容などの説明責任があります。

Q.現在働いている組織について(日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)

フルタイムの職員は10名ほどです。国連の動き方というのは自由なので、他に職業があって、個人コンサルタントとしてUNIDOの活動を週1ペースという雇用の仕方もできます。なので、そういう方を含めると15名ほどになります。外国人は副所長の1人だけになります。周りの国連機関の東京オフィスを見てみると、UNIDOは外国人スタッフはいる方で、全員日本人という機関の方が多いと思います。

やはり日本にある国連機関は、一般の日本人向けに広報をしたり、政府とのやりとりを日本語でしなければいけません。日本は、全て日本語で完結している国なので、相当日本語ができる外国人でも厳しいと言われて言います。なので、スタッフは、ほぼ日本人で構成されています。応募要件には、英語と日本語が流暢に話せることが必須と日本のオフィスの場合は書かれているので、いくら優秀な外国人でも日本語が話せない人は難しいというのが現状になります。ただ、それは日本人にとっては有利であると考えていて、インターンも同じで、海外の国連機関の事務所に応募するというのはハードルが高いと思いますが、日本のオフィスでは、日本語が母国語の人を採用しやすいというのはありますね。日本オフィスはすごく特殊な環境だと思います。ウィーンのUNIDOの本部に2年間ほどいたことがあるのですが、もちろん世界中から人が集まっており,日本人は一握りしかいないので、基本的には英語でやりとりをしていました。

Q.現在の仕事上で成功したこと、失敗したこと

日本の企業が途上国に進出するということは、簡単ではありません。私はこのオフィスに来て6年目なのですが、来てから種を蒔いていたものが、4、5年経って、ようやくうまく行き始めたことは、とても嬉しく、成功したことの一つだと思います。

逆に失敗したことは、たくさんあります。強いていうならば、私たちは橋渡し役なので、UNIDOとしてやりたいことがあるけれども、日本企業のそれとは必ずしも合致しないこともあります。またもっと良くないのは、本当に途上国のためになっているのか、望んでいるのかというところです。失敗というレベルで悲惨に終わったことはないのですが、やはり現地の声をちゃんと聞くというのは、面倒臭いし、大変なんですが、そこを逃すと良い支援にはならないと思います。かつ、私たちは日本にいて、日本人で、日本企業の思いとかも聞くので、なんとかこの企業のためにと思ってしまうのですが、最終的には途上国のためにならないと意味がありません。出して側、受けて側のバランスというか、どちらかというと受け手側に心を寄り添わないといけないと活動の中で感じますし、そこをおろそかにすると、すぐに失敗してしまうかなと思います。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

そこから学んだことは、人の話を聞くということですね。何をして欲しいのか、もちろんUNIDOとしてやりたいという思いもあるので、そこをもちろん大事で、UNIDOが全くやれないことはできないので、そこももちろんあるのですが、ただ日本側がやりたいこと、途上国側がしてほしいこと、そこを見失わないようにして、みなさんの声を聞いて、役に立つ支援をするということです。

● PART2：現在までの経験

Q.今までの経験について

幼少期から高校までは熊本で育ちました。英語が好きだったので、英語塾に入っていて、将来は英語を使って仕事ができたら良いと思っていました。大学では、3年生の時にイギリスに1ヶ月語学留学に行き、授業ではかなり英語の授業を選択できる学部だったので、3分の2くらいは英語の授業で、卒論を学部生ながらも英語で書かなければいけない研究室に所属していました。その当時、国際的な仕事がしたいと思っていて、JICAなどの話を聞きに行ったりもしました。しかし、すぐに就職しようとは思えず、世界的に展開をしている企業

が多い自動車か、電機メーカーを考えていました。そして運よく松下電器(現・パナソニック)から内定をもらうことができました。その時までに、英語が武器になればと思って、在学中にTOEIC990点を取得しました。 松下電器には、3年程勤めました。入社当初から海外営業や海外マーケティングなどを希望していて、運よく配属されました。また当時は、入社2年目を前にして2年間海外に派遣され、仕事ももちろんですが、その国の言葉を習得するという新入社員プログラムがありました。内定者の中でさらに選考があったのですが。 運良く選ばれて1年目の冬からドイツに行くことになりました。プログラムのメンバー10人のうち半分以上は英語圏の派遣だったのですが、大学時代に第二外国語で勉強していたドイツを希望し、日本に帰ってくる頃には英語よりもドイツ語の方が遥かに得意になっていました。

僕が今までの経験の間で一番大きい経験は、やはり新卒で入社した松下電器を辞めたということです。松下電器は僕に活躍するかも分からないのに、 入社1年目から海外へ派遣してくれるなどの投資してくれたのに、裏切るような形でやめていいのかと散々悩みました。なぜ辞める決断をしたかというと、やはり松下電器は民間企業であり、ボランティアではないので、切り捨てなければいけないお客さんがいました。それは、当たり前のビジネスの判断ではあるのですが、そういうのを何回か目の当たりにしているうちに、本当はやって欲しい人に何もしてあげられずに、故置されて終わっちゃうというジレンマを抱くようになりました。そのようなことを繰り返すうちに、自分はこういう取り残された人たちのために何かをしたいと思うようになり、転職を考えるようになりました。迷ったのですが、最終的には、やはり一回きりの人生だし、3年間働いたから自分がやりたいこと、やりたくないことも見えてきたというのもあったので、うまく行くかはわからないけど、その思う方向に行こうと思い、辞める決断をしました。

松下電器をやめた後は、まずは国連を目指し、大学院に進学することにしました。前職を通してドイツ語を習得したのですが、英語圏に行って英語をブラッシュアップしようと思い、アメリカの大学院で公共政策を勉強することにしました。大学院では、語学力も伸びましたし、勉強した内容も今も直接的に使える内容でした。 語学に関しては、山ほど英語で書かされて、読んで聞いてディスカッションさせられ相当鍛えられました。公 共政策というのは、政府に入りたい人が多くいる分野なのですが、政府に入ったときに必要なこと、例えば上 司への報告の書き方、新しいプロジェクトの目標設定、コストの算出、評価方法なども学ぶことができ、国連の仕事にすぐに役立ちました。僕が大学院で一番よかったと思うののが。卒業に、修士論文の代わり

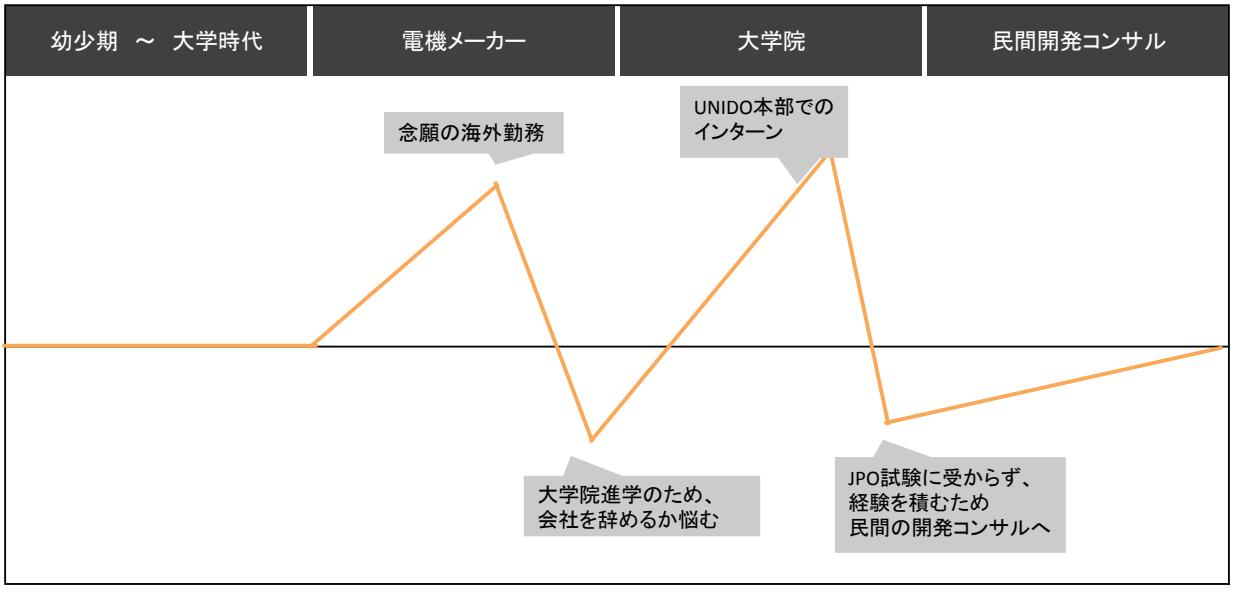
にインターンシップが必須だったことです。アメリカの大学は夏休みが長いのですが、僕の大学院では7週間以上のインターンが卒業条件でした。周りの日本から来ていた留学生は、日本に帰国して開発コンサルティングの会社やJICAに受け入れてもらったり,アメリカの町役場でインターンをしていたのですが、僕は国連に入ることを目指していたので、国連機関に応募しました。そして、UNIDOから返事がきて3ヶ月ウィーンの本部でインターンをしました。インターンをやってよかったのは、国連ってどういう人たちが何をしているかというのは外から見ると中々わからないのですが、意外と普通の人が普通の仕事をしているということがわかり、もう少し経験を積んで帰って来れば、自分も国連職員として働けそうというイメージを持つことができたことです。英語もどれくらいすごいのだろうと思っていたのですが、アメリカで散々英語を受けていたので、仕事をしてみるとこのレベルで大丈夫で、仕事もできそうというのを感じることができました。

	滞在国 (留学・転勤等)	学校 (インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動 (ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
幼少期～中学	日本	熊本県			日本語	
高校	日本	熊本県			日本語	
大学	日本	東京大学 卒論を英語で執筆	ヨーロッパ・ 東南アジア	語学留学(イギリス)	日本語	TOEIC 930点
社会人	日本	電機メーカー			日本語	
社会人	ドイツ・ベルリン	電機メーカー			ドイツ語	
社会人	日本	電機メーカー			日本語	
大学院	アメリカ・インディアナ	インディアナ大学院・MPA		UNIDO本部 (ウィーン)でインターン	英語	
社会人	日本、ナイジェリア、東南アジアなど	開発コンサルティング			英語	
社会人	東京	UNIDO			日本語、英語	

インターンを終えて、卒業して、JPO試験を受けていたのですが、なかなか受かりませんでした。この時期が、人生で2番目に辛かった時期です。JPG試験の応募要件は、職歴2年以上と修士号で、その当時僕は民間企業でのビジネス経験が4年ほどあって、修士号をとっていたので、要件は満たしていました。JPO試験は修士号から取れそうな年から受けることができるのですが、その年は、筆記試験は合格だったのですが、面接で落ちてしまい、プランが崩れてしまいました。そこで次のステップとして進んだのが、開発支援コンサルタントという業界でした。この業界は、JICAの途上国支援を実際に請け負っている業界で、JICAの職員がプロジェクトをデザインし、開発コンサルタントの人たちが実際に現地に行ってプロジェクトを行っています。なぜJPG試験に不合格だったかを考えた時に、ライバルと比べた時に、途上国支援をしたいと志で進んで来

たけど、実際の経験はなかったので、開発コンサルタントという仕事を通じて、現場の最前線にいけると思い、方向転換しました。

最終的には、その開発コンサルティングの会社には2年くらい務めましたが、JPO試験には毎年こっそり応募していました。2年の間には、アフリカや東南アジアなどの現場にいかせてもらって、JICAの支援の現実を見ることができました。それで、3回目のJPO試験の時に、民間企業での就業経験や途上国での経験も話して、合格することができました。そこから、ほかの国連機関に行くという選択肢もあったのですが、大学院時代にインターンをしたUNIOで仕事をしたいと思っていたので、ウィーン本部で働き、その後ナイジェリアに1年行き、東京に戻って来て6年になります。



Q. 日本人であることのメリット・デメリット

よく日本人は控えめと言われます。国際的な競争だと、私はこんなにできるという、すごいアピールの履歴書が多い中で、日本人はやったことを本当に実直にいうので、アピール力で負けてしまうというのがあります。 また、それを十分に伝えるだけの語学力においても、若干他の国籍のライバルに比べると難点があるかなと思います。

メリットは、職場に入って仕事をすると、普通にしていて優秀なところだと思います。日本の企業には、新入社員研修が当たり前にありますが、海外の企業は新入社員のトレーニングしてくれません。海外はできる人が入って、与えられたことをやるというカルチャーです。新入社員研修などはないので、時間を守るとか、進

歩状況を報告するとか。社会人になったら当たり前のことをやっているだけで、本当に海外の優秀な人とか、有名大学を出ている人でもやらないので、優秀だと評価されています。

他にもあげるとするならば、チームワークや耐力があるのもメリットだと思います。期日などのプレッシャーに脆いエリートが多いです。日本人だと、いつまでにこれをやって、ということに耐える根性はあると思います。普通に日本で社会人経験を積んで、国連に入ったら、能力が高いと認められます。なので、逆にどうやって入るかが問題で、バンバン盛っている外国人に勝たないといけないので、どのようにそこを突破するかを考えるのが戦略なのかなと思います。そこでいくとやはりJPOは良い制度で、日本政府が送り込んでくれるので、なのでその間に普通に仕事をしていたら、とても優秀で、若いのにとても仕事ができると言われると思います。日本人からして見たら、普通に仕事をしているだけなのですが。そういうルートで入るのが一番いいと思います。

● PART3：将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

外務省がやっている国連の就職セミナーで一番言われているのは、専門性が必要と言われているんですね。欧米のカルチャーでは、これができる人を募集しますという感じなので、日本のカルチャーでは非常に言辛いと思うんですが、でも言わされるんですね。なので、自分が何をやりたくて、何が得意なのかを持ち続けるのが一番重要だと思います。ただ、それに加えてコミュニケーション能力とか語学力とかは重要です。日本にいながら、語学力を伸ばすというのは非常に難しいことだと思うのですが、努力が必要です。あと、国連で働く人の素養としては、これはその人そのものの能力なので難しい部分はあるのですが、その人の人格とか性格がやっぱりあるのかなと思います。一番必要なのは、柔軟性で、少々のことでは驚かないとか根性があるとかですね。国連では様々な国籍で、文化も宗教も様々な人たちが集まって仕事をするので、なかなか分かり合えないこともしばしばあるのですが、そういう時に忍耐力とか柔軟性とか重要なのかなと思います。

Q.学生へのメッセージ

学生時代から国際協力や国連に淡い憧れみたいなのがあって、民間企業に務めてもやっぱりあるので、方

向転換した方がしたいという若い社会人の方の相談も受けるのですが、彼らが口を合わせていうのが、学生時代にこれをしておけばよかったって言うんですね。就職して初めて気づいたというのもあるんですが、なので、一つ学生のみなさんに言えることは、学生時代は時間が山ほどある。社会人になったらほとんどないよというのは言えると思います。自分でちょっとこれ勉強してみようとか、ちょっとこれやってみようとか、そういうのはできないんですね。勉強したいし、英語もやらなきゃ、社会人になって務めた企業が忙しいと、疲れて帰ってきて寝るだけなのが月曜から金曜で、土日はそんな元気ないみたいな感じにもなってしまうので、今やりたいことがあるのであれば、今やったほうがいいと思います。もちろん学生さんだって、授業に出て単位を 取らないといけないので、暇ではないと思うのですが、やっぱり語学も、社会人になると時間取れないので、みっちりやるなら、学生時代にやるのもいいと思います。時間は大切ですよ。

Interview 2 :OECD 東京センター所長 - 村上由美子

“大事なのは異質なものを受け入れるマインド “

● PROFILE

1965 年生まれ、島根県出身。1987 年上智大学外国語学部卒業。1989 年米・スタンフォード大学大学院国際関係学修士課程修了。卒業後、国連にて 4 年勤務。その後 1994 年に、米・ハーバード大学大学院経営学修士課程修了。同年、ゴールドマン・サックス本社に入社、15 年勤務。クレディ・スイスを経て、2013 年に民間企業出身者初の OECD 所長に就任。

● PART1: 現在の仕事について

Q.現在の仕事内容について

現在は OECD 東京オフィスにて所長として働いています。東京オフィスは、日本とアジア諸国を担当しており、その割合は 7:3 ほどです。東京オフィスのステークホルダーは、政府機関、民間企業、アカデミア、メディアなど多数に渡ります。例えば、経済の分野であれば経済産業省、教育の分野では文部科学省、環境の分野では環境省など。G20 であれば外務省が中心となって調整をしているので、外務省。そして、政府だけではなく、民間企業やプレスなどとも、色々な形で接触があります。

仕事の内容は、一言で言うと、「ステークホルダーにとって有効な、あるいは興味のある分野の政策を議論すること」です。OECD は経済がらみの分野を全てカバーしているため、様々な分野で政策提言をしています。政策提言という言葉は、あまり聞きなれない言葉かもしれませんが、簡単な言葉で言うとポリシーを作ることです。ポリシーを作るために、様々な議論をすることが私たちの仕事であり、議論のベースとなる統計を取ったり、国際比較できるような形で比較をし、それに基づいた分析をしています。

Q.現在の仕事の目標について

OECD の仕事は政策を作る仕事ではなく、それを手伝う立場なので、例えば GDP を 2%上げるなどそういっ

た数値的な目標はありません。

Q.現在のポジションについて(肩書き、ミッション等)

現在は、自分が東京オフィスの代表なので、もちろん私のチームが準備段階における色々なインプットはしているのですが、様々なステークホルダーと直接話し合いをすることが多いです。

Q.現在働いている組織について(日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)

OECD 東京オフィスのスタッフは全員日本人です。東京におけるスタッフ募集の要件は、OECD 加盟国の国籍を所持していること、高い日本語能力があることの 2 つになります。オフィスのスタッフが全員日本人であることの理由としてあげられるのが、要件の 2 つ目の高い日本語能力が必要とされていることです。日本人以外の国籍の人で応募される方はいますが、言語の部分において厳しいため、現実的には中々採用まで至らないです。また、語学試験の結果での基準を特に設けているわけではないですが、面接や筆記の試験で、ネイティブとノンネイティブとでは、やはり差が出てしまいます。OECD の公用語は英語とフランス語です。そのため、スタッフはどちらかの言語がネイティブレベルである必要があります。東京オフィスのスタッフはもちろん全員バイリンガルで、オフィスの中でもメールは英語でやり取りをしています。日本語でメールをしていると、東京オフィス以外とコミュニケーションする際に、書き直さなければいけないため、二度手間になってしまいます。なので 9 割以上のメールは英語で、外部の日本人に出すメールのみ日本語です。

Q.現在の仕事上で成功したこと、失敗したこと

両方ともたくさんあります。いつも試行錯誤で何度も間違えて、失敗して、3、4 回やって、5 回目に成功というのがしょっちゅうです。

その中でも成功したこと、どちらかと言ったらうまくいったことをお話するならば、国際租税や金融市場におけるコーポレートガバナンスコードなど、民間企業とタッグを組んでやる仕事において、もともと私自身民間企業出身であり、バンカーだったので、メンタリティの部分とテクニカルの部分両方で、波長があったことだと思います。OECD は公的機関なので、民間企業を巻き込んで仕事をするという場面で、文化の違いを含めて壁のあったところを、うまく取り除くことができ、うまく連携することができたと思います。

逆に苦労したことは、OECD の仕事はディプロマティックな世界なので、表面化する前にいかに水面下で調整することが思っていたよりも重要だったということです。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

国際社会における日本という国をみると、日本の持っている知見などは、世界に比べると非常にレベルが高く、相対的に見ても世界のトップだと思えるようなものがたくさんあります。しかしながら、それを対外発信していくことがうまくできていないと私は思います。海外の国々、国際的な舞台において、うまくアピールすることができていないので、そのところに関してはかなり伸び代があり、色々なやり方や工夫をすれば、さらに化けるのではないでしょうか。

● PART2：現在までの経験

Q.今までの経験について

大学までは、日本の普通の一般的な教育を受けてきました。大学は上智大学だったのですけれども、帰国子女でもありませんし、他の人たちに比べて特に変わった教育を受けた訳ではなかったです。しかし、上智大学は英語の講義がたくさん受けれるので、そういう意味では一般的な大学よりも、英語や国際関係論などの、エクスポージャーはあったかもしれません。上智にいたときに、よくバックパッカーで色々な国に行き、そこで知らなかった世界や文化に触れ、もっと知りたいという気持ちになりました。そこから漠然と国際的な仕事が面白そうだなと思い、そういう発想から、そういう分野をもっと勉強しようと思いました。

上智大学を卒業した後に、企業には就職せず、すぐスタンフォード大学院(カルフォルニア)に留学しました。それは修士課程で、2年間国際関係、国際関係の中でも経済、開発経済を中心に勉強しました。アメリカの大学の夏休みは長いので、インターンシップなどに参加するのですが、私は1年目と2年目の間の夏休みに、ニューヨークの国連のインターンシップを1ヶ月半～2ヶ月ほどしました。夏休みを経て、2年目にスタンフォードに戻った時に、国連の仕事が面白そうだなと思って、国連を目指して、卒業後に入りました。

国連に入ったときは、JPO(Junior Professor Offier)派遣制度というものを通して入りました。卒業直後に、UNDP(国連開発計画)に配属されました。UNDPでの最初の赴任地は、バルバドスでした。バルバドスは聞いたことがなかったので、どこかわからなかったのですが、とりあえず行きますと言いました。バルバドスという東カリブ海の小さい島国で、1年ちょっと仕事をしました。その後は、ニューヨークの国連本部に移りまし

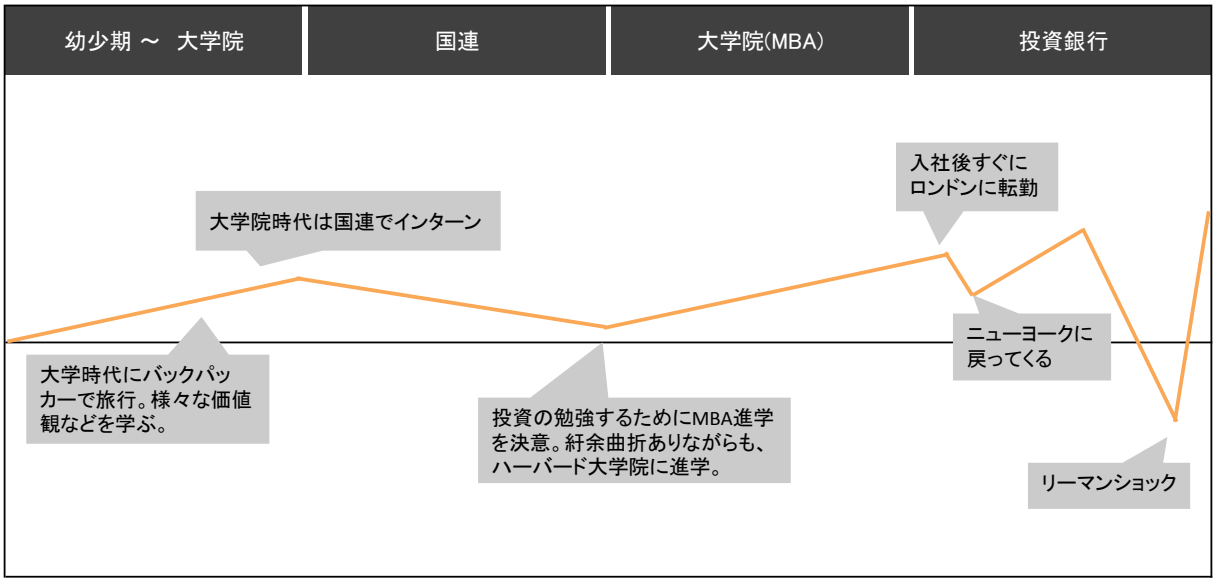
た。そのあたりくらいから、UNDP の仕事をしている時に、結構民間の投資を誘致することがあったので、民間の投資の仕組みに関して全然わかっていないということを感じ始め、お金がどのように流れるのかというのを自分が理解しないまま誘致するというのは違うと思ったので、勉強したいと思い始めました。

民間の金融機関などに入って勉強したいと思った時に、国連の仕事でニューヨークにいたので、投資銀行などに履歴書(レジュメ)を送ったのですが、ほとんど門前払いで、「あなたの経験は面白い、変わっているかもしれないけど、銀行や投資のことをわかっていないようなので、ビジネススクールに行った方がいいかもしれない」と言われました。その時に、ビジネススクールというオプションを考えはじめ、アプリケーションなどを準備し始めました。

	滞在国(留学・転勤等)	学校(インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動 (ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
幼少期～中学	日本				日本語	
高校	日本				日本語	
大学	日本	上智大学	バックパッカー		日本語、英語	
大学院	アメリカ	スタンフォード大学院		国連本部でのインターンシップ	英語	MA
社会人	バルバドス	UNDP			英語	JPO制度
社会人	アメリカ・ニューヨーク	国連本部			英語	
社会人	カンボジア	平和維持軍			英語	
大学院	アメリカ・ボストン	ハーバード大学院			英語	MBA
社会人	アメリカ・ニューヨーク	ゴールドマンサックス			英語	
社会人	イギリス・ロンドン	ゴールドマンサックス			英語	
社会人	アメリカ・ニューヨーク	ゴールドマンサックス			英語	
社会人	日本・東京	ゴールドマンサックス			日本語、英語	
社会人	日本・東京	クレディ・スイス			日本語、英語	
社会人	日本・東京	OECD			日本語、英語	

アプリケーションなどを準備し終え、提出する段階の時に、突然国連にあなたはカンボジアにいけますかと打診されました。カンボジアなんて、想定していなかったので、ちょっと驚きましたが、面白そうだと思い行きました。その当時、カンボジアには国連最大の平和維持軍が送られていて、カンボジアの内戦がちょうど終わったタイミングだったので、そこで国連の平和維持軍が入っていて、暫定的にカンボジアを統治するということが決まっていました。私のように、軍人ではなく、民間人という立場も行くということになり、10 ヶ月ほ

どカンボジアに行きました。それはそれでとても面白く、もっと長くいたかったのですが、ニューヨーク時代にアプリケーションを出していたビジネススクールから返事がきて、ハーバードが奨学金も全部用意してくれていたので、国連をやめて、ボストンにあるハーバードビジネススクールに行きました。



ハーバードビジネススクールでは、2年間MBAのプログラムで学びました。MBAのプログラムを終了した後は、アメリカに本社のあるゴールドマンサックスに入ったのですが、本社採用だったので、本社に入って仕事をすると理解していました。しかし、入社して半年くらいで、景気が悪化して、状況が急変し、リストラが始まりました。私はリストラはされなかったのですが、人の動きがあって、ロンドンへの転勤を打診されました。ロンドンは行ったことはありましたが、友達や家族などはおらず、あまり行きたくはなかったのですが、そこで断ったらリストラされると思い、ロンドンに行くことを決めました。なのでゴールドマンサックスでの最初の3年間は、ロンドンでした。

その後ニューヨークの本社に戻り10年以上、仕事をしました。その間に、「あなたは日本人で日本語ができるので、東京にオフィスに行きませんか」と何回も言われました。しかし、主人はアメリカ人でなかなか簡単にいかなかったので、毎回お断りしていました。そのうち、モルガン・スタンレーで働いていた主人にも、海外にいかないかという話があり、二人で行くのもいいかもとなり、私は東京に、主人は香港に転勤になりました。本当は主人はすぐ東京のオフィスに移ると思っていたのですが、リーマンショックがあり、転勤云々とい

う話をできる状況ではなくなってしまったので、2年間別々に暮らしました。状況がある落ち着いた程度2年後に、主人は東京に異動になり、私はゴールドマンサックスの東京のオフィスでその当時も働いていたので、2人とも東京で暮らすことになりました。ゴールドマンサックス東京オフィスでは、合計2年働き、その後はクレディスイスという同業他社からお声がかかり、3年働きました。

流石に金融も20年近くなってくると、次のステージを考えるようになるので、色々考えていたところに、OECDの東京のHeadというポジションをたまたま目にしました。仕事内容が面白そうだったので、あまり深く考えずに応募してみると、採用になりました。それから5年近くになります。なので、私は昔からOECDを目指してキャリアの構築を考えていた訳ではないのですが、金融でやってきた色々な経験などが活かせるような仕事だったので、そういう意味ではとてもラッキーでした。ということで、現在に至ります。

● PART3:将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

みなさんわかっていると思いますが、語学ができることが必須だと思います。それに加えて必要だと思うのが、価値観やバックグラウンドが違う人たちを受け入れるマインドです。もちろんなんらかの専門知識があることは必要です。

Q.学生時代にやっておいた方が良いことについて

「価値観やバックグラウンドが違う人たちを受け入れるマインド」を得るために、学生時代からマイノリティになるという経験をすることが大事だと思います。例えば、私がしたみたいなバックパッカーや留学、日本にいる外国人との交流などが考えられると思います。その中で、いかに自分から行動し、関わりを作っていけるかが大事だと思います。

Interview 3 : IOM 駐日事務所代表 - 佐藤美央

“みんなちがって、みんないい“

● PROFILE

1970 年生まれ、東京都出身。1992 年、国際基督教大学教養学部卒業。卒業後は、大学院行政学研究科（当時）に進学し、在籍中に外務省の専門調査員としてロサンゼルスに 2 年間赴任。大学院修了後、公益財団法人国際問題研究所を経て IOM にて勤務。これまでに、ケニア、ベルギー、インドネシア、イラク（ヨルダンでのリモートマネジメント）、アフガニスタンと世界各国で働き、2016 年 10 月より現職。

● PART1: 現在の仕事について

Q.現在の仕事内容について

国際移住機関の駐日事務所で仕事をしています。事務所の仕事は、IOM が世界中で行なっている事業に関して、日本政府との連携や調整が、まず大きな仕事です。日本政府は、IOM の加盟国であり、IOM にとっては常に 10 位以内に入る資金提供国でもあるので、日本政府が外交政策を通じて実現したいことと、IOM が移住、人の移動を通じて実現していきたいことの、どのようなところが協力可能か、パートナーシップを強化可能かを、日本政府の窓口である外務省と協議を重ね、調整しています。

そして、もう一つの柱が、日本国内で行なっている事業の実施です。国内で行なっている事業は 3 つあり、①人身取引の被害者支援、②自主的に帰国する意思がある非正規滞在者への、帰国・生活再建支援、③日本政府が、第 3 国定住支援を通してとして受け入れている難民の支援になります。

Q.現在の仕事の目標について

東京事務所では具体的な数値、例えば、いくら日本政府から資金を援助してもらう、といったものはありません。日本政府、あるいは日本には移住や人の移動に関わる関係者・組織・研究機関・自治体が多く存在するので、そのような組織と関係性を深め、必要なサポートを、IOM でできることであればしています。国際法に基づ

いて設置されている機関のように国に助言したりする機関というよりは、サービス提供機関という立場になります。

Q.現在のポジションについて(肩書き、ミッション等)

私は、駐日代表というポジションなので、ここでは代表をしています。この事務所の代表として、日本政府や学術機関、地方自治体などの関係者との対外的なやりとりが、まず私の役目の一つです。それから、この事務所の運営の責任を持っているのも、私になります。事務所はつい先月引越しをしたのですが、引越しに当たって契約をしたり、そういったことも最終的に私がサインをします。それから、ここの事務所の日常的な管理運営(人事などを含む)も私の仕事です。

Q.現在働いている組織について(日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)

東京のオフィスには、私を含めて 7 名スタッフがいます。1 名フィリピン人で、残りが日本人になります。フィリピン人の同僚は日本語の会話はできるので、話すときは日本語で、メールなどは英語でやりとりをしています。国籍は、代表の私が日本人で、たまたま今はフィリピン人のスタッフがいますが、ポジションという考え方をすると、代表のポジションが国際職員(海外への異動含む)のポジションで、残りのポジションは現地採用のナショナルスタッフのポジションになります。この割合は事務所の規模によって変わってくるのですが、全員がナショナルスタッフのオフィスも存在します。例えば私が以前駐在していたアフガニスタンは、国際職員が 30 人くらいいて、ナショナルスタッフは何百人というレベルでいました。やはりそういった国の方が事業が多いので、先進国に比べスタッフの人数が多くなります。

Q.現在の仕事上で成功したこと、失敗したこと

現職について 2 年経つのですが、成功したことは、まだありません。色々な種を蒔きながら、何か芽が出てくるのを待っているところです。唯一少しずつ成果が出ていることといえば、小さな事務所なので、今までこの事務所独自でやっていたやり方を少しずつ修正できています。特に総務的なことや会計的なことがこのオフィス独自でやってきたことがあって、それが IOM のグローバルなやり方とは少しずれているところがあったので、修正しました。

また、このオフィスにきて、大きな失敗もまだありません。小さなことはもちろんたくさんありますけどね。例えば日々の日常業務の中で、もっと早く対処していればよかったとか。しかし、それをあまり失敗とは考えたことはないですね。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

私は日本で働いたことは何年もあるのですが、IOM の日本のオフィスで働くのは初めてでした。それでやっぱり思うのが、IOM の日本オフィスで働くことは、そんなに簡単なことではないというのが、正直な感想です。自分が日本人で日本で働いたことがあるからといって、そして IOM でずっと 17 年間働いてきたから色々わかってると思っていたのですが、そうではなかっです。もちろん言葉や生活などは、以前いたアフガニスタンやイラクなどに比べわかりますが、簡単ではないと思いました。日本の中での人の移動とか移民に対する考え方には、私が今まで働いてきた国での考え方とはまだまだ全然違うアプローチや考え方が必要で、それを日本語で話をするのは難しいなと日々感じています。日本だと、移住や移民のトピックは身近ではない分、遠いことだと感じたり、分からない分、恐怖だと思ったり、そういった考え方が社会全般に広くある考え方だと思います。そういうのを見るにつけ、IOM の仕事や活動を知ってもらい、理解してもらうのは、その国の言葉で説明しても簡単にわかるものではないと感じました。

● PART2：現在までの経験

Q.今までの経験について

私は、ずっと日本で育っているので、幼少期の海外での経験はありません。中学１年生の夏休みの時に、アメリカに１ヶ月ホームステイに行きました。行こうと思ったきっかけは、友人が行くと言っていて、私も行ってみたいと思って、実際に行っちゃいました。もともとそういうことには興味があったんですが、中学１年生の一学期しか終わってない時期に行ったので、過去形も筆記体も分からないし、結構大変でしたね。高校時代は特に海外での経験はありません。大学時代は、3 年生の秋から１年間アメリカに留学しました。私の大学は、単位のトランスファーができたので、帰ってきてすぐ卒業をしました。大学では、アメリカ研究を専攻し、ずっとアメリカに興味があって、歴史とか政策とかそういったことを勉強していました。学部生の時は、特に人種問題とか、アフリカ系アメリカ人のアイデンティとかに関心を持っていたので、まずはアメリカについて勉強をしました。その後は、そのまま大学院に進学して、社会学を専攻しました。大学から大学院に上がる時は、全く迷いがなくて、留学中に、私なりに生活や語学などに苦労して、このまま卒業したら私の勉強は終わってしまうと思い、そこは迷わず大学院に進学しました。修士論文は、移民の同化過程について書きました。移民が来て、世代ごとに第１世代、第２世代、第３世代と、世代によってどのように同化の度合が変わっ

ていくかを書きました。その時の私は、難民ではなくて、選択肢はあまりなかったかもしれないけど、自分の意思で違う国へ行くことを選んだ人たちが、行った先でどういう風にもともと自分が持っていたアイデンティティや背景を維持しているのか、していないのか、あるいは社会にどういう風に馴染んでいくのか、そしてそれが世代によってどう変わっていくのか、ということに関心があり、勉強していました。このことに関心を持ったきっかけは、私は日本人でずっと日本で育ってきたので、今でいう永住型の移民で、そのような選択をする人って、どういう勇気があったらできるのだろうかと思ったことです。私が日本人ではなくなったり、少なくとも日本の国籍を失うことっていうのは、私にとってはすごく難しいことだと思ったので、どういう風にしたらそう思うのだろうかと思い、勉強しようかと思いました。このことは、高校生くらいの時からずっと思っていました。結構思っていたのは、自分は誰かということで、私は自分では日本人というのは大きいと思っていたので、その自分が日本人ではなくなるというのはどういうことだろうと思っていました。私が育った 70 年代、80 年代には、旧ソ連がまだあって、亡命する人とかがいて、好きなピアニストとかバレエダンサーとかが亡命するんですね。実際にもするし、漫画にもなっていて、この人たちは国を捨ててまで、バレエをやったりとかピアノを弾いていて、なんてすごいことなんだろうと思ったんです。それが本当のきっかけですね。

次に海外に行ったのが、大学院の修士課程の間ですね。2 年で卒業せず、修士に籍を置いたまま休学して、2 年間アメリカで働きました。2 年の夏の時点で就職先も決まっておらず、何をやりたいかも分からなくて、このまま論文を提出して、卒業してはまずいと思っていました。そして、ちょうどその時にご縁があったので、アメリカに行き、ロサンゼルスの総領事館で、専門調査員という仕事をしていました。そして、日本に帰ってきて、就職しました。就職したのは、国際問題研究所という安全保障に関する研究所です。その時、博士課程に進むか迷っていて、何か一つの研究テーマを突き詰める勇気がなくて、けれど研究からあまりにも離れてしまうと戻れないと自分でも思っていました。そんな時に研究所での就職のお話をいただいたので、自分の関心のある領域である移民などには関係がないのですが、研究助手として 4 年半ほど働きました。国際問題研究所は、非常に面白い環境で、私はアジア太平洋研究センターで、アジア太平洋の多国間の安全保障の枠組みを研究している先生方の助手をしていました。4 年ぐらい続けて、このままずっと助手をしているのもどうかなと思った時に、JPO 派遣制度の募集の張り紙が貼ってあるのを見つけました。そのときに、そういえば私は海外

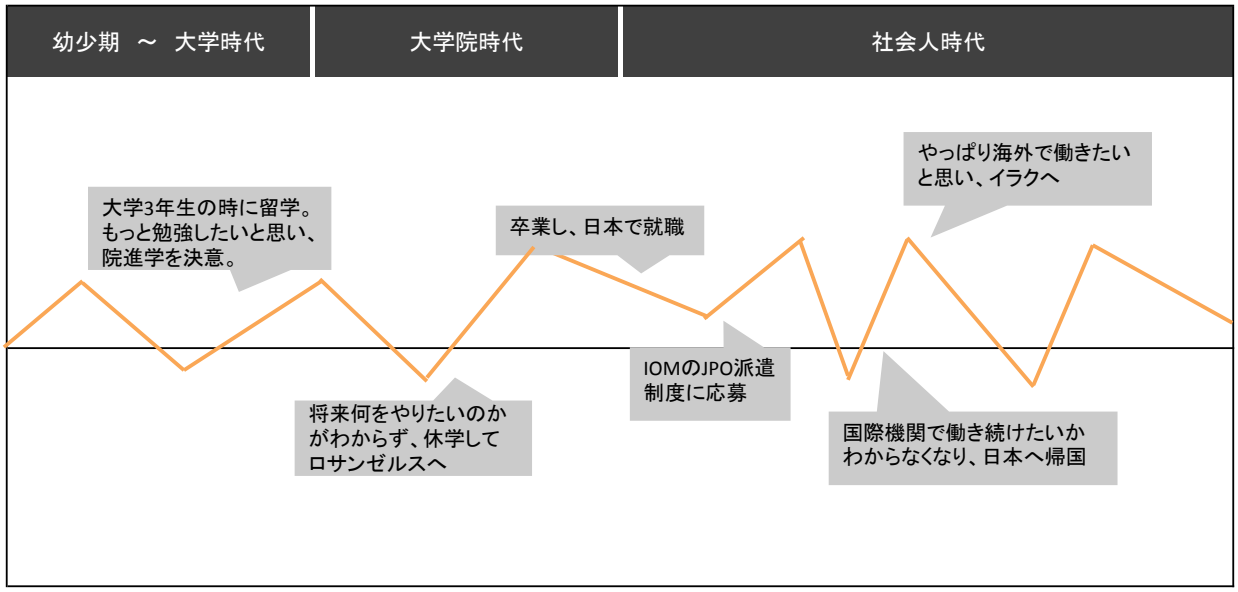
に行きたいとも思っていたし、移住とか人の移動とかに関心があるんだったと思い出して、IOM に入りました。

	滞在国(留学・転勤等)	学校(インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動(ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
幼少期～中学	日本				日本語	
高校	日本				日本語	
大学	日本	国際基督教大学			日本語、英語	
大学院	日本	国際基督教大学			日本語、英語	
休学中	アメリカ	ロサンゼルス総領事館			日本語、英語	
社会人	日本	国際問題研究所			日本語	
社会人	ケニア、ベルギー	IOM			英語	JPO派遣制度
社会人	日本	ジャパンプラットフォーム			日本語、英語	
社会人	インドネシア	IOM			英語	
社会人	ヨルダン	IOM			英語	
社会人	日本	内閣府PKO事務局			日本語	
社会人	アフガニスタン	IOM			英語	
社会人	日本	IOM			日本語・英語	

IOM には JPO で 3 年間働いて、その後続けるかどうか迷いました。というのもこのままずっとぐるぐる世界を回っているのかなと思ったのと、もともとずっと国際機関で働きたくて国際法とか国際関係とか勉強したわけではなかったんですね。私の場合、最初に行ったのがケニアだったんですが、ケニアで初めて色々な国際機関があって、NGO があってというのを初めて知ったんですね。自分が本当に国際機関で働き続けたいのかというのも、分からなくて迷ってしまったので、1 年間お休みしました。IOM から特別無給休暇というのがあったので、それで休んで日本に帰ってきました。帰ってきたのが 2004 年の末で、ちょうどインド洋大津波があった時で、ジャパンプラットフォームという NGO 団体で 1 年働きました。ジャパンプラットフォームというのは日本の緊急援助をやっている NGO が集まっているところで、たくさんの日本の NGO が緊急援助の場で活動していることを知り、とても勉強になりました。でも日本で 1 年働いてみると、やっぱり外に出たいと思い、次は IOM のインドネシアの事務所に戻りました。インドネシアで 10 ヶ月働いた後も少しお休みしたのですが、その後はイラクの事務所に行きました。ただ、その当時はイラクには中々出入りできなかったので、ヨ

ルダンに駐在し、リモートでマネジメントをしていました。ヨルダン・イラクに4年いて、自分が中に入れないことにまた迷ってしまいました。ちょっとお休みしようと思っていたところで、内閣府のPKO事務局の試験を受けたら受かったので、日本に帰ってきて、14ヶ月働いていました。それで、次はアフガニスタンに4年行きました。本来はポジションごとに期間が決まっていて、私の場合は3年だったので、少し長くなってきたなと思ったところで、色んなタイミングが合って東京に戻ってきて、それから2年になります。

国際的に働きたい人に言えるのは、やっぱり先進国ではない海外の国でずっと暮らし続けるというのは結構大変なのと、後は自分や自分の親が年をとったりする中で、仕事がやりたくても、国が遠すぎて日本に帰ってくるのに1日以上かかるとか、そういうのができない時期もあると思うし、駐在が長くなるたびにやっぱり迷うんですね。でも私は日本にいる時の、ジャパンプラットフォームやPKO事務局での経験が、とても勉強になっています。また、その時の仕事が、次の仕事にも繋がっています。例えば、PKO事務局で働いた後は、IOMに戻る時に、PKOのミッションがあるところに戻りたいと伝えて、アフガニスタンに行くことになったりもしました。



Q.日本人であることのメリット・デメリット

特にこの仕事をしていると、日本人であることのメリットは、日本という国が持っている中立性のイメージ

だと思います。アフガニスタンやイラクでも支援される人たちのイメージは、あくまでもイメージですが、日本という国は過去に植民地の宗主国でもなかったし、地理的に遠い国なので侵略とかそういった部分で関わっていることはなく、日本は本当に支援としてやってくれていて、政治的な利益が少ないと思っている人が多いです。なので、日本人全般に対して良い印象を持っている人が多いと思います。あとは、みんなが多く一般的に思っている、日本人は真面目でお堅いかもしれないけど、戦争が終わった後に国が発展して勤勉でというイメージは、明らかにいい加減でずるいと思われるよりかはメリットだと思います。あとは、同僚との関係でいうと、日本人は語学の面でハンデがあったりとか、あまり意見を言わないとか、そういったデメリットの一般的なステレオタイプではあるけれど、誠実で、確実、信頼性があるとも感じられていると私自身は思っています。

● PART3:将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

自分のコアになるもの、自分の軸があることが必要だと思います。そして何が大事かというと、多様性の中で生きていくことが大事だと思っています。だけど、どうしたらその多様性の中で自分が自分として生きていけるのかと言われたら、自分のコア、軸などのアイデンティティをしっかりと持っている必要があると思います。誰でも何でも知っているわけではないので、わからない、知らないでも良いのですが、あらゆることに対して、自分がどう思っているのか、色々なものに対してそういう意識を持っていないと、知らないことが怖くなったりして、違う人のことを恐れたりとか、そういうことが増えるのではないかと思います。

Q.学生時代にやっておいた方が良いことについて

本当にやっておいた方がいいのは語学だと思います。あともう一つは、何でも良いので、様々なことにもっと関心を持てば良いと思います。もちろん海外だけを見る必要はなくて、日本の社会の中でも色々なことがあるので、とにかく自分と違う人、違うこと、何でも良いので、自分のこと以外に関心を持った方が、自分のため、そしてみんなのため、これからの社会を作っていく人たちのためになると思います。かという私も、大学時代アメリカ研究を専攻していて、人種問題とかには関心があったけど、当時の日本の社会のこととかには関心がなく、ましてや国連とか国際的な枠組みがあるということについては全く関心がなかったし、そういう授業もとったことがなかったんですね。結局縁があってこうなっているので、早く知っていればよかったという

わけではありませんが、知っていればもう少し勉強の仕方も違っているし、選び方も違ったと思うので関心を持つ範囲をぜひ広げてみてください。

Q.学生へのメッセージ

世界へ羽ばたけるように、関心を持って頑張って欲しいと思います。世界というのは、国際情勢かもしれないし、隣の人かもしれませんが、とにかく自分以外の人にもっと関心を向けて、自分の持っている力を発揮して欲しいと思います。自分にできることはそれぞれ違うと思うので、型にはまってこの道じゃないといけないとか、この学校にいかないといけないとか、これができなきゃ人生終わりとかそういうことは絶対にないので、そういうふうには思わないで欲しいと思います。日本に帰ってきて一番思うのは、もちろん私も日本人のなのでわかるのですが、こんなに苦しい社会は見たことがないくらい全てが息苦しく感じます。みんな耐えられるし、頑張っているのでやっていけるけど、何もこんなに自分の首を締めなくても、人生はもっと楽しく幸せに生きられるのに、どうしてこんなに苦しい道を選ぶのだろうかと思います。そういった意味では、学校や就職ももちろん大事ですが、1、2年社会に出るのが遅れたって全然大丈夫なので、本人が納得できる人生を送れるのが大事ではないでしょうか。今の社会のがんじがらめになっているのは、みんなが同じ時期に学校に入って、同じ時期に就職しなければいけないというシステムがあるからですよね。なので私はもっと可動性を持たせて、選択肢を増やしたいと思います。そしてこれは社会にも個人にも当てはまることなんですが、皆失敗を恐れすぎていると思います。とりあえずやってみないことには、分からないことというのはたくさんありますよね。それで失敗したら、失敗したところからどう立て直すかがわかれば良い話だと思います。失敗してそこで人生が終わりということはないので、あまりこだわらず、真面目に頑張りすぎず、ぜひ色々なことにチャレンジしてくださいね。

Interview4:JICA 青年海外協力隊事務局次長 - 梅本真司

“If it feels good, just go for it “

● PROFILE

1964 年生まれ、北海道出身。1986 年、神奈川大学法学部卒業。卒業後は、JICA フィリピン事務所や青年海外協力隊事務局で嘱託として勤務、また（財）ユネスコアジア文化センターにて勤務後、1995 年 4 月 JICA 入団。青年海外協力隊事務局勤務を経て西アフリカのセネガルへ赴任、以後、一貫して仏語圏アフリカをフィールドに勤務。2015 年 9 月～2017 年 3 月末まで、JICA カメルーン事務所長を務め約 20 年ぶりに青年海外協力隊事務局へ復帰して現在に至る。

● PART1: 現在の仕事について

Q.現在の仕事内容について

青年海外協力隊の事務局で次長をしています。青年海外協力隊というのは、若手とシニアの方を 2 年間開発途上国に派遣する事業です。青年海外協力隊は、途上国の開発のお手伝いをし、現地の人たちと仕事をする中で相互理解を促進し、そして現地で得られた知識や経験を日本社会に還元するという 3 つの目的を持って事業が行われています。その中で私は広報・募集・訓練(青年海外協力隊は 70 日間の訓練を経て、各国に派遣される)・帰国後の支援(企業や自治体との交流)を行う部署を担当していて、一言で言うと入り口と出口を主る部署で、その部署の総括をしています。少子高齢化・若者の内向き志向・海外の治安の悪化等々により、海外に行きたい人が減っている中で、一定規模の派遣人数をどのように確保するかを考えています。

Q.現在の仕事の目標について

KPI とすれば、応募者の獲得数に命をかけて日々仕事をしています。年間約 1200~1300 人を海外に派遣しているのですが、そのためには 2 倍、3 倍上回る応募がなければ、良質な人材を確保できないという状況にあります。しかしながら、なかなかそこまで至らず、年間 2 回の募集では 2000 名強くらいの応募者しか確保できておらず、様々な施策を考えています。

Q.現在のポジションについて(肩書き、ミッション等)

次長というのは、3つの課(広報・選考・訓練及び帰国後の支援)のリーダーである課長たちと同じ方向に向かって進み、業務を推進しながら、同時に責任を取る立場でもあります。ですので、目標の数字に対しては私も首をかけて仕事をしているようなところはあります。国内における事業の総括という意味では、ビジョンの制定と業務の進め方、そしてその結果に対しての反省、さらには全国に多くの協力隊の支援組織(OB約5万人による組織)があり、彼らへの説明責任などの仕事があります。時代の流れに沿って、制度や仕事内容が変わる中で、全国を回って説明をしたり、外部の方に、協力隊の事業の説明をするのも仕事の一つです。

Q.現在働いている組織について(日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)

青年海外協力隊の事務局は、現在 100 人規模の組織です。青年かいがい協力隊は、JICA 全体の中でも大きい部署になります。JICA 全体に言えることで、他の組織も同じだと思いますが、プロパーと呼ばれる社員、契約社員、派遣社員などが一緒に仕事をしています。構成としては、局長がいて、その下に次長が3名(海外・総務・国内) います。その下には、海外を司る課が2課、総務課と企画課、そして先ほど説明した3課(広報・選考・訓練及び帰国後の支援)が国内の中にあります。特徴として言えるのは、協力隊の OB がはるかに多いことです。局長もそうですし、職員もそうですし、期間限定でアルバイトで働いていただいている方も OBOG だったりするところが、他の JICA の部署と比べてユニークなところだと思います。やはり皆この事業が好きで、推進したいという人たちが多く集まってきていると思います。

協力隊の事業に関わるには、日本国籍を保持していることが閣議決定されています。私の部署ではあまり英語は使わず、海外の部署もほぼ使いません。しかし、私たちには海外に事務所(70 ヶ所程度)があり、滞在している日本人スタッフは現地のスタッフとのやりとりがメインになるので、そこでは使用されています。

Q.現在の仕事上で成功したこと、失敗したこと

僕は今の役職に着任してから、まだ1年半ほどしか経っていないので、今のところはまだ成功はありません。応募人数などの掲げていた KPI を達成することができなかったので、自分としては失敗だと思っています。色々な施策をとりましたが、数字がついてきませんでした。ですが、次の募集がもうすぐ始まりますので、今はそれに向かって日々邁進しています。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

今の仕事を通じて学んだことは、この事業の持つ本当の価値が何かをよく考えることになったことと、それを今まで以上に自分の言葉で言えるようになったことです。そしてそれをどんな人に対してもこの事業のセールスポイント、弱みなどを語れるようになったことです。この事業は、様々な人が関わって、様々な人の思いが集まって、複雑に絡み合って、推進されている事業であり、その難しさというのも同時に、日々感じています。みんなこの事業が好きなんですね。なぜ好きかというと、2 年間海外に行くと確実に成長して帰ってきて、海外で将来の希望の種を蒔いてくるんです。そして、それが 20 年後とかに花が開くんです。そのようなことををみれる事業なので、そこにこの事業の価値を見出している人が相当多くいます。そのような人とたちが、この事業を多くの人たちにぜひ経験してほしいという思いを持っています。年間 2 回の募集があり、その前に OBOG がボランティアとしてその思いを語ってくださるのですが、時として時代も変わり、制度も変わり、価値観も変わる中で、思いが強いばかりに、ややこしくなってしまうことも少なくはありません。ただ、そういうのも含めてこの事業は成り立っているので、ありがたいという気持ちの方が、もちろん上回っています。

また、この事業は国の ODA の一環ということもあり、国会議員の方も関わっています。国会議員の方も、非常にこの事業を好きでいていただいて、JICA 議員連盟(自民党中心の協力隊を支える国会議員の連盟)というのがあるので、そこでいろいろな意見を頂戴しています。この事業に関わる様々の方達と関わり、ご提言をいただき、それを事業に反映していくというのが私の仕事であり、それがこの仕事を難しさだと感じています。

● PART2: 現在までの経験

Q.今までの経験について

僕は北海道生まれで、高校まで北海道の田舎に住んでいました。小学校の時に近くの英語塾に通ってて、それが英語に触れたきっかけです。東京に憧れていて、大学の時に上京しました。大学２年生の時に、大学のお金で、１ヶ月ほどイギリスのバーミンガムのサマースクールに行き、初めて西洋の文化に触れました。行ったきっかけは、ESS に所属していて先輩に勧められたので、手を挙げてみたというのが一つあります。もう一つは、法学部に所属していたのですが、そこでも英文学科の人に負けたくないという気持ちがあり、法学部で英語でマスターするというのを意識していました。サマースクールでは、英語が全然通じなくて、しっかり英語を勉強するようになりました。イギリスに行くまでは ESS に入っていたのですが、辞めて自分で英語を勉強するようになりました。3 年生が終わり、単位もほとんど取れたところで、今度は１年休学して、オーストラリ

アにワーキングホリデーに行きました。バックパッカーで、ヒッチハイクしたりしていたのですが、サバイバルな英語を身につけたり、行き先々で移民の人たちが通う夜間学校に顔を出したりもしましたが、基本的には独学で英語をマスターしました。

卒業後は、ご縁があって、フィリピンに渡ることになりました。そこは、JICA の外郭団体があり、そこに契約社員のような形で派遣されました。そこで、初めて社会人として国際協力に携わるようになり、フィリピンで２年間過ごしました。その後は、日本に帰ってきて、青年海外協力隊事務局で嘱託のような形で１年半働きました。そうしているうちに、文科省の外郭団体であるユネスコアジア文化センターというところからお声がかかりました。ユネスコアジア文化センターは、ユネスコとタイアップして、文化事業をやったり、識字教育をやったりしているところです。小さい所帯なのですが、そこでは仕事は全て英語でした。5 年くらい働いて、ちょうどその時に結婚をして、在外でフィリピンに滞在した経験があって、仕事としてはアジア太平洋のユネスコ委員会の人たちを日本に招聘したりとか、世界遺産の仕事をしていたので、ネパールや、パキスタンに行って広報キャンペーンをやったり、そういう経験をしていて、やっぱり現地にいたいという気持ちが強くなりました。

	滞在国(留学・転勤等)	学校(インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動　(ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
幼少期～中学	日本				日本語	
高校	日本				日本語	
大学	日本	神奈川大学	バックパッカー	ESS	日本語、英語	国連英検
社会人	フィリピン	JICA外郭団体			英語、スペイン語	
社会人	日本	青年海外協力隊事務局(嘱託)			日本語	
社会人	日本	ユネスコアジア文化センター			日本語、英語	
社会人	日本	JICA(プロパー)			日本語、英語	
社会人	セネガル	JICA			フランス語	
社会人	フランス	JICA			フランス語	
社会人	セネガル	JICA			フランス語	
社会人	カメルーン	JICA			フランス語	
社会人	日本・東京	JICA			日本語	

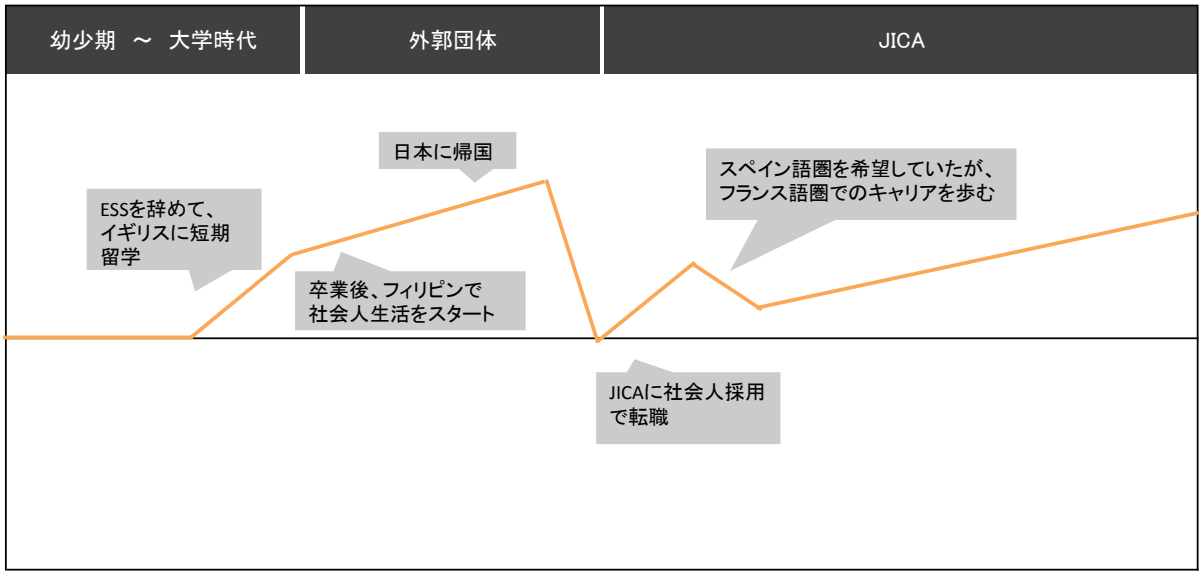
そうこうしているうちに、JICA の社会人採用というのが正式に発足して、フィリピン時代の恩師から受けてみないかといわれ、受けました。競争試験で、いわゆるテストがあって、2・3 回面接があって、運よく合格し

て、晴れてJICAのプロパーの職員になりました。それが、33歳のくらいの時の話です。その後は、アジアからアフリカにキャリアが変わっていくわけですけれども、最初の部署も協力隊の事務局で、南部アフリカ(ジンバブエ・ボツワナ・マラウイ・ザンビアの4カ国)の国担当をしていました。でも、自分はもともと中南米にずっと行きたいと思って、スペイン語をやっていたのですが、南部アフリカに2年いた後、今度はセネガルに行けといわれました。セネガルはフランス語圏で、なんで希望も出していないのに僕フランス語なんですがと思ったのですが、そこから僕のキャリアはフランス語圏が中心に変わりました。セネガルの後は、フランスに3年いて、完全にフランス語の梅本というレッテルを事務局内で貼られて、フランスの後に、セネガルに2回、フランスに1回、直近はカメルーンで所長を2年半務めていました。33歳でJICAに入って、21年経ちますけれども、合計12回異動があったんですね。これはかなり多い方で、同じ部の中で課を異動したりということもあります。短い期間で色々な部署で経験させていただいて、非常に勉強になりました。

今までの人生のうち、13~14年は海外で過ごしているのですが、心がけていることは、日本人として日本で通用できる人であることですね。海外が長い人って海外ずれというのか、変わってしまうところがあって、いわゆる根無し草にならないよう、僕の拠点はやっぱり日本にあるので、それを意識して、どんなタイミングで日本人にあっても、ちゃんとしたコミュニケーションが取れる、どんなタイミングでどんな外国人にあってもしっかりとしたコミュニケーションが取れる、要はどこにいても何をしていようが自分は変わらない、そういったことを意識して生きています。これは親の影響もあると思っていて、十分ではないけれど、そこそこ躾されて、そこそこの教育を受けさせてもらって、親にはとても感謝しています。基本的には楽観的なんですよね、ストレスもあまり感じないし、だからこそ海外で生きていけるんですが、どんなところでもやっていけるという自信があります。

後は、語学はほとんど自分で勉強しましたね。英語、フランス語、タガログ語など。フィリピンにいた時は自分で家庭教師を雇って、自分は事務所で働いていたのですが、現場で働いている協力隊院には負けないぞという気持ちで勉強しました。ただ、大学時代にイギリスに行った時からそうですが、語学というのは手段でしかないので、核となるものをしっかり持った上でコミュニケーションをしたいと思っていました。語学検定などはあまり受けてきていないのですが、学生時代に国連英検というのが始まって、もう30年くらい立つのですが、普通の英検と違って面白そうだなと思って、受けてみました。実は昔国連にいきたかったんですね。なん

となく漠然と、日本ではなく、国連や国際機関で働きたいと思っていました。ユネスコを受けたのも、若干そういうところがあったし、一回国連職員の日本人競争採用試験というのがあって、それを無謀にも受けて、1次試験は受かったけど、2次試験はダメで。世界の問題に対して、何かできることがあるのかなとか、漠然と考えていて、ただ結果的にこうして日本という国にちゃんといて、日本人の立場として、国際社会と対峙するといのが結果的によかったと思っています。



Q.日本人であることのメリット・デメリット

メリットというのは、日本の豊かな歴史などがバックグラウンドにあるということだと思います。単に戦後の成長のみならず、年々と続く日本の歴史に深く根ざした豊かな文化を皆バックグラウンドとして持っているというのは、豊かさに繋がっていると思います。今我々が目にしているテクノロジーなんかも、昔の教育だったり、武士の躾だったり、農家が誇りを持ってやっていたりとか、そういう日本特有の文化的な厚みの上でこの社会が成り立っていると思っています。このことに気づいたきっかけは、19歳の時にイギリスに行った時で、全く違う文化に触れた時です。もちろん西洋に対しての憧れもあったけれども、やっぱり全ていい加減だったし、そういう日本の好対照とある日本の色々なものを、向こうに行ったら日本はオリジナリティがないとかけちょんけちょんに言われました。しかし、それは、日本の文化とか歴史を振り返るきっかけでもありました。その時海外に行く人がみんな読んでいた、日鉄住金総研の「日本—その姿と心-」という日本を紹介する本が初めて出版されて、歴史とか適当に学んでいたので、こういうもので日本の歴史を学び直すことができた

し、やはり日本人ということで、明治維新以降の復興について色々言われたりするけど、これまで何千年と続く文化の蓄積があってそうなっているので、好奇心の塊の民族性だったり、勤勉性であったり、そういったものが日本人の誇りであると言えるのではないかと思います。それは何が言いたいかというと、それは相手がどこの国の出身かにもよるのですが、やはり歴史がある国々の人と話をする時に、日本は日本なりの長い深い歴史があるということを、意識するしない関わらず、滲み出るものがあって、相手の昔ながらの歴史にも共感を持って思いを馳せられるというのも対話をする上で大事だと思います。

デメリットは、日本語特有の、阿吽の呼吸だったり、言わなくてもわかるとかそういうバーバルに物事を表現できない人たちであるところのデメリットというのは、国際社会において相手と理解し合う上では若干マイナスだと思います。要は思っていることとかをストレートに表現できないんですよね。原因の一つはコンプレックスで、特に西洋の人たちに対してはまだまだコンプレックスがある。国際協力の分野で働いている人たちでも、白人と話すときは緊張する人もいます。でも、僕はそれが嫌で、そこをまずクリアにしたかった。どんな人間とも、変わらず同じようにコミュニケーションを取るように僕は決めています。そういう意味では、武器としての英語、相手に臆せず自分の意見を主張できるくらいの語学力は身につけようと思っていました。そのためには、教養を身につけなければいけないと思うんですよね。日本に関しても、世界に関してもまずは知らなければいけない。なので、僕は学生には勉強しろと言っています。

PART3:将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

伝えるものを持つ能力だと思います。自分で何か伝えたいものを持てるかどうか、借り物ではなくて、自分の中から湧き出る伝えたい何かを自分の中でしっかり持つことが大事だと思います。なので、上手に喋ろうとかそういうことではないんですよね。あとは、どんな相手でもニュートラルに構えて、萎縮せず、オープンにニュートラルに話すことができることも大事だと思っています。コミュニケーションの極意というのは、自分が何を伝えたいか、どうやったら伝わるかを強く考える必要があります。そして、そのためには、まずは相手とリラックスした関係を作ることが大切です。

Q.学生時代にやっておいた方が良いことについて

学生時代にやっておいた方が良いことは、古典を勉強することだと思います。日本の古典、外国の古典、両方

を勉強すべきです。外国の古典でいうと、聖書はとても良いと思います。キリスト教社会は、ドイツを含めて、国際社会において非常に力を持っています。キリスト教社会というのは何かというのは、しっかりとおさえる必要があると思います。そのためには、聖書を全部読む必要はないですが、聖書を少し読み、何でこうなっているんだろう、進化論って何だろうとか、そこから色々なことが派生して出てくると思うので。例えば哲学とか、宗教とか。宗教というのは難しいけれど、最低限、宗教への理解はなければやっていけないと思いますね。海外に出た時に、やっぱり共感を持って理解し、排除しないというのが大事だと思います。

Q.学生へのメッセージ

　やっぱり勉強しろと伝えたいですね。勉強して、若い時代の特権というのはあると思うので、失敗を恐れないで色々なことにチャレンジしてほしいと思います。学生時代の挑戦は失敗にはならないと思います。これは僕がオーストラリアでダイビングの免許をとったときの言葉なのですが、”if it feels good, just go fot it”。何事もいいと思ったらやった方がいいんですね。まずやってみる。チャレンジすればするだけ、人生は豊かになると思うので、飛び込んでみないと分からない世界がたくさんあると思うので、ぜひ色々なことに挑戦をしてみてください。

Interview 5 ： 国境なき医師団日本 – 今城大輔
“人は人を助ける”

● PROFILE

1973 年生まれ、東京都出身。1997 年、慶應義塾大学総合政策学部卒業。1999 年から国境なき医師団（MSF）日本の事務局職員として勤めながら、現地アドミニストレーター（財務・人事担当）としてミャンマー、ネパール、スリランカなどのプロジェクトに従事。2007 年より 2 年間、日本の映画配給会社勤務を経て 2009 年より UNHCR 難民映画祭を担当する傍ら、2010 年にはハイチ、2013 年にはソマリアにおける MSF のプロジェクトにも参加。2017 年 8 月より MSF 日本の広報部イベント担当シニアオフィサー。

● PART1：現在の仕事について

Q.現在の仕事内容について

　現在は広報部に所属しています。国境なき医師団（MSF）という団体について対外的に知ってもらうため、そして MSF が実際に医療援助活動をおこなっている世界の状況について広く知ってもらうためにイベントを企画、実施します。トークイベントや体験型イベントなど、誰に向けてどういう場所で、どのような内容の企画を展開するのが一番効果的かということを考えてイベントを主催します。また「グローバルフェスタ JAPAN」のように、多くの人が集まるイベントにも出展しています。様々な機会を通じて直接 MSF を知ってもらう場を作ることが自分の役割です。

Q.現在の仕事の目標について

　1 年を通じて MSF 日本が主催のイベントを 1～2 回、参加型のイベントを含めると合計で年 4～5 回のイベント開催やブース出展を目指しています。より多くの方に来て頂きたいのですが、イベントは会場のキャパシテ

ィによって来場者数が異なるので一概には言えません。イベントがどのようなメディアに取り上げられるか、SNS ではどの程度の反響があるかなども重要です。また、来場者の満足度についてもアンケートを通じて確認し、イベントの質の改善を図ります。

Q.現在のポジションについて(肩書き、ミッション等)

MSF 日本の事務局にはファンドレイジング部やフィールド人事部、経理部などの様々な部署があり、その中の一つに広報部があります。広報部は主に 2 つのチームで構成されており、対外的な広報活動をおこなうエクスターナル・コミュニケーション・チームと、デジタルコンテンツを制作・展開するエディトリアル・チームが連携して情報発信をおこないます。エクスターナル・コミュニケーション・チームはマネージャー1 名、メディア担当 1 名、講演会担当 1 名、そしてイベント担当というメンバー編成です。私はシニアオフィサーとしてイベント関連業務の企画・実施を任されています。

Q.現在働いている組織について(日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)

MSF 日本には全体で約 70 人の職員が働いています。そのうち、約 2 割が外国籍の職員です。出身はさまざまで、フランス人、カナダ人、スイス人、イタリア人、ミャンマー人など様々な国から来たメンバーが働いています。共通言語は英語なのでミーティング等は英語でおこなわれますが、事務所では日本語、フランス語、イタリア語などが入り混じっています。バックグランドも様々で、広報部だと企業広報、記者といった経験を持つ者、ファンドレイジングでは営業やマーケティングといった経験を持つ者、業界もビジネスから NPO まで多様です。

Q.現在の仕事上で成功したこと、失敗したこと

今までは参加していなかった「グローバルフェスタ」のような大型イベントに参加したり、「世界報道写真展」の関連トークイベントを企画したりと、過去にはなかった新しい取り組みを実施できたことは成功事例です。団体にとっては新たなタッチポイントが増えるので、小さな変化でも意義はあると思っています。新しいアイディアを形にして、人々の関心を高めるという結果を得られることは、自分にとって満足感の得られる仕

事です。

一方で注意しないといけないのは、新しい企画を通じて世の中がどのような印象を受けるかを事前に徹底的に検討しないと、ネガティブな印象を与えてしまう事もあるという点です。「紛争」や「難民」などといったテーマは人によって考え方が異なり、皆が納得できる解決策がない世界です。そうした中で、ただ自分たちが正しいと思うやり方を押し通すだけではなく、イベントの見え方、つまりトーン&マナー、会場やゲスト、連携するパートナーの選定等を適切にデザインする事は非常に重要です。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

イベントとは物理的な場を通じて、多様な価値を持った人々が、同じ関心の元に集まり、何かを共有したり学んだり、意見を交わしたり、楽しんだり、ショックを受けたりする装置だと思っています。この仕事をしていると、その手法という部分で、常に何か新しいものを探さなければいけません。常に新しい手法やアイディアを考え、試行錯誤を繰り返しながら形にするというプロセスは常に学びの多い工程です。場としてはシンポジウムのようなハードなものから、グローバルフェスタのようなソフトものまであります。また、ゲストを呼ぶのであれば、例えば大学の教授や研究者を呼ぶのか、それとも著名なタレントを呼ぶのかなど色々な選択肢があります。種類としては講演公式なのか参加型なのか、手法としてはエンタメ寄りなのか教育的なのか、等々。イベントの目的やターゲットオーディエンスに合わせて、組み合わせの幅が広いことはこの仕事の最も面白い部分です。

● PART2：現在までの経験

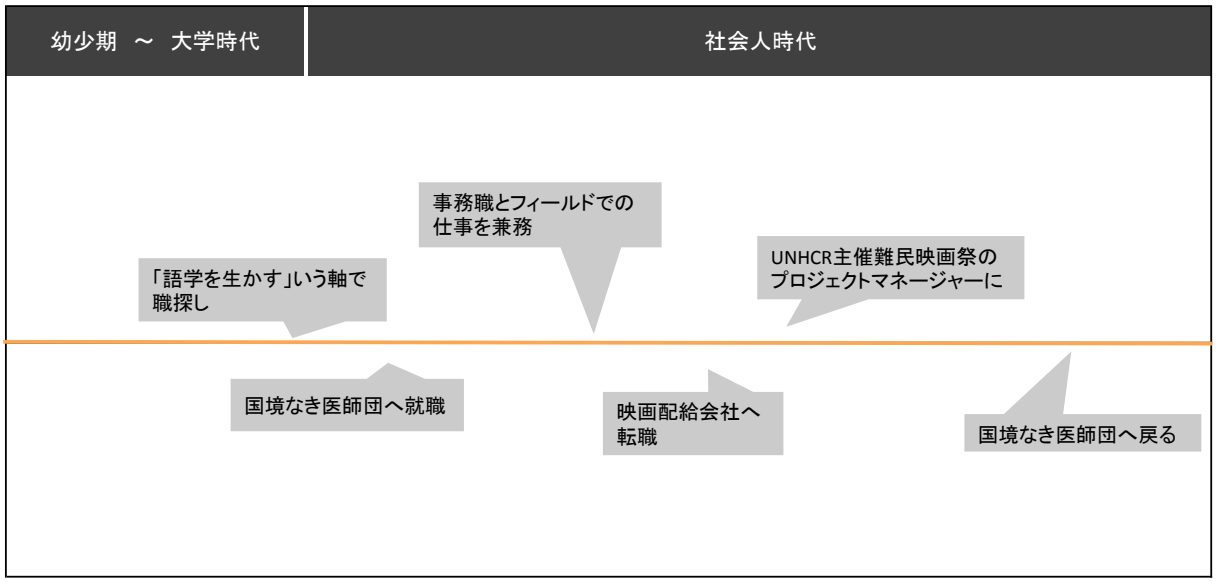
Q.今までの経験について

私は1973年に日本で生まれました。父の仕事の関係で、5歳から10歳までをフランスで過ごし、現地の幼稚園と小学校に通っていました。幸い耳が慣れると言われる時期にフランス語を自然に学び、その後も常に独学で勉強を続けました。日本に帰国後は、公立の小学校に通い、中高は私立の高校に通いました。高校2年生の夏に再び父の仕事の関係で今度はベルギーに移住しました。ベルギーではインターナショナルスクールに2年通い、大学は日本で受験して慶應義塾大学の総合政策学部に入学しました。

1999年にMSF日本に広報アシスタントとして入職し、その当時から写真展などのイベントを担当したり、メディア対応をおこないました。その後2007年まで日本事務局の職員として広報だけではなく、海外派遣者のリクルート業務に携わったり、フランスのMSFと連携して援助活動を統括するオペレーションチームの一員でもありました。それと並行して、実際に海外で援助活動にも参加しました。2001年から約1年半ミャンマーに、2003年からネパールに半年間赴任しました。2004年にインド洋沖大震災があったときに、スリランカに緊急チームの一員として1ヶ月の短期派遣をされました。現地ではアドミニストレーターという立場で派遣されていました。国境なき医師団には医師や看護師、助産師などの医療スタッフと、人事や財務を担当するアドミニストレーターや物資調達や安全管理、水と衛星の管理等をおこなうロジスティシャンという非医療の仕事があります。

	滞在国(留学・転勤等)	学校(インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動(ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
幼少期～4歳	日本				日本語	
5歳～10歳	フランス	現地校			フランス語	
10歳～高校2年生	日本				日本語	
高校2年生～高校卒業	ベルギー	インターナショナルスクール			英語	
大学	日本	慶應義塾大学			日本語	
社会人	日本	国境なき医師団			日本語、英語、フランス語	
社会人	ミャンマー	国境なき医師団			英語、フランス語	
社会人	日本	国境なき医師団			日本語、英語、フランス語	
社会人	ネパール	国境なき医師団			英語、フランス語	
社会人	日本	国境なき医師団			日本語、英語、フランス語	
社会人	スリランカ	国境なき医師団			英語、フランス語	
社会人	日本	国境なき医師団			日本語、英語、フランス語	
社会人	日本	映画配給会社			日本語	
社会人	日本	UNHCR			日本語、英語	
社会人	ハイチ	国境なき医師団			英語、フランス語	
社会人	日本	UNHCR			日本語、英語	
社会人	ソマリア	国境なき医師団			英語、フランス語	
社会人	日本	UNHCR			日本語、英語	
社会人	日本	国境なき医師団			日本語、英語、フランス語	

2007年にはMSFの仕事を離れて、映画の配給会社に転職をしました。子どもの頃から映画は好きで、当時は特にドキュメンタリー映画に関心を持っていました。それまで人道援助の世界で培った経験や知識を武器に、映画の世界で何ができるか挑戦してみたかったのです。約2年間、主に海外のドキュメンタリーの配給宣伝業務を行なっていました。具体的な仕事内容としては、海外から買い付けてきた作品を様々な手法で宣伝して人々の関心を高め、映画館で観客を動員する企画を実施し、最終的にはDVDとしてパッケージ化するまでの仕事でした。映画の配給会社を退職した後は、人道援助と映画業界の両方の経験を生かして別のことをやろうと考えていました。そうした中、国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所が主催する「難民映画祭」というイベントのプロジェクトマネージャーに着任して、2009年から2017年までの8年間プロジェクト運営に関わってきました。その間、プロジェクトの合間にはMSFの海外プロジェクトにも参加する機会がありました。2010年には、ハイチの緊急ミッション（大震災後のコレラのアウトブレイク）、2013年には内戦下のソマリアの母子保健プロジェクトに参加しました。



もともと海外で培った語学力や幼少期の経験を生かした仕事にはつきたいと思っていましたが、国際NGOや国連機関という具体的な組織をイメージしていた訳ではありませんでした。学生時代にキャリア形成のために何か準備をしていたことはなくて、卒業後しばらくしてから、フランス語を生かせる就職先を探していました。そうした中、偶然出会ったのがMSFだったのです。

- PART3:将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

コミュニケーション能力は重要です。母語に加えて英語は当然必要ですが、それに加えて第 2 外国語か、あるいは何かの専門分野における特殊なスキルやユニークな経験値と知識が必要だと思います。専門性はコミュニケーションをとる上で強みになるという意味です。また、国際的な仕事につきたいのであれば、むしろ自分のルーツである社会・国の政治や文化、歴史についての理解が必要だと感じる機会が多々ありました。先ほど国際的なチームで働くと「国籍」というのはそれほど意味を持たないと述べました。しかしその反面、異なる背景をもった人々が互いを知り、理解するためには自分がどこから来たのかをきちんと説明できないといけません。コミュニケーション能力というのは、どれだけ人のことを理解できるのかとか、世の中のことを知っているかにかかってきます。その為には自分の事を人に説明できないといけません。

Q.学生時代にやっておいた方が良いことについて

個人的には学生時代に映画をたくさん見たことが今の自分のプロフィールを作ったと思っています。ですから皆さんも周囲から無駄だと思われても、自分がとにかく興味を持てることを徹底的にやることが重要だと思います。

Q.学生へのメッセージ

ぜひ MSF でお待ちしています。事務局職員も海外派遣スタッフも多様なバックグラウンドを持ち、皆それぞれユニークなキャリアを築いてきた人ばかりです。MSF では唯一無二の経験はできると思います。今も、世界には命の危険にさらされた多くの人々が医療援助を必要としています。そうした人々に損得勘定を一切度外視した「人道援助」という姿勢で手を差し伸べられるというのは、とても幸せな生き方、働き方です。その喜びを共有できる仲間が一人でも増えると嬉しいです。

Interview6:アイ・シー・ネット株式会社 – 野間口剛

“Uniting the world for a better tomorrow “

● PROFILE

1984 年生まれ、福岡県出身。2009 年同志社大学経済学部卒業。卒業後は、医療機器メーカーにて 5 年ほど勤務。その後、2015 年オーストラリア・クイーンズランド大学院保健経済修士号取得。大学院修了後は、UNDP の国連ボランティアにてシエラレオネで働く。現在日本に帰国し、アイ・シー・ネット株式会社 ODA 事業部に所属。

● PART1: 現在の仕事について

Q, 現在の仕事内容について

まず簡単に仕事の全体像を説明すると、相手国の要請に基づき、JICAがプロジェクト合意文書を締結します。その後、民間コンサルタント会社の専門家やJICA直営専門家に業務委託し、プロジェクトを実施します。

現在は、セネガル国コミュニティ健康保険制度及び無料医療制度能力強化プロジェクトの保健情報管理の専門家として、プロジェクトに従事しています。具体的には、プロジェクトの介入前のニーズ調査・能力アセスメントの実施、コミュニティ健康保険(保険に加入した人に対して、一部の医療費の支払いをする)に関する事務処理ツールの作成や改訂をしています。去年はセネガルに約8ヶ月滞在しました。民間コンサルタント会社での技術協力プロジェクトだと、通常、3年～5年の期間のうち、コンサルタントは、年間合計半年程度、現地で業務実施します。日本では、従事しているプロジェクトの進捗をモニタリングしつつ、プロジェクトの広報活動のため、学会などの公の場で発表などします。また、他のプロジェクトに従事するコンサルタントもいます。現地に行くタイミングは、自身の役割によるのですが、私の場合は、プロジェクト介入前の調査を担当していたので、プロジェクト初期に3ヶ月現地に行き、プロジェクト事務所の立ち上げサポートや調査の概要書や調査票をまとめました。その後、一度日本に帰国し、調査実施機関に、2ヶ月程度で調査実施のモニタリングと

調査結果のまとめ、調査報告書の執筆をしました。その後、調査の内容を受けて、プロジェクトの方針や介入方法を決めて、担当分野である保健情報管理の研修実施やツールの改訂の提案を行っています。

このプロジェクトには、日本人は総勢8名関わっており、他の民間コンサルティング会社と協力して、進めています。相手国(セネガル)側は、医療保険庁で、彼らと話し合いながら、協力して仕事を進めています。

民間コンサルティング会社の仕事と、JICAやUNDPの仕事というのはかなり異なっています。JICAやUNDPの主な仕事はドナー(政府など)から資金を調達し、各機関の戦略に沿って、相手国政府と議論を重ね、プロジェクトや借款を立ち上げ、国際協力に貢献していきます。一方で、我々のような実施者（NGOや民間コンサルティング会社や専門家)は、彼ら（JICA等）の委託を受けて、実際に現場で相手国の実施機関と共に活動を行います。

Q.現在の仕事の目標について

セネガルのプロジェクトについて言えば、PDM(Project Design Matrix)というフレームワークに基づいてプロジェクトは設計されています。まず全体目標である上位目標があり、これは、我々のプロジェクトで言うと、国の保険加入者の割合を何パーセント向上するといった目標になります。これは今担当しているプロジェクトだけでは達成できないような、国全体のかなり大きな目標です。またその下、プロジェクト目標というものがあり、これがプロジェクトで達成すべき目標です。そのためのアウトプットとして、例えば中央省庁や地方の共済組合、病院で働く職員の能力の強化・向上した人数や新しいシステムの導入件数などの指標で、それぞれ目標数値が設定されています。これを各専門家がクリアすべく、活動しています。ですので、私の仕事での目標をそのフレームワークに沿って、立てられています。

Q.現在のポジション(肩書き、ミッション等)・組織（日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)について

私が所属しているODA事業部には、部長・チーフマネージャー・マネジャーがいます。チーフマネージャーが横断的に専門分野(農業・環境、ガバナンス、保健・教育など)を総括し、マネージャーが各個人のマネジメントをしています。マネージャーの下にコンサルタントがいて、専門家として活動しています。その下に私のよ

うなポジションがあり、コンサルタントになる一歩手前のポジションの専門職スタッフになります。私は専門職スタッフとして、コンサルタントと一緒にプロジェクトを運営しています。また、それとは別に、アシスタントスタッフがおり、彼らは国内業務を担当しています。プロジェクト予算管理、渡航手続き、契約関連などの仕事をしています。

現在は、本社には日本人のみですが、海外支社(アメリカ、バングラデシュ、ケニヤ)には現地スタッフがいます。仕事で使っている言語は、主に日本語と英語です。セネガルはフランス語圏ですが、現地のスタッフも英語を話すことができるので、基本的には英語でコミュニケーションしています。フランス語は現在勉強中です。

Q.現在の仕事上で成功したいこと、失敗したこと

成功したことは、調査実施したレポートを品質の良いものに完成できたことです。本調査レポートは、JICAにも評価され、相手国機関においても、好評でした。

成功した反面、失敗したこともあります。失敗したことは、調査実施までに時間が要したことです。調査票の作成や調査工程など、相手国機関のどの部署で誰が担当するのか不明瞭だったこともあり、話し合いに時間を要し、当初予定していたよりは調査開始が遅延しました。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

相手国政府や現地スタッフなどを巻き込んで仕事しているので、コミュニケーション能力、つまり、自分のやりたいことをしっかりと伝えて、その通りに実施してもらえるかが、大変重要だということを学びました。UNDPにいた際は、個人主義でチームで動くということはあまりありませんでした。しかし、コンサルタントの多くはプロジェクトに従事し、チームで仕事をします。ですので、いかに相手と意思疎通ができて、信頼関係を築けるかが大事だと思います。

また、この仕事はJICAとしてやっているので、JICAが専門家として送り出している日本人コンサルタントの価値を証明していく必要があります。全てが日本のやり方が正解であるとはなりませんが、日本の開発援助機関が日本人を専門家として派遣しているので。それなりに、日本的なやり方や価値判断でプロジェクトを進つ

めることを求められます。そのようなやり方を知らない現地のスタッフや相手国政府に、日本のやり方を説明し、それに基づいて、実施してもらう必要があるので、難しい場合もあります。

● PART2: 現在までの経験

Q.今までの経験について

幼少期から大学まで、日本で育ちました。高校生の時に、親戚の勧めで、2週間くらいアメリカにホームステイに行きました。また、大学在学中に、交換留学でチェコ・プラハに行き、経済学を1年間英語で勉強しました。交換留学に行こうと思ったきっかけは、一浪して大学に入り、留年して、少し周りと出遅れてると思っていたからです。2年生の時に、少し人と違うことをしないといけないと思って、3年生の時に留学に行きました。その当時、英語のスコアもよくなく、英語圏の大学に行こうと思うと、さらに英語を勉強しないといけないと思ったので、戦略として留学先はマイナーでも、英語で授業のある国にしました。チェコに行き、色々な人に出会い、結果的に人生の転機になったので、行って本当に良かったと思っています。

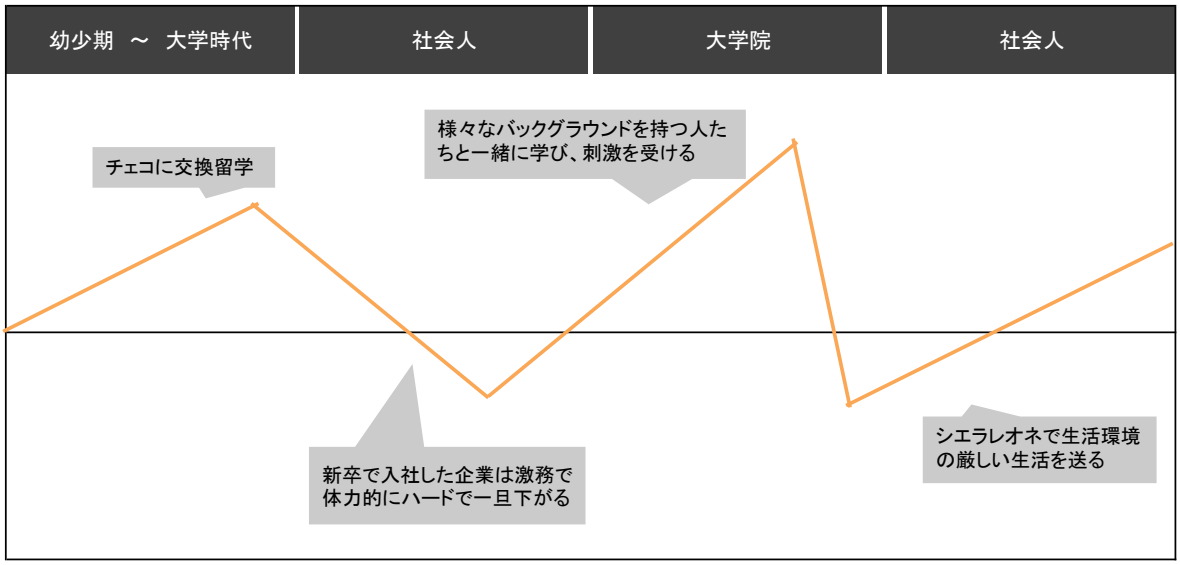
	滞在国 (留学・転勤等)	学校 (インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動 (ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
幼少期～中学	日本				日本語	
高校	日本			ホームステイ(アメリカ)	日本語	
大学	日本			交換留学(チェコ)	日本語、英語、チェコ語	
社会人	日本	医療機器メーカー			日本語	
社会人	インドネシア	医療機器メーカー			日本語、英語	
大学院	オーストラリア				英語	
社会人	シエラレオネ	UNDP・国連ボランティア			英語	
社会人	日本、セネガル	アイ・シー・ネット			日本語、英語、フランス語	

その後は大学を卒業した後、医療機器の会社に入社し、5年勤務しました。海外経験としては、3年目の時に、インドネシアでの駐在を1年半経験しました。仕事は、経営企画の仕事で、各国に支社あるグローバル企業だったので、各国から上がってくるレポートのチェック、Due Diligence(企業の買収（M&A）によってどれくらい収益が出るのかなどを考える)などをする部署で働いていました。インドネシアには、新工場立ち上げ時の

財務・経理の監督・システム構築するため、駐在しました。インドネシアでは、本社の要請と、現地経営陣の意向と相反することもあり、調整が大変なこともありました。

インドネシア駐在経験の後、会社を退職し、オーストラリアで、Health economicsという分野を大学院で勉強しました。インドネシアや他の途上国では、医療が充実しておらず、先進国では助かる病気で亡くなる事が多くあります。大学院に行ったきっかけは、Health economicsを勉強することで、途上国でも、多くの人に、必要な医療が受けれるための保健政策や保健システムを構築できるように、世界の健康に貢献する人材になりたいと思ったからです。大学院では、私みたいに社会人経験のある人や、学部からそのまま院に進学した人など、様々な人がいてとても刺激的でした。

大学院卒業後は、UNDPで国連ボランティアとして働きました。アフリカの最貧国の一つであるシエラレオネで、プログラムスペシャリストとして、エコノミストの下で分析をしていました。例えば、医療機関がどれくらい近い距離にあれば、病院に行く人が増えるのかと行ったことを研究・分析をしていました。シエラレオネでは、停電が多かったり、水がかろうじて出るレベルだったり、比較的厳しい生活環境で、家族とも離れ離れで生活していたので、UNDPでは1年働き、その後は日本に帰国しました。そして、2017年の7月からアイ・シー・ネットで働いています。



Q.日本人であることのメリット・デメリット

メリットの方が多いと思います。まずはパスポートですよね。仕事で海外に行っても、日本の場合は、国自体が信頼されているので、多くの国でビザなしで入国でき、ビザ申請も比較的早く許可がでます。あとは、今仕事をさせてもらっているJICAの仕事があるということもメリットだと思います。日本に生まれたからこそ、開発途上国で、日本の国際協力の仕事ができるのであり、それには感謝しないといけないと思います。

デメリットは、あまりないですが、強いていうなら、環境的に言語能力を高める必要がないことです。アフリカ、ヨーロッパの人たちは、環境的に3、4言語出来ることが当たり前だったりします。国際機関だと英語かフランス語が必須です。なかなかそういった人たちに、言語能力では勝てない場合が多いです。

● PART3:将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

まずは語学力です。加えてコミュニケーション能力が必要だと思います。ここでいうコミュニケーション能力とは、前提条件・理解が異なる想像できない人たちに対して、想像できるように、噛み砕いて説明できる能力です。

国際機関で働くのと、民間企業で働くのは、少し性質が異なり、共通しているのは語学力とコミュニケーション能力ですが、ほかにも必要な能力はあります。JICAなどで働くには、プロジェクトとしてチームで仕事をするので、マネジメント能力や人の動かし方などの能力も必要だと思います。一方、国際機関だと、もっと自身のことを主張することが必要です。国際機関の場合だと、よく政府とかの話し合いで我々はこういうことをやっていきますと声高く主張する必要があったり、JICAなどに比べて様々な国籍の人がいるので、自分の主張を通す能力は必要だと思います。

Q.学生時代にやっておいた方が良いことについて

留学は、できるのであれば是非チャレンジした方が良いと思います。特にできれば、交換留学で行った方が良いと思っています。留学中には、日本では想像できない多くの壁にぶつかるので、そのような経験は、かけがえのないものになります。

あとは専門性や興味のある分野を磨くというのはできればやっておいた方がいいですね。この業界の多くの人は、修士号以上の学歴を持った人が多いです。私のように、働いた後に、専門性を決める人もいますが、大学の時から、決めている人もいます。国際協力といっても、色々な分野があるので、どのような分野に興味があるか決めておかれると将来の方向性が決めやすいです。

Q.学生へのメッセージ

これから国際協力の場で働きたい学生に言えることは、勝手な私の解釈ですが、開発学を勉強したいという方は多いと思うのですが、それに加えて、自分の興味があることを勉強して、専門性を身につけると、活躍する場が増えると思っています。国際協力の場で働きたい場合は、若手のうちは、ジェネラリストよりもスペシャリストをぜひ目指してください。そうすると、道も開けやすいと思います。

Interview 7:プロジェクトアブロード – 木村洋平

“何かやりたいことがあれば、迷わずに飛び込んでみる“

● PROFILE

1989 年生まれ、大阪府出身。2013 年、京都外国語大学外国語学部英米語学科国際研究コース卒業。在学中に、プロジェクトアブロードのプログラムを利用し、タンザニア、南アフリカにて各半年ずつボランティアを行う。帰国後は、プロジェクトアブロードにてインターンを経て、大学卒業後 2013 年に入社。入社後は、ガーナや南アフリカなどでの勤務を経て、現在日本オフィスでマーケティングチームに所属。

● PART1: 現在の仕事について

Q.現在の仕事内容について

今の仕事は、プロジェクトアブロードというイギリスに本社がある会社で、NGOとかNPOと違って、企業として海外ボランティアやインターンシップを展開している会社になります。私たち日本オフィスでは、リクルートメントオフィスと呼ばれていて、ボランティアを集める側のマーケティングチームになります。私たちのことを知ってもらうための広報活動や、参加を検討してもらうためのカウンセリングなどをして、合っているプロジェクトをご案内をして申し込みに進めていくような、集める側の部隊になります。プロジェクトアブロードには、アジアやアフリカなどに30カ国ほど活動国があって、現地オフィスが置かれています。彼らは、オペレーションチームと呼ばれている、実際にプロジェクトをマネージする側のチームになります。

日本オフィスには、ノルマは与えられていませんが、去年の申し込みが例えば350人だとすると、今年は1.5倍の申込数を目指して頑張ってはいます。ただ、スタッフ一人一人に数字が課されているわけではなく、日本オフィス全体として数字が達成できれば良いという考え方です。去年の指標と比べて、今年は何人というように、目標の数字を月間の目標に落とし込んで、日々行動しています。達成できなかった場合は、罰則があるわ

けではありませんが、できるだけ次の何ヶ月などで取り返せるようにしています。

Q.現在のポジションについて(肩書き、ミッション等)

私はプログラムアドバイザーなので、お客様の質問に対する回答を行うというのがざっくりとした仕事内容になります。具体的には、電話やメール、LINEやライブチャットなどを使い、お問い合わせに回答をしています。これが一番メインの業務になります。あとは、説明会の定期開催も僕の仕事の一部になります。説明会は、東京では毎月開催していますし、大阪、名古屋、福岡でも開催しています。なので、その調整や告知も僕が担当しています。

Q.現在働いている組織について(日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)

日本オフィスには、スタッフは3名います。ただ、日本のオフィスのために働いている人数で言えば、5人になります。横浜にあるオフィスでは、お問い合わせなどに対応するのがメインの活動になるのですが、別の部署で南アフリカにグローバルインフォメーションデスクというものがあり、そこのオフィスには申し込み後の渡航前サポートをしている部署があります。その部署では、ビザや予防接種、荷物などの案内をしています。そこに日本人が1人います。また、もう1人日本人がいて、その人は同じく南アフリカの、ウェブサイトのコンテンツを管理しているコンテンツクリエーターチームにいます。なので、プロジェクトアブロードでは合計5名の日本人が働いています。

使用言語は、普段の業務だと、60%くらいが日本語になります。あとは主に英語です。英語を使う例としては、活動国のチームに、お客様の特殊な事情(例えば、医療資格を持っているので、それを活かせるプログラムがあるかなど)がある場合に伝えたり、プログラムに参加した方の状況確認をするときになります。また、マーケティングチームの上司が香港にいるので、英語でメールのやりとりをしたり、ミーティングをしたりもしています。

Q.現在の仕事上で成功したいこと、失敗したこと

成功したことは、目標の数字を達成できたことです。特に今年は、日本オフィスは過去最高の申込数を出す

ことができたので良かったと思います。その数字を達成する中で、僕がチームの一番前衛に立って、お客様を対応して、アドバイザーとしてお客様の悩みや不安を解消できたので、自分としてもやりがいがありました。他には、僕自身が海外に行くこともあって、2013年に日本人のコーディネーターとして、現地で困ってる日本人をサポートするために、ガーナに2ヶ月間派遣されました。何か特別なことをしたわけではありませんが、その時に、「木村さんがいてくれて良かった」と言ってくれたり、「木村さんがいるから大丈夫」と安心感を持って活動してもらえたのは良かったと思います。普段スタッフはフィールド各地に散らばっているのですが、私がいた2ヶ月の間に集めて交流を図ったりしました。そのスタッフたちが今でも繋がっていて、お互いが刺激しあっているのは、やって良かったと思いますね。

失敗したことはたくさんあります。アドバイザーとしては、ミスマッチングが一番大きな失敗に繋がるのかなと思います。僕がご案内した内容が現地で活かされなかったり、「もっとできると思っていたけどできなかった」、「事前に言っておいてもらえれば対策できた」というコメントをいただくと、その通りだなと思います。なので、そこはあらかじめきちんと悩みとして聞き、対策しておけば、現地に行った時に自分のポテンシャルを使って活躍できたとは思います。そういうことがあると、毎回聞き足りなかったと反省します。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

この仕事を通じて、たくさんのことを学びました。一つ言えるのは、貧困であっても、楽しく生きることはできるということです。ボランティアに行く時、最初は現地に対してすごく悲観的な思いや可哀想という気持ちで行ったりすることが多いです。ですが、実際は思ったより元気ではないですけど、自分たちが想像していた貧困はそこにあるのですが、ただその人たちがものすごく苦しんでるとは限りません。むしろ日々その中で横のつながりを大事にしながら、楽しく生きている人たちも中にはいます。私たちは、それができていないと考えて、貧困であることに対して可哀想などと思っているけど、実はそうではなくて、彼らは彼らなりの水準で暮らしていたりします。僕たちが、豊かな国に生まれ、忘れてしまっていることを、素朴な生活をしている人は分かっていると思いました。そういうのは生きていく上で非常に大事だと思います。

● PART2: 現在までの経験

Q.今までの経験について

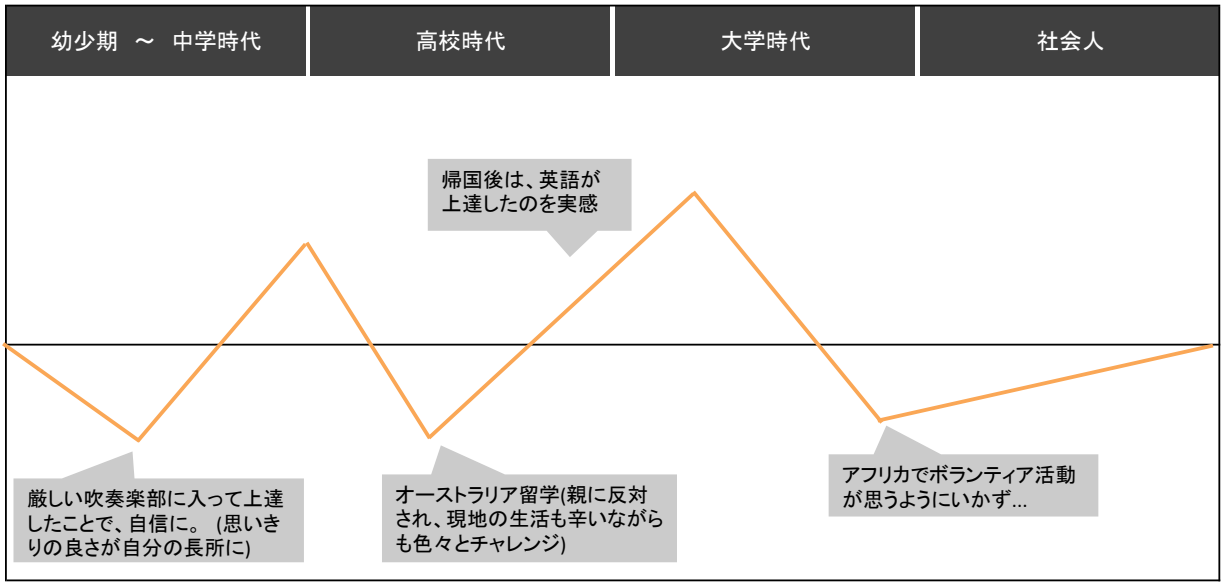
僕は中学校高校に入るまでは、海外には全然縁がなくて、海外はグアムに旅行に行ったことがあるくらいでした。興味を持ったきっかけは、小学校の時に面白い先生がいて、カンボジアの地雷除去のボランティア活動をやっていて、その時に話を聞いたことでした。自分たちは学校で授業を受けているけど、カンボジアには地雷で足を失くして人がいると話が衝撃的でした。小学生の頃は、「日本以外の国ってそもそも存在するの？」という感じだったのですが、その話を聞いて、海外に興味を持ちはじめ、それに対して何ができるのだろうというのを、ずっと考えていました。

その後は、何かをしたわけではないのですが、色々調べて行く内に、国連で働いてみたいという思いを抱くようになりました。働くためにどうしたらいいのかを考えるようになったのが、高校の時の留学でした。高校1年生の12月に留学のシステムがあることを知って、高校の姉妹校留学システムを利用しまして1年間留学しました。高校の姉妹校がオーストラリアにあって、試験などがあるかと思ったのですが、実際にはなくて、当時全然英語ができなかった僕でもいけることが分かり挑戦しました。将来国際機関で働くためには、絶対英語が話せる必要にがあると思って、行くしかないという思いでした。留学先では色々大変な思いをしましたが、現地の学校に通い、英語漬けの生活をしていました。留学先では、日本人は僕一人だけで、オーストラリアにいるときは、自分がどれだけ英語を話せるようになったのかはわからなかったのですが、日本に帰ってきて定期試験などを受けて、かなりできるようになっていて、自信になりました。その後大学は、英語を使って何かをしたいと思いました。大学は京都外大で、英語と国際研究という形でアフリカなどについてずっと勉強していました。色々調べていたら、スタディーツアーとか短期のボランティアとかはあったのですが、英語を使って何かを成し遂げたいという思いがあったので、触りだけ見るのではなく、自分で問題をみて、地元の人たちの人たちの目線で考えたいと思っていました。それで大学2回生と3回生の間の1年休学して、がっつりやろうという時に、プロジェクトアブロードに出会いました。プロジェクトアブロードであれば自分で期間を選べたので、半年間タンザニア、半年間南アフリカにボランティアに行きました。タンザニアはスワヒリ語が公用語なので、現地で話しながら覚えました。タンザニアにいる時には、ルワンダに旅行に行き、内戦のことを学ぶために博物館に行ったりもしました。

	滞在国 (留学・転勤等)	学校 (インター/現地校/公立/私立/学科等)、 勤務先	旅行(海外)	課外活動 (ボランティア、 インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
幼少期～中学	日本				日本語	
高校	日本			留学(オーストラリア)	日本語、英語	英検2級
大学	日本	京都外国語大学	ルワンダ	ボランティア(タンザニア、南アフリカ)	日本語、英語、スワヒリ語	TOEIC 820点
社会人	日本	プロジェクトアブロード			日本語・英語	
社会人	ガーナ	プロジェクトアブロード			英語	
社会人	日本	プロジェクトアブロード			日本語・英語	
大学院	南アフリカ	プロジェクトアブロード			日本語・英語	
社会人	日本	プロジェクトアブロード			日本語・英語	

帰国後は、プロジェクトアブロードの大阪の拠点で、2年間インターンをしていました。その後卒業後もプロジェクトアブロードに就職し、今は5年目になります。就職後は、ほぼほぼ日本にいるのですが、2回海外で働きました。1回目は2013年に2ヶ月、現地でフィールドスタッフとして日本人ボランティアのサポートしました。2016年6月から10月まで、南アフリカのグローバルインフォメーションセンターでプログラムアドバイザーとして、申し込み後の日本人の出発までの対応(ビザ取得の対応等)を行っていました。

僕は最終的には国際機関で働く道には進みませんでした。大学院に進まなかったので選べなかったというのもありますが、休学してアフリカで活動している時に、国際機関ならではの問題に対面して、現場レベルで人々に寄り添いながら、駆け回っていたいという自分の思いとあまりマッチしておらず、向いていないと思い、日本に帰ってきました。ただ、アフリカとか関わっていたいという思いはあり、プロジェクトアブロードに就職しました。プログラムアドバイザーという職業を選んだ理由としては、学生のやりたいという思いをサポートできるからです。例えば将来国際機関で働きたいとか、国際医療に関わりたいとか、色々な理由があると思うのですが、そういった人たちに自分ができなかったことをしてほしいというとおこがましいですが、意志を持って何かにチャレンジしたいという思いを持った人を応援するポジションというのは、僕はすごく好きです。ボランティアに行く前と行った後に関わることができるのが好きで、これはボランティアアドバイザーしかできないと思いますね。学生が現地で色々な経験をして、将来の進路を決めて、羽ばたいて行く姿が見れるのは、本当にやりがいがあります。



Q.日本人であることのメリット・デメリット

メリットとしては、国が発展しているというのもありますし、すごく細かくて几帳面な国民性なのも良いと思いますし、世界で信用されている民族でもあると思います。今は少し下火ですが、工業などでも強くて、世界でもよく日本メーカーの商品が認知されて、使われていますよね。ご飯も美味しいし、受けがいいですよね。日本人って言ったら安心されることが多いと思います。

デメリットは、適応するのが苦手な人が多いことではないかと思います。例えば、日本人は、綺麗好きな人が多いので、なかなか現地に行っても適応するのが大変な人が多い気がします。なので、現地に行って、お湯が出なかったり、停電があったり、色々な不便なことがあると僕たちは事前に伝えるのですが、やはり中々慣れなかったりすることが多いです。

● PART3:将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

一言で言うのは難しいのですが、人と文化と、その人が持つバックグラウンド、総合的には人の考え方に敬意を払うことが大事だと思います。それを反省しているのがタンザニアでの経験です。嘘つきって言われたときに学んだのですが、やっぱりその人が信じているものに合わせて考え方を変えていかないと、中々変わらないと思います。例えば、色々なバックグラウンド、国籍、宗教の人たちと一緒に働くということは、

その人たちの考えの根底にあるものが全然違う中で一緒に働かないといけないので、ゴールが一緒であればある程度は大丈夫だと思いますが、チームとして働く中では、その人たちの背景を踏まえた上で、この国では、こういう考え方というのを踏まえた上で仕事をしていく姿勢が必要です。なので、自分の考え方を曲げないというスタンスだと難しいと思います。あとは、謙虚にいくと、相手の考えにのまれてしまうので、自分の必要なことを主張できる力もあった方が良いですね。

Q.学生時代にやっておいた方が良いことについて

英語は勉強しておいた方が良いです。あとは、色々な文化に触れておくと良いと思います。できれば、現地の家庭とか、コミュニティに入って、その人たちと同じ目線に立つ経験をして欲しいと思います。様々な文化とか考え方とかに触れて、自分の立ち位置というか、生き方じゃないけどそういう軸を持って、世界に出るのは大事です。日本のことを説明できてシェアできると、視野や見識が広がったりすると思います。

Q.学生へのメッセージ

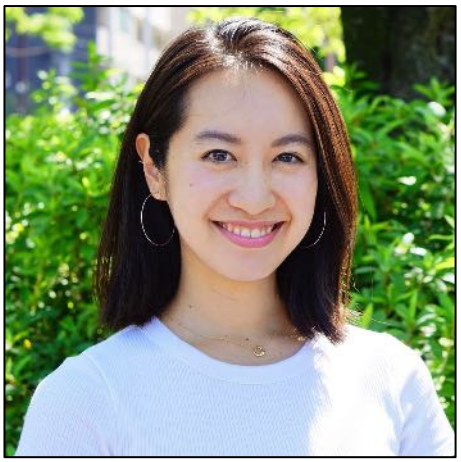
何かやりたいことがあれば、迷わずに飛び込んでみること。それで結局ダメだったら、辞めたらいいだけの話なので。それで自信がついたらそれでさらに伸ばしていけば良いので。幅広くでも良いし、浅くでも良いし、何でも良いので、ちょっとでも興味を持った分野に、積極的に、時間の無駄だとは思わずに、チャレンジしてほしいと思います。それがきっと将来、自分の興味だったり、方向性に繋がってくると思います。

Interview 8 : 株式会社 Selan 代表 - 樋口亜希

“人間万事塞翁が馬“、“start where you are, use what you have, do what you can “

● PROFILE

1989 年生まれ。東京出身。2012 年、北京大学国際関係学部卒業。2、3 歳の時に中国・武漢、10、11 歳の時にアメリカ・ボストン、18～23 歳まで 5 年間、中国・北京で過ごす。大学卒業後は、リクルートホールディングス、リクルートキャリアを経て、2016 年、株式会社 Selan 代表取締役就任。2018 年、ダボス会議参加。



● PART1: 現在の仕事について

Q.現在の仕事内容について

今は二つの事業を行っています。一つは、お迎えシスターいう、子供の送り迎えと英語学習を同時に行うサービスです。これは、ただのお迎えサービスや英語学習ではなく、自宅での英語教育に加えて、価値観を広げる教育をしています。私たちには、「学びをボーダーレスにする」というミッションがあり、グローバルなマインドセットを子供のうちから養い、一緒に学ぶ人や環境をよくしていきたいという思いがあります。通常の学びだと、教室で学ぶことが多いと思うのですが、そうではなくて、留学やインターナショナルスクールに行かずに、家の中で手軽に体験できる場を作るというのが、私たちのコンセプトです。

もう一つの事業は、ドットスクールという、お迎えシスター学校版です。簡単にいうと、週末のインターナショナルスクールのようなもので、子供達が英語で、人権問題や環境問題、国際情勢について学んでいます。一つの現象から、算数的な要素や、哲学的なことなど、様々なことを学べるというコンセプトで作られているスクールです。

Q.現在の仕事の目標について

「一人でも多くの子供が夢を実現できる世界を」というのが、会社のビジョンです。このビジョンを実現するために、二つの事業があります。この二つの事業を通じて、なぜ学びをボーダーレスにする必要があるかというと、今までの教育では、ある既存のフォーマットにハマる子供は成長するのですが、そこからはみ出た子供は潰されてしまいます。そういった教育だと、ある一定の枠内での人間しか育てられないので、私たちは、一人一人の個々の素質に沿った学び方や生き方を提供したいと思っています。

Q.現在のポジションについて(肩書き、ミッション等)

代表をしています。会社の採用や経営、資金調達、提携など、会社の方向性を揺るがす部分が、私のミッションになります。

Q.現在働いている組織について(日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)

今はビジネスサイドに 9 名、先生は 300 名くらいいます。先生は 3 割くらいが外国人になります。ビジネスサイドのスタッフは、日本人なので、日々のコミュニケーションは日本語ですが、グローバル展開を考えており、スクールのコンテンツやマニュアルは英語で作っています。

Q.現在の仕事上で成功したいこと、失敗したこと

どんなに仕組化をして、効率よく業務を進めようとしても、感情抜きでは何も語れないというのが、経営をしていてわかりました。例えば、オペレーションとか、組織の設計をするときも、理論上は可能であっても、それを動かすのは人です。その人が仕事をするときに発生する心理的な喜びや痛みを無視して作った時に、組織が崩壊してしまうということを、仕事を通じて実感しました。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

私の中に、いわゆる社長像というものがあり、それを信じすぎた故にメンバーに迷惑をかけたという経験があります。社長というのは、ビジョンを掲げ遠くを見て、何かトラブルが発生したら全部対応して、セイフティネットにならないといけないと思っていました。けれど、そうしているうちに、今度は私が疲弊してしまいました。遠くを見すぎて、社内のことをあまり見れていなかったんですね。それで一回チームが解散してしまいました。その時に思ったのが、土台を固めずに、拡大することはできないと思いました。信頼関係のある強

固な組織にすることが何よりも大事で、それが固まっているからこそ、お客様がいたり、先生がいたり、拡大ができたりすると、私自身のメンタリティを改めました。そして気づいたのが、なぜ外ばっかり見ていたかと言うと、本当の意味で助けを求めることができていなかったからです。世の中には、力強いリーダーシップ論が溢れていて、自分もそうでなければいけないと思っていました。けれど、元々私はそういうタイプでもなく無理をしていました。うまくいかなくなってからは、開き直って、できないことはメンバーに伝えて任せるようにしました。そうしたら、色々なことが良い方向に回り始めました。なので、弱みを出すというのが、Selanを立ち上げてからの3年間の中では一番大きい学びです。

● PART2：現在までの経験

Q.今までの経験

生まれは日本で、2、3 才の時に中国に行きました。その後日本に帰ってきて、また小学校高学年でアメリカに引っ越しました。アメリカで、ピアスを開けていたこともあり、日本に帰国後は、不良と言われたりして、カルチャーショックを感じていました。高校に進学してからは、小さい頃から国際情勢とか好きだったこともあり、世界史の勉強にハマり、自分の世界が広がっていく楽しさを感じなら勉強していました。高校卒業後は大学受験をしたのですが、失敗してしまい、中国の北京大学を受験し直しました。

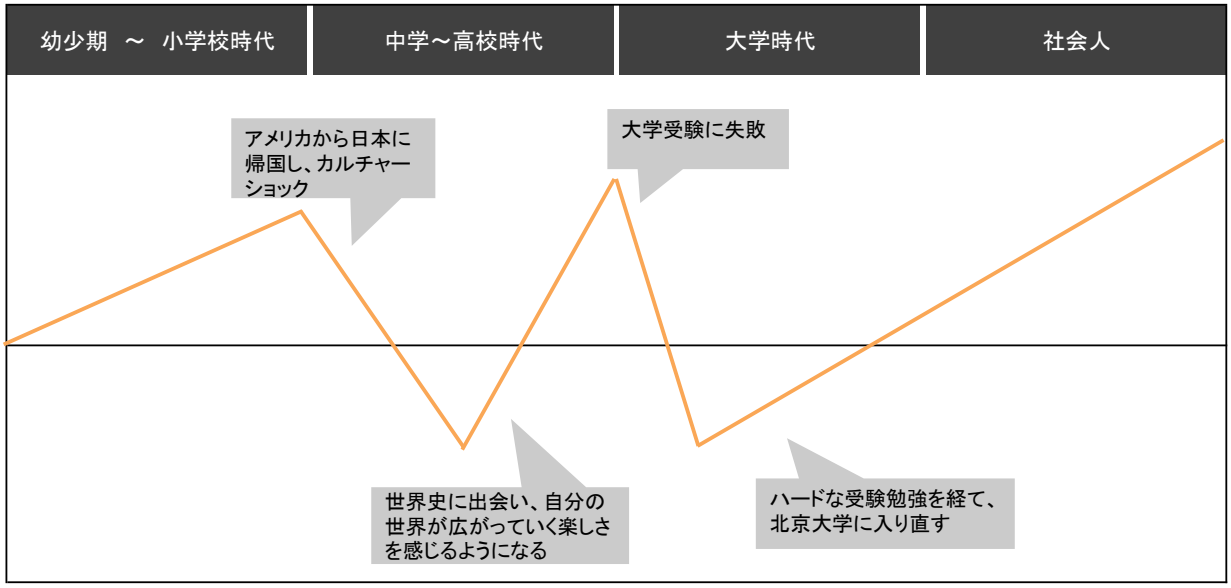
大学卒業後は、リクルートキャリアで採用広告の営業をしていました。もともとグローバルなキャリアを促進することをしたいと思っていたのですが、なかなかタイミングが合わず、リクルートは大好きでしたが、もっと自分のバックグラウンドを生かしたい！と思うようになり、会社を辞めて、起業することにしました。

自分自身もそうなのですが、一人一人がアイデンティティを活かせることをするのが一番の幸せだと思っていたので、まずはどうしたらアイデンティティを早いうちから気づけるのかということを考えました。私がアイデンティティに気づいたのは、小さい頃の原体験があったからなんですね。私が小さい頃、両親は仕事が忙しくて、夜中まで働いていて、私を迎えに来れませんでした。そこで、学生向けに「娘のお迎えをしてくれる人を募集します」という張り紙を留学生の寮に貼り、そこから、留学生の外国人のお姉さんたちが、私を迎えに来るようになりました。中々日本では会えないような人たちが、私を迎えにきて、遊んでくれて、それが私にとってとても大きな影響がありました。小さい頃に、異質な人に触れることは、「自分」という存在を明確に

し、多様な感受性を持つことができる、というのが私の原体験としてあったため、それがきっかけで、今のビジネスが生まれています。

	滞在国 (留学・転勤等)	学校 (インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動 (ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
0～1才	日本				日本語	
2～3才	中国・武漢	現地の幼稚園			中国語	
4～8才	日本				日本語	
9～10才	アメリカ・ボストン	現地の小学校			英語	
11～17才	日本				日本語	
大学	中国・北京	北京大学			中国語	HSK8級(入学時)、HSK6級(卒業時)
社会人	日本	リクルートホールディングス、リクルートキャリア			日本語	
社会人	日本	Selan			日本語、英語	

人生を通して共通しているのは、大きな決断をする時は、必ず「今これをやらなかったら、死ぬときに後悔するだろか？」と自分に問いかけています。北京大に行く決断をした時も、チャレンジをせずに行かなかった時に死ぬ時後悔すると思ったし、26 才の時に起業しようと思ったのも、そういう思いからで、すべてを突き動かしています。



Q.日本人であることのメリット・デメリット

メリットは、ソフト面のブランド力だと思います。これは、2018 年 1 月に世界経済フォーラムに参加したときに、改めて実感しました。例えば、食べ物が美味しい、清潔である、美に対して繊細であるなど、そういう心の部分では褒めてもらえます。しかし、日本の存在感という部分では世界にアピールできていません。GDP で言えば世界第 3 位のにも関わらず、経済面などで目立ったところがないところが、とても残念だと思います。

デメリットは、やはり教育環境だと思います。国際的な場で戦っていけるように、教育されていないのは、非常にもったいないことです。日本人は能力もあるし、勤勉なので、そこのパンチさえあれば、世界にインパクトを出していけるのではと思います。

● PART3:将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

国際的に働きたいという思いを持つことです。能力も大事ですが、それよりもパッションがとても重要です。その時は英語ができなくても、いつからでも勉強できるし、後からついてくると思っています。むしろ、どちらかというとパッションを燃やし続けることができる能力というのが必要だと思います。モチベーションを自分でコントロールして、モチベーションが高い状態でいる。それが何よりも、重要だと思います。

Q.学生時代にやっておいた方が良いことについて

私が学生だったら起業すると思います。仮に会社を起こさなくても、自分のプロジェクトとか、自分が主体的になって何かをするという経験があると、社会人になった時の世の中の見え方が違います。リーダーシップをとった時の大変さとか、辛さとか、あとは自分が動かないと何も動かないというプレッシャーとか恐怖とか、こういった経験というのは、やっているのといないのでは、人の痛みとか、人に感情とかの寄り添い方とかも変わってくるので、経験しておいた方が良いと思います。

Q.学生へのメッセージ

すごく好きな言葉が、二つあります。

①「人間万事塞翁が馬」- これは中国の古い諺です。ある物語から来ている諺なんですが、要は人間良い時と悪い時があるけど、悪いからと言って落ち込む必要はないし、良いからと言って喜び過ぎてもいけない。自分の周りに起こることに振り回されずに、自分自身の芯をぶらさずに生きるという意味です。私の人生も、皆さんの人生もそうだと思いますが、人生って山あり谷ありだと思います。

②「start where you are, use what you have, do what you can」- もちろん野心的だったり、アンビシャスに何かを成し遂げていくのは重要である一方で、自分の目の前、足元をしっかり見ていないと本当に本末転倒になってしまうということを経験して、それからはこの言葉が身に染みています。特に start where you are, 今自分がいる場所から始める、今ゼロの状態だったとして、いきなり明日 5 になったりはしないので、これを学生たちにも意識してぜひ社会人になって欲しいと思います。目の前が一番重要であるという気持ちで頑張っていけば、良い方向に進んでいくと思います。

Interview 9 : White Star Capital - 長尾俊介

“I took the one less traveled by, and that has made all the difference “

● PROFILE

1977年生まれ、スイス・ジュネーブ出身。2001年、慶應義塾大学商学部卒業。卒業後は、モルガン・スタンレーにて5年勤務した後、INSEADにてMBAを取得。フランス・パリにて、食品流通ベンチャーを立ち上げ、幅広く経営に携わった後、スイス・ジュネーブの世界経済フォーラム事務局に勤務。現在は日本に帰国し、White Star Capital日本オフィス代表、バウアーグループジャパン副代表などを兼職。

● PART1: 現在の仕事について

Q,現在の仕事内容について

今は3つ仕事をしています。一つ目は、ホワイトスターキャピタルというベンチャー投資の仕事です。主に欧米のスタートアップ企業、特にテクノロジー企業などに対して出資をして、成長を支援し、リターンを得るという仕事です。この仕事の目標は2つあります。一つ目は、欧州と北米のオフィスで投資をした会社のアジア市場への展開を支援することです。個人的には、こうしたテクノロジー企業への投資とアジアへの進出を支援することによりアジアの社会がもっと豊かになれば良いと思っています。二つ目の目標は、アジア地域のスタートアップ企業に投資をすることで、日本・韓国それに香港において世界に挑戦できる企業に投資をするというものです。何でも投資すれば良いというわけではなくて、投資に対するリターンを達成する必要もあるので件数を増やすよりもごく少数の投資を想定しています。海外進出を支援する目的としては、アジアのそれぞれの国で生まれた企業を海外市場への進出させることにより企業価値が大きくなり、リターンを得やすくなるので、その手助けをしています。

二つ目は、バウアーグループアジアという会社で、政策渉外のコンサルティングの仕事を行なっています。バウアーグループはアメリカのワシントンD.C.にある企業で、アメリカのFortuneなどの企業ランキングで上位に位置するグローバルな企業のアジアでの政策渉外の助言をする業務を行なっています。政策渉外とは一見聞きなれないと思いますが、政策や規制に関する情報を収集して、お客様となっている法人企業に関連する法案が通る見通しを提供したり、例えばアジアの新興都市で工場を作る際に、規制についてのリサーチをしたりと言った業務のことを指します。今のところは、アメリカの企業のお客様が多いです。それはそもそも日本では政策渉外という業務が浸透していないからでもあります。今後日本で政策渉外のコンセプトが普及すれば日本のお客様も獲得できるのではと思っています。バウアーグループアジアはアジアでは既に10年近くにわたって２２カ国でお客様の案件を請け負ってきたのですが、日本のオフィスは比較的新しく、2018年4月に日本に設立したばかりです。なので目下は案件をこなしつつ日本での知名度の向上を図ることが当面の目標です。

三つ目の仕事が、自民党のとある参議院の国会議員のニコニコ動画の番組内でコメンテーターをしています。この活動をしている理由は、平たくいうと、自分なりに様々な番組視聴者にとって政治をもう少し身近なものにしたいという思いがあるからです。今のところ、番組をライブで見てくれている人が毎週6000~1万人くらいいます。政治家がやっているインターネットの番組でこれほどのライブでの視聴者を集めているものはほとんどないので、番組出演者・製作陣一同誇らしいと思いつつも、例えば他のストリーミングの手段を使ったり、或いは今よりもうまくソーシャルメディアを使うなどして、裾野を広げて行きたいと思っています。過去にも番組に総理大臣が出演することもあったのですが、さすがの総理の影響力と言った感じで視聴者数も3万人以上を記録しました。常時それくらいの人に番組をみてもらえるようにしたいですね。

Q.現在のポジションについて(肩書き、ミッション等)

ホワイトスターキャピタルでは、日本オフィスの代表をしています。バウアーグループアジアでは、もう一人外務省出身の同僚と2人で日本のオフィスを運営しています。

Q.現在働いている組織について(日本人、日本以外の国籍の人の割合、その内訳、使用言語等)

ホワイトスターキャピタルには15人ほどスタッフがいます。日本人は僕だけで、残りはカナダ国籍が5人、フランス国籍が4人、アメリカ国籍が3人、韓国籍が1人、ウクライナ国籍が1人、ポルトガル国籍が1人になりま

す。日本で仕事をしているのは僕だけです。カナダの同僚がケベック州の出身者が多いのので、仕事で使用する言語は、英語とフランス語になります。また、日本の投資家に出資して頂いているので、その方達とお話しする際には、日本語になります。同僚はバイリンガルの方が多いのですが、僕は腹を割って話せるよう極力相手の第一言語に合わせるようにしています。

バウアーグループアジアでは、日本の共同代表と話す時は日本語、それ以外の人とは英語になります。また政治家の仕事は、完全に日本語になります。

Q.現在の仕事上で成功したいこと、失敗したこと

ホワイトスターキャピタルの仕事は始めてから現在2年弱くらいになるのですが、日本から投資家を探したいという創業者の期待に、2年の間で日本からの投資家を見つけることで応えることが出来たことが今のところ成功していることです。失敗は今の所運良くないです。これから成功したいこととしてはアジア地域から世界で十二分に通用する起業家を見つけ投資をし、成長を助けていくことです。

バウアーに関しては、まだまだこれからというところです。失敗したことと言えば、これは意外と繰り返し起こることなのですが、お客様が期待している政策渉外ができていないということです。少し抽象的になってしまいますが、お客様の多くが今のところまだアメリカの会社が中心であり、彼らが期待する成果と実際に日本でデリバリーできるサービスの間に乖離があり、結果として彼らの期待に添えないことがあります。現実的に何ができて何ができないのかの仕切りと正しい情報伝達ができていないのは、結果的にお客様からすると失敗に映っていると思います。ここは我々からしっかりと、「何が可能で何がそうでないか」の伝達を地道にしていくしかないと思っています。成功したいことは、少し大き過ぎる事かもしれませんが日本の国益を損ねることなく、その上で企業活動がしやすい環境を整えていくことに貢献する、ということでしょうか。

国会議員のネット番組の仕事では幸いにもまだ失敗はありません。成功、と言えるにはやはり視聴者数のKPI達成もあるのですが、せっかく投票権が18歳からに下がったこともあるので若年層の政治参画をさらに促すことをさらに達成できればいいですね。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

社会には、自分を応援してくれる人もいれば、自分にとってどういう価値を与えてくれるかという観点でしか見ない人もいたり、と色々な動機で働いている人がいます。仕事をするということは嫌が応なしに色々な人との共同作業になるので自分が一緒に仕事をする人の様々な動機を見極める必要もある、ということを学びました。そうしないと、自分の立ち位置を決めれませんし、自分のキャリアを形成する上で、上手に立ち回れないと思います。仕事をする、ということ一般的に言えることだと思うのですが、学生時代にインターンをしたりなど実際に働く経験を積んでいないと前述のように様々な動機を持っている人がいる、ということはなかなか体験しないことだと思います。

● PART2：現在までの経験

Q.今までの経験について

0歳~9歳まで、スイス・ジュネーブで暮らしていました。ジュネーブでは、学校はインターナショナルスクールに通っていたので、使っていた言語は英語、日々の生活では時々フランス語も話していました。その後、小学校4年生の時に日本に帰ってきて、そこから帰国子女枠のある小学校、公立の中学校に通ったのち、高校受験をして慶應に入りました。高校と大学を、慶應を卒業して、大学の2年目でアメリカ・ミネソタ州の広告代理店に1ヶ月半インターンに行きました。それが久しぶりの旅行以外の海外経験でした。その後、大学３、4年の時にそれぞれ、1.5ヶ月ずつ南アフリカに行きました。私は、商学部の経営学のゼミに所属していて、南アのアパルトヘイトが終わった後の労働状況や経営環境状況に興味があって、それで論文を書こうと思ったのですが、参考文献がないので、だったらせっかくなので現地に行こうと思って、通算3ヶ月行きました。

大学卒業後はモルガン・スタンレーに就職しました。モルガン・スタンレーでは、1回くらい出張がありましたが、それ以外は東京で仕事をしていました。それこそ新人研修の時に一回だけニューヨークに行っただけですね。モルガン・スタンレーを退職した後は、フランスにあるINSEADという大学院に通っていました。そしてほぼ卒業と同時に、パリに移り、2008~2009年までの2年間弱、魚の卸売りの会社を、INSEADの卒業生と一緒に起業し、パリでしていました。リーマンショックの間にやっていたので、全然うまくいかなくて、本当はBtoBの卸同士が売買できるマーケットプレイスを作る予定だったのですが、IT投資するお金を借りることでき

なかったので、パリのホテルや卸売業者などに自分たちでデリバリーしていました。その後、2009年~2015年まで、パリからスイスのジュネーブに移り住み、世界経済フォーラムで働いていました。2015年の末に、日本に帰国し、出張などはありますが、現在はほぼ東京ベースで働いています。

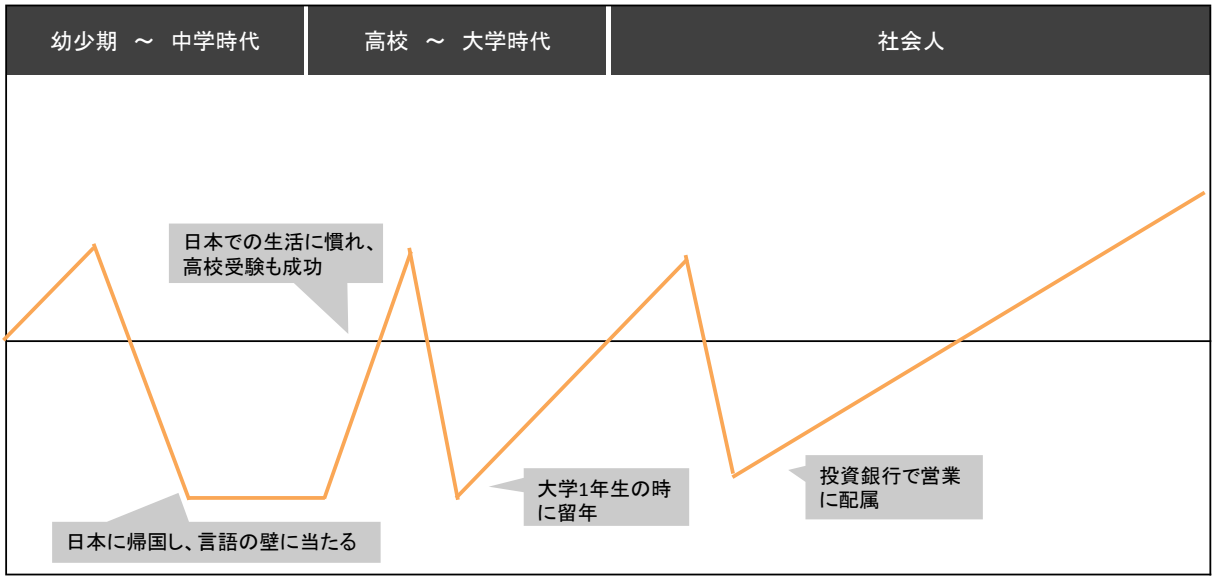
	滞在国 (留学・転勤等)	学校 (インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動 (ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
幼少期～9歳	スイス・ジュネーブ	インターナショナルスクール			英語、フランス語	
9歳～高校	日本				日本語	英検準2級
大学	日本	慶應義塾大学		インターンシップ(アメリカ)、ゼミの活動(南アフリカ)	日本語、英語	TOEIC 940点
社会人	日本	モルガン・スタンレー			日本語	
大学院	フランス	INSEAD			フランス語、英語	MBA
社会人	フランス・パリ	食品流通ベンチャー			日本語	
社会人	スイス・ジュネーブ	国際経済フォーラム			英語、フランス語	
社会人	日本	White Star Capital、バウアーグループジャパン等			日本語、英語、フランス語	

大学時代には、アメリカの広告代理店でインターンをしていたのですが、英語の資格などはあまり見られていないと感じました。むしろ、英語で自分がやりたいことを伝えられて、コミュニケーションが取れることが重要視されていました。TOEICで満点取っているよりも、文法構造がめちゃくちゃでも、身振り手振りでコミュニケーションを取ろうとしている人の方が、会社では戦力になるので、そういった人を採用すると思います。

大学卒業後は、モルガン・スタンレーのトレーディングデスクで働いていたのですが、外国人のトレーダーもいたので、英語の比重が多かったです。ただ、取引を行った後に、それをシステムに反映するバックオフィスの人がいるのですが、その人たちの多くが日本人だったので、その人たちとは日本語で仕事をしていました。モルガン・スタンレーで、最後の1年は営業をしていたのですが、お客様が日本人だったので、その時はほとんど日本語で仕事をしていました。モルガン・スタンレーを辞めたきっかけは、営業に配属されたことです。僕は本当に営業に向いていなくて、当時僕はリーマンショックの引き金になった商品を売っていたのですが、それが嫌で辞めて、気分を一新するためにも大学院に進学しました。

INSEADを卒業した後は、会社を立ち上げて、魚の卸売りをしていました。このビジネスを選んだ理由は、

起業する時に、わかりやすいビジネスモデルで起業したかったからです。テック企業で働いていた経験もあるわけではなかったので、メインのビジネスがあって、プラスでITのプラットフォームを作るのであればできると思い、そういった理由でビジネスを立ち上げました。もう一つは、当時欧州で日本食がブームになりつつあったことです。その前には、鉄板焼きや寿司などの高級な食事が流行っていたのですが、だんだんと庶民の手が届く定食屋やらーめん屋などが流行り出したので、その波に乗れるのではないかと思っていました。なので、ただの魚というよりは、日本の人たちが扱うような魚を提案をしていました。



その後は世界経済フォーラム（WEF）で働いていました。世界経済フォーラムで働いた日本人は、今までの組織の50年ほどの歴史でも10人くらいしかいなかったり、人と違うキャリアを選んで来ているのですが、その時は正しいか分からない決断が、後から結果的には良い風に繋がって来ているような気がします。そしてなんで正しいか分からなかったかというと、ほかの人がやって来ていないからでした。でも、「ほかの人がやっていない＝その道はお先真っ暗」というわけでもないと思います。人がやったことがないことをやる時に、なぜやるのか聞かれると思うのですが、それを説明するのは難しいと思います。でも、往々にして後から見ると、点を点は繋がっているので、若いうちはやること全てに説明がつかなくても良いので、色々なこと、特に人がやっていないことに挑戦するべきだと僕は思います。

Q.日本人であることのメリット・デメリット

メリットは、日本人あるいは日本のことを、無条件で好きな人がいることだと思います。好きな理由はあったりするのですが、自分が日本人であるだけで好印象を持ってくれる人が結構多いと思います。それは、大にして日本人であることのメリットで、最初に印象が良いと、あとあとスムーズに交流ができたり、仕事が進んだりします。

デメリットは、色々とありますが、まず一つ言えるのであれば、アジアで忘れられがちであることです。最近では、インドや中国の勢力が増していて、日本人はあまり自己主張をしないし、私たちの文化ではそれを良しとしないですよね。日本は、高度経済成長期の時は、とりあえず学校を終えて働けば、経済が成長していきました。しかし今の日本は、社会・経済・政治とたくさんの問題があって、なかなか自分たちで解決策を探せずにいると思います。日本は比較的外からの圧力で変わることはあるのですが、本来ならば自分たちで解決策を模索して試行錯誤しながらも社会・経済・政治変革をしていく必要があると個人的に思います。けれども、日本で教育、特に高等教育を受けていると、自分の頭で考える訓練が決定的に不足しているので、その部分が致命的に弱いです。この状況は、少しずつ変わりつつあるとは思いますが、やはり未だに根強い問題だと思います。

● PART3:将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

2つあると思います。まず、コミュニケーション能力がやはり必要だと思います。ビジネスでは対話をしなければいけないのですが、特に文化とか宗教が違うと、前提条件が変わってきます。日本人の間で話している時は、なんとなく価値観を共有しているので、話の4割くらい話すとだいたい伝わっていると思うのですが、前提条件が異なる外国人とコミュニケーションを取る際に、4割しか言いたいことを言わないと、誤解される可能性があります。その辺りのうまいキャッチボールをするという意味でのコミュニケーション能力は必要だと思います。

もう一つは、良いコミュニケーションを取るために、相手を理解しようとする能力が必要だと思います。例えば、違う環境や風習とか、異質なものを理解しようとする姿勢とできる能力がものすごく大事です。日本にいても、国際的に働かなくても良い環境というのは段々と減って行くので、「国際的に働く＝外国に行く」ではなくて、日本のドメスティックな商社で働いていても、売り先がアフリカになるという感じに今後

なっていきます。そうなった時にコミュニケーションを取っていく必要があるし、環境に行かないといけなくなった場合は、それを一生懸命理解する、そのセットが必要になってくると思います。

Q.学生時代にやっておいた方が良いことについて

三つあります。一つ目は、これは自戒の意味も込めてなんですが、違う学問分野を見た方が良いと思います。自分は理系だと思っていたら、文系科目を見た方がいいし、その反対も然りです。なぜかというと、我々の事象を多面的な角度から見ていくことに他ならないんですね。それを自然科学的に見るのか、社会科学的に見るのかの違いはあるので、全人格形成的な意味で、いろいろな学問を見た方がいいと思います。二つ目は、自分の関心のある分野でインターンシップをするべきだと思います。アルバイトももちろん良いのですが、やっぱりある程度大学って先生をのぞいたら、3~4歳くらいの年齢の人としか関わらないですよね。それなのに、大学を卒業するといきなり部長とか、お父さんと同じくらいの年齢の人と一緒に働かないといけなくて、それに対するエクスポージャーを、ある程度大学のうちから、自分の興味のある分野を合わせて経験をしておくべきだと思います。三つ目は、学生時代にやっておいた方がいいことという質問に対して思うことですが、これからまたいつでも学生になれると思います。だから何となく22歳で学生時代が終わってしまうという考え方を、変えた方が良いと思います。これからどんどん社会が変容していく中で、その都度モジュール的に新しい知識を入れてバージョンアップしていかないといけないんですね。軌道修正していかないと、社会で働くことが難しくなっていくと思います。なので、知識が必要だと思った時にまた学校に戻れば良くて、学生生活の位置付けが変わってくると私は思います。

Q.学生へのメッセージ

将来国際的に働くことを目指さなくても、国際的に働かざるを得ない時代が来ます。国際的に働くということが、選択肢ではなくなります。今まではドメスティックに生きるという選択もできたと思いますが、今後はそれではキャリアを構築できないと思います。なので、「国際的な社会に入っていきますが、あなたはどういう風に人生設計をしますか」というのが考えるべきテーマですね。世界には、高等教育が当たり前に受けることができない人が大半で、そういう人たちのハングリーさはハンパなく、その人たちと競争していかなければいけなくなります。その時に英語が喋れないとか、異文化を理解するのが億劫だとか、そういうことをいう余裕はないはずで、なるべく今のうちから準備をして行く必要があると思います。

Interview 10 : 牧浦土雅

“Life is a tragedy when seen in close-up, but a comedy in long-shot “

● PROFILE

1993 年東京生まれ。13 歳で単身渡英し、ボーディングスクール入学。ブリストル大学中退。2014 年から東アフリカで国際協力機関と農民とを繋げるプロジェクトを牽引。TED『世界の 12 人の若者』に選出。AERA『日本を突破する 100 人』に選出。タイを拠点としたデータ関連事業“Personal Data Bank”の立ち上げの後、世界中で数百万人の熱心なユーザーを有す IT 教育サービス“Quipper”の世界展開に従事。第 28 回国家戦略特別区域諮問会議に出席し、サンドボックス特区創設を首相・関係閣僚に、カルロス・ゴーン日産自動車会長（当時）らと共に提言。2018 年 11 月からはアフリカに戻り、国連と共同開発した人工衛星解析サービス“Next Space”を農村で提供中。趣味はトライアスロンとキックボクシング（1 戦 1 敗。2017 年 12 月に元世界王者の小比類巻選手と対戦。2RKO 負け）と観世流能楽（国立能楽堂での演能実績あり）。

● PART1：現在の仕事について

Q,現在の仕事内容について

9 月までは、オンライン教育を行っている Quipper の東南アジア支社で働いていました。過去 3 年間ほど、シンガポールを拠点にして、インドネシアとフィリピンの 2 カ国で活動をしていました。具体的な仕事の内容としては、各国の優秀な教師の動画を撮影し、コンテンツを作成して、それを現地の学校で使ってもらえるよ

う営業活動をすることです。学校で動画を使って授業ができるようになることにより、いつでもどこでも最高の教育を提供できるというのが、Quipper の狙いです。元々は、リクルートにスタディサプリというサービスがあり、そのサービスの海外進出のために、Quipper を買収したのが始まりでした。Quipper は、当初はオンラインで宿題ができるというサービスで、300 万人くらい無料ユーザーがたくさんいました。その後ビジネスとして収益化していくために、オンライン動画サービスを始めました。

現在は、退職して、次はアフリカのガーナで、農業関連の事業をする予定です。実はもう少しずつその仕事も始めているのですが、フルタイムで働くのが 11 月からになります。

Q.現在の仕事の目標について

Quipper での私の目標は 2 つあり、①ユーザー数を増やすことと、②売上が全くないところから、売上を作ることでした。最初の 2 年間はユーザー数を増やすことに専念していました。最後の 1 年は売上を伸ばすことだったのですが、そこで矛盾がありました。売上を伸ばすだけなら、都市部のお金持ちに対してビジネスを展開すれば良いのですが、Quipper のカンパニーミッションが「世界の果てまで、最高の学びを届ける」であるので、たた単純に売上を追求していくと、都市部と農村部の教育格差を広げてしまうだけでした。そこで、3 年目は、営業の対象を私立の高校ではなく、国や市が管轄の地方の公立の学校を対象にしました。農村部の学校を対象にすることにより、より多くの子どもたちにリーチができると考えました。子どもたちにリーチする方法で考えられたのが、学校に対しての、いわゆる toB だったり、CM などを通して個人への、toC でした。ですが、やはりそれだとリーチできる人数には限りがあり、そこで思いついたのが国や市に対する、toG のビジネスです。圧倒的に公立の学校に通っている層が多いので、そこに切り込まないといけないんですね。ただ、日本でもそうですが、国や市と何かをやるというのは、非常に大変です。

最初に契約が取れたのは、田舎の小さい学校だったのですが、その後もう少し大規模に行う必要があると思い、日本が ODA で支援をしているインドネシアのボホール州と契約を結びました。日本の ODA 事業では、空港やトンネルの建築などのハード面の支援が多く、ソフト面の支援はあまり行われていません。ただ、これから空港ができて、雇用が創出されて、さらに観光業が伸びていく中で、その人たちの人材育成のことまでは考えれていないんですね。そこで、大事なのは教育という話をして、契約まで漕ぎ着けることができました。それを今は段々国レベルでも検討してもらえるようになりました。

教育の世界でビジネスをするのは難しくて、多くのユーザーに使ってもらい、パイを取れるようになるまで非常に長い時間がかかります。途上国でビジネスをする時に、都市部の富裕層をターゲットにすることで、短期で利益を出すことできます。しかし、それでは少人数にしか利用してもらえず、中長期的な社会へのインパクトは与えられず、会社も成長しません。だからこそ、単価は安くても、パイを取れる層を狙う必要があります。しかし、それができている企業というのは非常に少なく、皆目先の利益を追求しがちです。ただ、本当にやらなければいけないのは、パイを取り、中長期的な社会へのインパクトを与えるということです。

Q.現在の仕事上で成功したいこと、失敗したこと

成功したことは複数あるのですが、一番の成功は、やはり国や市との連携ができるようになったことです。他には、インドネシアでCMを流すプロジェクトも成功と言えると思います。東進ハイスクールのCMをモデルにしたCMを作成し、YouTube上で流したのですが、数百万ビューあり、そこから多くのユーザーを獲得することができました。いわゆる日本で成功したモデルを応用できたことで、成功に繋がったと思います。

失敗とは言えないもしれないですが、教育ビジネスの難しさを感じることはありました。Quipperはオンライン教育サービスなので、ネット回線がないと利用できないのですが、本当に届けたいと思っている地方の農村部にはネットが繋がっていません。なので、最初の方は、インターネットプロバイダーと組んで、回線を含むパッケージとして、サービスを提供していました。しかし、地方に行けば行くほど、単価が下がるので、採算性が取れず、現時点ではできていません。

Q.現在の仕事を通じて学んだこと

やはりパイを取るのが、一番大事だということです。ビジネスを行うと、何かしらの形で人の人生に影響を与えています。それを途上国で行う場合は、人々への影響はより大きく、教育という場で行う場合には、ユーザーの人生を左右するくらい影響は大きくなります。今やっていることを、事業としてやる最大の理由は、継続的に行うことができ、インパクトを与えることができるからです。私たちがやっている教育のビジネスでは、ユーザーを増やすことが最も重要で、僻地と呼ばれているような島などでも、良い教育を提供したいと思っています。そのために何をする必要があるかというと、パイを取るしかないと思います。

● PART2: 現在までの経験

Q.今までの経験について

生まれは、日本です。小学校は学習院に通い、中学校は杉並区立和田中学校に入学しました。和田中は、民間企業で働いていた人が初めて公立の校長先生（藤原先生）になった学校でした。藤原先生は今では私の恩師です。一時メディアなどでも話題になった、「よのなか科」や色々と面白い取り組みをしていたので、私立の小学校に通っていましたが、中学校は公立の学校に進みました。その後、13 歳(中 2)からイギリスに単身留学しました。最初の 4 ヶ月は語学学校に通い、9 月からボーディングスクールに通いました。高校卒業後は、ブリストル大学に進学することが決まっていたのですが、進学する前の 1 年間 Gap Year を取り、アフリカ・ルワンダに行きました。

	滞在国 (留学・転勤等)	学校 (インター/現地校/公立/私立/学科等)、勤務先	旅行(海外)	課外活動 (ボランティア、インターンシップ等)	主な使用言語	取得資格
0～1才	日本				日本語	
2～3才	中国・武漢	現地の幼稚園			中国語	
4～8才	日本				日本語	
9～10才	アメリカ・ボストン	現地の小学校			英語	
11～17才	日本				日本語	
大学	中国・北京	北京大学			中国語	HSK8級(入学時)、HSK6級(卒業時)
社会人	日本	リクルートホールディングス、リクルートキャリア			日本語	
社会人	日本	Selan			日本語、英語	

その当時は、Quipper の原型のような、日本の NPO 法人のルワンダの立ち上げをやっていました。、ルワンダの優秀な先生の動画を取り、DVD に焼いて、その DVD を農村に持っていき、発電機と DVD プレーヤーを貸し出し、学生たちを体育館のようなところに集め、放映していました。化学の実験の動画などを放映したのですが、現地の学校では教科書は白黒で、実験の薬剤はないので、学生にとっては非常に感動的だったようです。大学に入学するまでの 1 年はずっと農村の学校をまわり、そのような活動をしていたのですが、その時に、農作物が大量に余っている事実を知りました。農村から市場までの輸送手段がないから余ってい

ると知り、国連の人たちと協力して市場価格で買い上げ、難民キャンプに届けていました。次に行うビジネスは、この時の経験からインスピレーションを得て、行おうと思いました。

アフリカで一年過ごした後は、イギリスに戻り大学に通いました。ただ、アフリカで継続して活動も行っていたので、2年生の初めの頃に中退することを決めました。その後は、アフリカには戻らず、今度はタイに行きました。アフリカは、今後5年の間には、そこまで成長すると思えなかったので、熱いと言われていた東南アジアを見ようと思い、タイでビジネスをしていました。タイでは様々なビジネスを行っていたのですが、途中でリクルートからQuipperで働く話をもらい、拠点をシンガポールに移して活動をすることにしました。

私には、好きな言葉があり、それは「Life is a tragedy when seen in close-up, but a comedy in long-shot」という言葉です。今までの人生の中で、もちろん辛いこともなかったわけではありませんが、長い目で見てみたら、それはどうってことなくて、むしろ自分の糧になっています。

Q.日本人であることのメリット・デメリット

メリットは、先人の方々が築き上げてくれた成功事例があるので、途上国に行くと慕われることです。日本人というだけで、信頼されるので、それは素晴らしいことだと思います。なので、その信頼があるうちに、私たちの世代は日本を復活させる必要があります。

● PART3:将来国際的に働くことを目指している若者へ

Q.国際的に働くために必要な能力について

英語は絶対に必要です。最近では、翻訳の機械などもありますが、頼らない方が良いと思います。なぜなら、現地の人のコミュニケーションでは、自分の言葉で話して笑って、初めてお互いを理解でき、信頼関係を構築できるからです。現段階では、ビジネスの場において最終的な判断は、言葉を通じて行われていて、口がなくならない限りは、翻訳の機械は代替にはならないので、英語をしっかり勉強する必要があります。

英語に加えて、対応力も必要だと思います。対応力というのは、例えば、何があっても動揺しないとか、笑って楽観的に考えることができることです。こればかりは、毎日毎秒自分に言い聞かせていないとできな

いことなので、そういう経験を重ねていくうちに、当たり前のようにできるようになるのではないでしょうか。

Q.学生時代にやっておいた方が良いことはについて

英語力と対応力を鍛えることです。あとは、学生の間は時間があると思うので、できれば海外に行った方が良いですね。フットワークを軽くして、あまり構えずふらっと行ってみてもください。他には、コミュニティを絞らないというのも大事だと思います。自分のカンファタブルゾーンを出て、とにかく色々な人と会うと、自分と意見が違う人とも出会ったりするので、それが対応力などを鍛えることにも繋がってくると思います。

4. 国際的なフィールドにおいて働くために必要な能力や経験

本章では、国際的に働くために必要な経験や能力に関してのインタビュー調査結果を掲載する。第 3 章で記載した通り、キャリアパスに関しては十人十色だったが、国際的に働くために必要な経験や能力に関しては、3 点の共通点を見いだせた。その共通点とは、①語学力、②コミュニケーション能力、③柔軟性・多様性を受け入れられる力である。

① 語学力

英語がビジネスレベルであるのはもちろんのこと、今後は第 3 外国語まで必要であるという回答が多くあった。調査対象 10 人全員が日本語はネイティブレベル、英語はビジネスレベル(あるいはそれ以上)である。一方で、第 3 外国語は、人によって言語が異なる。一番多かったのがフランス語で、調査対象 10 人中 4 名がビジネスレベルで話すことができる。多くの国際機関では、英語の他にフランス語が公用語であることや、国際機関の活動が多く行われているアフリカ諸国では、英語よりもフランス語を公用語とする国が多いことから、フランス語が堪能な人が多いのではないかと推測する。フランス語の他には、ドイツ語、スペイン語、中国語などの言語に精通している人がおり、留学中や海外勤務中に現地で身につけたとの回答だった。

② コミュニケーション能力

コミュニケーション能力に関しては、調査対象により様々な定義があった。具体的には、「価値観やバックグラウンドが違う人たちとアグリーとディスアグリーできるマインド」、「自信を持って伝えるものを持つこと」、「萎縮せず、ニュートラルに話すことができる力」、「相手を理解しようとする力」、「世の中に関する知識」、「価値観の異なる他人の考え方に敬意を払うことができること」、「前提が異なる、想像できない人たちに対して、想像できるように噛み砕いて説明できること」などが挙げられた。

上記のような能力は、一朝一夕に努力して身につけることはできず、今までの人生における経験を通じて身につけられるとの回答が多かった。そのために必要な決まった経験というものは存在しない。経験を例として挙げるのならば、海外旅行や留学、ホームステイ、日本にいる外国人との交流と通じて、自分自身がマイノリティになる経験や学生時代にやりたいことを、とことん突き詰め、自分自身が自信を持って伝えられるものを持つことで、萎縮せずに話せるようになる等である。様々ことにチャレンジし、それらの経験を通じて、ようやくコミュニケーション能力は身につけられる。

③　柔軟性・多様性を受け入れられる力

自分の軸を持ちつつも、相手の多様性を受け入れることができる、柔軟性が必要であるとの回答が多かった。これは、日本社会も含め国際的に働くには、考え方や文化、宗教やバックグラウンドが異なる人々と協力して、働く必要があるためである。

単一民族で構成されている日本で生まれ育つと、どうしても周りの人と、考え方や価値観が似ていることが多い。しかし、国際社会では、皆育ってきたバックグラウンドが違うため、自分の想定外の考え方をする人もいる。このような社会で働いていくには、その違いを認め、受け入れていく必要がある。そのためには、例えば、海外旅行や留学、ホームステイ、日本にいる外国人との交流と通じて、異なる文化に触れてみたりすると良い。また、日本にいながらも、そういう違いに至った経緯や歴史を勉強したり、自分以外の人がどのような理由でそういった考えを持っているのか、関心を持つことではできる。そういった経験等を通じて、徐々に多様性を受け入れられる、柔軟性を身につけられるのではないか。

今後、国際的なフィールドにおいて働くには、①語学力、②コミュニケーション能力、③柔軟性・多様性を受け入れられる力の 3 つの能力が求められる。そのためには、語学力の向上とともに、学生時代に様々なことにチャレンジし、経験を積み重ねていく必要がある。

5. 国際的貢献の一歩をインターンシップから始める

5-1. J-BINGO プロジェクトの仕組み

【J-BINGO プロジェクトとは何か】

第１章で説明した通り、昨今では、北東アジア情勢の緊張の高まりや、難民、移民問題などによる地域情勢の不安定化、マルチ外交と米中、日米などバイ外交の複雑化、環境問題など地球的規模の課題解決の遅れなど国際的課題が山積みである。このような国際的課題を一国政府や民間だけで解決するのは大変困難であり、国際機関が非常に重要な役割を果たしている。国連をはじめとする国際機関は各国の分担金により成り立っている。外務省発表のデータによると、日本の国連への分担率はアメリカに次ぐ 2 位の 9.68%であり、2017 年は 244.2 百万ドル分担している。しかしながら、国際連合が 2014 年に発行した文書によると、日本からの国連本部と各機関への人的拠出は 約 790 名で全体の 2.5%にとどまっており、国際社会において日本の発言力が非常に低いという問題の原因の一つとも考えられる。日本が国際社会において大きな存在力（プレゼンス）を維持し続けるためには、資金面での貢献だけではなく、さらなる人的貢献も今後必要なってくるだろう。

青山学院大学社会情報学部では、2015 年度に J-BINGO プロジェクトが発足した。J-BINGO プロジェクトとは、Japan Bridge for InterNational Governmental Organization の略であり、日本語に訳すと、「日本と国際機関の架け橋」という意味である。このプロジェクトの最終目的は、国際機関職員候補を始めとした、国際的なフィールドで活躍できる人材の育成であり、在学中には、国際的なフィールドで働く日本人職員との接触や、国際機関などでのインターンシップ等などを行う。

【J-BINGO プロジェクトの仕組み】

1 年生は、English Communication Ⅰ・Ⅱの授業の一環として、国際機関で働く日本人による講演会が年に複数回開催されている。2 年生は、プロジェクト演習入門Ⅰ・Ⅱにおいて、3 年生で国際機関でのインターンシップに挑戦する前段階として、国際機関についてヒアリング調査を行い、インターンシップに参加する条件等を研究する。3 年生は、プロジェクト演習入門Ⅰ・Ⅱにおいて、学生自身の今後進みたいキャリアを踏まえて、国際機関でのインターンシップを通じた人的国際貢献を行う。4 年生は、特定課題研究/演習にて、自身の興味のある分野において、さらなる研究を進める。2018 年度は、これらの各科目での活動に加え、月 2 回程度、J-BINGO プロジェクトに関係する 2～4 年生の学生が集まるゼミが開催されている。ゼミでは、お互いの調査等の進捗状況を共有すると共に、先輩から後輩に対し、

ヒアリング調査やインターンに必要なノウハウの伝達などを行う。

表 6　J-BINGO プロジェクトにおける各学年の活動内容

学年	科目名	活動内容
1 年生	English Communication Ⅰ・Ⅱ	国際機関で働く日本人による講演会
2 年生	プロジェクト演習入門Ⅰ・Ⅱ	国際機関についてヒアリング調査を行い、インターンシップに参加する条件等を研究
3 年生	プロジェクト演習入門Ⅰ・Ⅱ	国際機関でのインターンシップを通じた人的国際貢献
4 年生	特定課題研究/演習	自身の興味のある分野において、さらなる研究

【English Communication Ⅰ／Ⅱでの活動】

社会情報学部 1 年生の前期必修科目「English Communication I」及び、後期必修科目「English Communication II」の授業内で、英語にて講演会が年に複数回開催されている。講演会は、国連機関のみならず、NGO や省庁からゲスト講師が来校し(表 7～10 参照)、現在までのキャリアや、現在の仕事内容などがテーマである。

表 7　2015 年度の講演会実施状況

回数	講師（当時の所属） タイトル
第 1 回	菊川人吾（NPO 法人国際環境経済研究所 主席研究員）
	国際機関への架け橋（J-BINGO プロジェクト） ～国際機関での日本のプレゼンス： 多様なキャリアパスでアプローチしよう～
	佐竹博厚（外務省国連企画調整課国際機関人事センター 課長補佐）
	国際機関で働くには
第 2 回	菊川穣(一般社団法人エル・システマジャパン 代表理事)
	途上国現場における国際機関の仕事。 オーナーシップとパートナーシップの狭間で
	菊川人吾（NPO 法人国際環境経済研究所 主席研究員）
	日本政府代表部／交渉官から見た国際機関における事務局の機能 ～WTO/ITA（情報技術協定）拡大交渉や TBT 議長の経験からの一考察～
第 3 回	小野智子（国際協力機構 人間開発部保健第二グループ 保健第四チーム 調査役）
	キャリア構築へのアプローチ：国際機関での経験から
	菊川人吾（NPO 法人国際環境経済研究所 主席研究員）
	APEC 会合での一コマから（Mitigating the impact of financial crisis）：国際会議でのふるまい方
第 4 回	清谷典子（国際移住機関駐日事務所 Programme Manager） 村上秀樹（国連工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所 次長） 菊川人吾（NPO 法人国際環境経済研究所 主席研究員）
	講師 3 名によるシンポジウムを実施

※　敬称略

表 8　2016 年度の講演会実施状況

回数	講師（当時の所属） タイトル
第 1 回	萩野敦年（外務省国際機関人事センター 課長補佐） 菊川人吾(内閣府石原国務大臣室 秘書官、 NPO 法人国際環境経済研究所 主席研究員）
	国際機関をキャリアターゲットとして狙え！国際的に活躍しよう！
第 2 回	田中伸男(笹川平和財団 理事長、国際エネルギー機関 前事務局長)
	国際機関で働くこと
第 3 回	大須賀智子（UNICEF 東京事務所 パートナーシップ調整官）
	世界の舞台で活躍する―始まりは小さな一歩 (Working globally – it started with small steps)
第 4 回	中井恒二郎（WFP 国連世界食糧計画日本事務所 政府連携担当官） 村上秀樹（国連工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所 次長）
	講師 2 名及び米山准教授によるシンポジウムを実施

※　敬称略

表 9　2017 年度の講演会実施状況

回数	講師（当時の所属） タイトル
第 1 回	村上由美子(OECD 東京センター所長) 菊川人吾(青山学院大学客員教授) グローバルキャリア形成に向けてのエール ～多国籍企業や国際機関の経験から～
第 2 回	田中真奈(教育コンサルタント) 鷹野真利(元外務省国連担当官) 井筒節(東京大学特任准教授) 菊川人吾(青山学院大学客員教授) グローバル人材に向けての戦略 ～国際機関から NGO まで、今までとこれから～
第 3 回	村上秀樹(国連工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所　次長) 菊川人吾(青山学院大学客員教授) 岡田祐奈(青山学院大学社会情報学部、UNIDO 東京事務所インターン) 国際社会への貢献(SDGs 達成に向けて) ～企業からの転身など複数キャリアパスの構築～ UNIDO での青学学生インターン受け入れの所感も語りながら
第 4 回	大須賀智子(UNICEF 東京事務所パートナーシップ調整官) 世界の子どもたちにふさわしい世界の実現を目指して -UNICEF で働く(Working with UNICEF for a world fit for children)

※　敬称略

表 10　2018 年度の講演会実施状況

回数	講師（当時の所属） タイトル
第 1 回	石川雅恵(UN Women 日本事務所長) 一(イチ)国連職員のキャリア選択と結果
第 2 回	村上秀樹(国連工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所　次長) 橋本光弘、坂倉啓太 (青山学院大学社会情報学部、UNIDO 東京事務所インターン) UNIDO でのインターンシップを終えて

※　敬称略

【プロジェクト演習入門Ⅰ／Ⅱでの活動状況】

前期科目「プロジェクト演習入門Ⅰ」及び、後期科目「プロジェクト演習入門Ⅱ」において、J-BINGO プロジェクトを選択することができる。ここでは、国際機関等でのインターンの実現に向けて、国際的に働くことを理解するための調査活動を行う。具体的な活動内容としては、自ら在京国際機関などへアプローチし、様々なヒアリング調査のである。その後、それらの成果を活かし、インターンや共同作業などを実践するためのプロジェクト素案を作成することが最終目標である。プロジェクト素案作成にあたって、J-BINGO プロジェクトに関係する学生が集まるゼミにおいて、調査等の進捗状況を報告することで、随時、3～4 年生のメンバー、教員からのフィードバックを受けながら活動を進める。

【プロジェクト演習Ⅰ／Ⅱでの活動状況】

前期科目「プロジェクト演習Ⅰ」及び、後期科目「プロジェクト演習Ⅱ」において、J-BINGO プロジェクトを選択することができる。在京国際機関や関連機関におけるインターンや共同作業などを通じた、人的国際貢献を行うことが、プロジェクト演習Ⅰ／Ⅱの目標である。具体的活動としては、自ら在京国際機関などへアプローチし、インターンや共同作業を実践するのに合わせ、文献調査などを通じて、国際的課題の把握や解決策の提示等の研究を行う。更に、国際機関等でのインターン実現に必要な英語力（英語履歴書の作成など）の習得も目指し、活動をする。J-BINGO プロジェクトに関係する学生が集まるゼミでは、他学年のメンバーに活動報告等も行う。

過去 2 年では、合計 3 名の学生が、UNIDO 東京事務所でのインターンに参加した。この際の主な仕事内容は、「グローバルフェスタ JAPAN」における、UNIDO ブースの展示企画及び当日までの準備、当日の来場者対応である。なお、これらの活動の結果が評価され、インターン後には UNIDO 東京事務所の所長から、インターン修了の Certificate を頂くことができた。来年度以降は、UNIDO 東京事務所のみならず、さらに範囲を広げて活動してほしい。

【特定課題演習Ⅰ／Ⅱでの活動状況】

J-BINGO プロジェクトとしての、ゼミナールは現時点では存在しない。そのため、4 年生で引き続き J-BINGO プロジェクトに参加するには、「特定課題演習Ⅰ／Ⅱ」を通じての活動となる。特定課題演習Ⅰ／Ⅱでは、学部 4 年間の集大成として、自らテーマを設定し、自由な発想により取り組み，その成果をまとめることが求められている。2018 年度 4 年生は、これまでの集大成となる研究成果とな

る、J-BINGO プロジェクトに関する、副教材テキスト(本書)の作成を行った。国際的なフィールドにおいて活躍する日本人のキャリアパス、国際的なフィールドで働くために必要とされる能力、経験等理解できる教材とすることで、大学在学中より、将来、国際的に働くための具体的な活動に取り組むことを手助けできる教材を目指す。副教材作成においては、現在、実際に国際的なフィールドで働いている人々の話を聞くことで、国際的なフィールドで活躍する日本人たちのキャリアパスの整理をした。

また、副教材テキストの作成と合わせて、2～3 年生の J-BINGO プロジェクトメンバーの活動に対する、チューター的な役割も担う。2 年生メンバーに対しては、調査活動に関するアドバイス、英語でのプレゼンテーションに関する指導等を実施する。インターンにチャレンジする 3 年生メンバーに対しては、昨年度のインターンの経験を活かした、助言指導等なども行う。

5-2. 国際機関でのインターンシップ参加に求められること

インターンシップとは、学生の就業体験であり日本・海外、企業の規模・業種を問わず広く行われている。日本企業の場合、大学 3 年次の夏休み頃から、一斉に公募が行われるが、その実施は、企業を理解するためのイベントであることも多い。国際機関でのインターンシップは、機関にもよるが、随時募集が行われ、実務を行うのが一般的である。このように、国際機関でのインターンシップは、日本の一般企業のインターンシップとは一線を画す形式である。本項では、国際機関でインターンシップに参加する難しさについて触れていく。

第一に応募する上で求められている条件が難しい点である。一般企業におけるインターンシップでは、特別、難しい条件が設けられるケースは珍しい。しかし、国際機関というステージでインターンシップを行うには、ビジネスレベルで英語が使えることはもちろん、高い倍率の中から選抜されるため、即戦力であることも問われる。以下では、多くの機関で提示されている条件を挙げる。

表 11 国際機関におけるインターンシップ参加に求められる条件

・ 英語がビジネスレベルで使いこなせること
・ 院生以上または社会人経験があること
・ 長期の勤務（3～6 ヶ月）が可能であること
・ 応募機関の扱っている分野に精通していること

インターンシップ参加に求められる条件のうち、言語については、英語に加えて第 2 外国語が話せると優遇されるパターンが多い印象を受けた。国連の公用語は、英語・フランス語・ロシア語・中国語・スペイン語・アラビア語の 6 言語であるが、その中でもフランス語は、特に重宝されることが多いようである。この背景には、活動拠点がフランス語圏であることが多いためである。

また、多くの機関が、応募者に修士課程に在籍していること、または、社会人経験があることも、条件の一つとして挙げられている。このような条件が設定されている理由として考えられるのは、多くの国際機関は専門知識を必要とする社会的課題を扱っており、学部生では業務を遂行するにあたり、その知識が不十分なためと考えらえる。だが、一部の機関では、学部生でも応募が可能であり、アルバイトや部活動等によって、インターンシップ中の業務内容に近い内容を経験していれば、採用される可能性は高くなると推測する。

さらに、インターンシップ参加のハードルを高めているのが、インターンシップの期間である。多くの国際機関が、インターンシップの期間を 3 ヶ月以上としており、最も長い機関だと 6 ヶ月と設定している。さらに、インターンシップ期間中は、週 5 日フルタイムで出勤を求めている機関も多い。

このような状況を踏まえて、機関に掲載されている連絡先へ直接、夏季休暇中などの短い期間でも可能なインターンシップを探していると説明をし、自分のできることを伝える等、積極的にアプローチをすることも必要である。

5-3. 岡田(J-BINGO プロジェクト 2017～2018 年度在籍生)のインターン体験談

【インターンの概要】

期間：9/5～9/30　週 2 回程度　計 10 日間

形態：無給インターン(交通費のみ支給)

勤務場所：UNIDO 東京事務所内(国連大学 8F)

仕事内容：グローバルフェスタの UNIDO ブースの企画及び当日までの準備

【アプローチの方法】

・　応募機関の選定

インターンシップを応募するにあたって、応募機関を選定する必要がある。選定の基準は、①学部生でも参加可能であること、②夏季休暇中の 1 ヶ月という期間でも受け入れてもらえること、の二つである。また、自身の将来のキャリアと整合性を高めるため、広報部門に職種を絞る選択も考

えられたが、学部生の国際機関におけるインターンシップ参加へのハードルは高いため、今回は必須条件にはしなかった。インターンシップ候補機関へは、公募のインターンシップに応募する方法と、菊川先生を通じて各機関の担当者と面談をセッティングしてもらう方法の 2 種類でアプローチを行った。公募のインターンシップには、学部生でも参加可能であることから、UNICEF(United Nations Children's Fund,国際連合児童基金)東京事務所の資金調達部門のインターンシップに応募した。また、菊川先生を通じて UNIDO 東京事務所の村上次長と面談を行った。

・ 事前準備

アプローチを行う際に事前準備として、どの方法でアプローチするにせよ、英文履歴書は必須である。そこで、まず英文履歴書を作成した (図 4、5)。和文の履歴書と異なりフォーマットは自由であるため、和文の履歴書を英語に翻訳するだけでは不十分であった。英文履歴書には、時系列で経歴をすべて記載するタイプや、経験や能力を中心に記載するタイプなど様々なタイプがあるが、今回は、私がアピールしたい経験、能力を中心に記載するタイプを選択した。

・ アプローチ結果

UNICEF の公募インターンシップの応募手続きとしては、ウェブサイト上で学歴や職歴などを入力し、英文履歴書と Cover Letter(図 6)をアップロードし、応募した。書類選考通過者にのみ、1 ヶ月以内に連絡が来るとのことだったが、残念ながら不合格だった。書類提出後に、同時並行で UNICEF 東京事務所パートナーシップ調査官の大須賀智子氏にインタビューを行った。インタビューでは、J-BINGO プロジェクトの趣旨を伝え、その後、現在公募インターンシップに応募していることを伝えた。大須賀氏の話によると、UNICEF のインターンシップは日本人に限らず、世界中から応募があり、応募者の多くが大学院生や民間企業での勤務を経験したのちに、国際機関に入りたい社会人など、非常に競争的な世界であるため、学部生で、かつ時間に融通がきかないと通過は極めて難しいとのことだった。しかし、国際機関でのキャリアを目指す上では、様々なチャンスを掴みながらキャリアを築き上げていくことが重要であり、他の機関のインターンシップにも応募してみることが重要であると心強いメッセージを頂戴した。

UNIDO 東京事務所では、次長の村上秀樹氏と面談を行った。村上次長との面談では、自己紹介及び自己 PR、プロジェクトの趣旨の説明を行った。その後は、村上次長より国際機関のインターンシップ募集の傾向、UNIDO 東京事務所でのインターンシップ募集状況について説明を受けた。

今回は運よく、9 月 31 日(土)、10 月 1 日(日)に開催された国内最大級の国際協力イベントである「、グローバルフェスタ JAPAN」の UNIDO ブースの企画及び運営アシスタントとして、夏季休暇中のインターンシップを募集していた。これは、①学部生の参加が可能、②夏季休暇中にインターンシップを行うことができる、という二つの条件を満たしており、かつ、将来仕事にしたい内容に近いインターンシップ内容だったので、参加したい旨を伝えた。UNIDO 東京事務所が募集している、その他のインターンシップとしては、本部（オーストリア・ウィーン）のウェブサイト（英語）の記事を翻訳し、東京事務所のサイトに投稿すること、デレゲート・プログラム(招聘プログラム)等で来日した発展途上国の招聘者の活動支援、イベント、セミナー等の企画・準備・運営（受付業務含む）などを行うものがあった。しかし、対象が長期かつ、フルタイムで活動できる人だったため、今回は「グローバルフェスタ JAPAN」の UNIDO ブースの企画及び運営アシスタントとしての、インターンシップに参加することにした。

RESUME

Name Yuna Okada

[redacted]

[redacted]

Education

SHANGHAI UNITED INTERNATIONAL SCHOOL

(CHINA,2011-2013)

Cambridge IGCSE(International General Certificate of Secondary Education)

Attended 2 years of English language secondary education curriculum
IGCSE is equivalent to general secondary educational program in England and Whales
It is a qualification based on individual subjects of study, passed 9 exams
(Achieved A* in Music, English as a second language (with Grade 1 in oral/aural), Foreign Language Mandarin Chinese, Mathematics, Co-ordinated Science(Double award)
Achieved A in Business studies, Additional Mathematics)

CHIGUSA HIGH SCHOOL

(JAPAN,2013-2015)

AOYAMA GAKUIN UNITEVERSITY

(JAPAN,2015-TO PRESENT)

Related skills: Media communication, Public relation, Production of media contents, Programming using Visual Basic/Java, Data Analysis, Statistics, Cognitive psychology, Project management

図４　岡田の英文履歴書（ページ１）

Yuna Okada/ Resume

Experience

ADMINSTRATIVE ASSISTANT

Japan professional football league 2015 - 2016

- Supported the preparation and organization of FUJI XEROX SUPER CUP 2016
- Supported the preparation and organization of seminar for club tem doctors, referees, match commissioner
- Produced weekly the official reports regarding football matches distributed to the executives of the Japan Football Association
- Analyzed data on medical accidents of the player,
- Ensuring the smooth distribution of mail internally and externally

PUBLIC RELATION STAFF

Japan University Football Association, 2015 to present

- Planned publicity strategies and campaigns for the league and tournament
- Organized promotional events such as press conferences of the league
- Produced press releases
- Coordinated contents and schedule of making poster with advertising agency
- Oversaw layout (design, photography) and checked content for accuracy and errors of the official program
- Updated and managed contents on the official website

Skills

COMPUTER SKILLS

Microsoft Office Word, Excel, PowerPoint, Access
Adobe Photoshop, Illustrator

LANGUAGE

Fluent in Japanese, English, Chinese

図５　岡田の英文履歴書（ページ２）

United Nations Children's Fund
UNICEF House
4-6-12, Takanawa
Minato-ku, Tokyo
108-8607 Japan

To whom it may concern,
I am writing to apply for an internship position with the Division of Public Partnerships at United Nations Children's Fund, which was advertised online at official website of your organization.

I am a junior student, majoring in Social Informatics at AoyamaGakuin University. I am currently working on a project, which is one of the courses of the School of Social Informatics, to increase a number of Japanese working for international organization. During the investigation, I have found that not many Japanese know much about international organization. Therefore I thought through this internship I could learn how it is like to work in international organization. I hope to with your organization's help.

I previously held an internship at Japan Professional Soccer League. While there, I supported the administrative work such as analyzing the injuries occurred during the match and writing reports, preparation for the meetings.
I am also taking part in Public Relation Unit of Japan University Football League, and planed and implemented several promotional events. Therefore when holding advocacy events and meetings, I could provide efficient administrative support.

I would enjoy having the opportunity to talk with you more about this position, and how I could use my skills to benefit your organization. Please let me know if you have any question. You can reach me by phone at [redacted] or by email at [redacted]

Thank you for your consideration. I look forward to hearing from you.
Sincerely,
Yuna Okada

図6　岡田のCover letter

【業務の内容】

・　業務概要

私がインターン生として採用された背景には、UNIDO 東京事務所は前述の通り、普段は BtoB の企業向けにフォーラムやセミナーなどを開催しており、一般向けのイベントは滅多に開催しておらず、UNIDO 東京事務所について、詳しく知らない視点からのアイデアが必要だったことがある。UNIDO 東京事務所のグローバルフェスタへの参加目的は、機関の認知度を高めるためであり、老弱男女が集まるグローバルフェスタでは、UNIDO について知識が少ない学生に、一般の人にも分かりやすくブースの企画をすることを、毎年お願いしているようである。インターンシップではまず、村上次長ら、一昨年グローバルフェスタを担当していた職員の人へのヒアリングを行い、また、過去の企画書などを見て、現状の把握を行った。その中で、ブース企画のテーマとして考えられたのが、例年と比較して、どのような点を変えることができるのか、本年度のグローバルフェスタのテーマである、SDGs との関わりをどのようにアピールするのか、の 2 点であった。

・　提案内容

ヒアリングの結果、村上次長らは、ノベルティに関して課題を感じていることが分かった。例年は、UNIDO のロゴ付きクリアファイルや、ボールペンなどを配布していたが、他の機関と重複しているようで、新しいアイデアを求めていた。そこで、私は民間企業などが販売促進グッズを購入する際に利用している「販促花子」というウェブサイトから、ロゴ付きのお菓子を作成するアイデアを思いつき、提案した。「販促花子」は、大学サッカー連盟広報部に所属していた時に、大学サッカーグッズを作成したので、その時の経験を活かすことができた。他の販売促進用のお菓子を作成しているウェブサイトをも調査し、マシュマロ以外にも、キャンディ、クッキーやハイチュウなどの候補を提示し、結果としては UNIDO と SDGS のロゴ付きのマシュマロを作成することになった。大学サッカー連盟での経験を活かし、見積書の依頼から、デザイン、発注まで、全て自分で行った。

その他の提案としては、UNIDO ブースのコンセプトが「インクルーシブな産業開発で、みんなにやさしい未来を」だったため、来場者が考える「やさしい未来」についてメッセージを描くボード、親しみを感じてもらえるようにアフリカのお土産（職員が出張でアフリカ各国に行った際にもらったもの）の展示、UNIDO の活動と SDGs との関わりを示すパネル（以下、SDGs パネル）、若い人に興味を持ってもらえるように写真撮影用の Instagram ボード作成など、多くの提案を行っ

た。その結果、SDGs パネル、Instagram ボード作成の 2 つの案を採用してもらうことができた。

・　業務に関して

ブース企画にあたり、金銭的な制約はあまり受けることはなかった。というのも、パネルの作成などは、過去に企業向けセミナー用に作成したパネルの裏面を再利用したため、実際のコストはマシュマロ代のみだったからである。マシュマロの発注個数は、例年の来場者が 300 人程度のため、300 個発注した、1 個あたりの単価は約 150 円だった。他のお菓子は 150 円を超えるものも多く、予算的な問題と、見た目の 2 点でマシュマロに決定した。このように金銭的な制約はあまりなかったが、インターンシップ期間中は、時間との戦いであった。なぜなら、インターンシップを始めてから、グローバルフェスタまでの 4 週間のうち、最後の週に、他のインターン生が 1 名増えることになっていたが、残る 3 週間は私一人で作業を進めなければいけなかったからだ。特に、SDGs パネルやノベルティは、デザインから作成まで、全て自分で行う必要があったため、なるべく無駄な工程を無くせるよう、頻繁に村上氏の確認をとって進めた。その結果、無事グローバルフェスタに間に合うことができた。

(UNIDO ウェブサイトより引用)

図 7　作成した UNIDO マシュマロ

(UNIDO ウェブサイトより引用)

図 8　作成した SDGs パネル

・　グローバルフェスタ当日に関して

グローバルフェスタ当日は、私は主に来場者を呼び込む役を担当した。ブースの前を通った来場者に UNIDO を知っているか尋ね、クイズに誘導した。そして、クイズを行っている時に、興味を持ってもらえた来場者には、UNIDO 東京事務所の職員により詳しい活動内容などを説明してもらえるよう案内した。また、少しでも興味を持ってくれた人には、ノベルティとして、マシュマロをプレゼントした。1 日目の午前中は、グローバルフェスタそのものの来場者も少なく、あまりブースに人を呼び込むことができなかったが、午後になり、全体の来場者が増えるに連れ、UNIDO ブースに立ち寄る人も増えた。全体の来場者は、グローバルフェスタのウェブサイトで説明されていた通り、老若男女様々だったが、UNIDO のブースに立ち寄る人は、子供連れのファミリーと国際機関で働くことを目指している学生が多いように感じた。子連れファミリーが多く立ち寄った理由として考えられるのは、ノベルティのマシュマロと、パートナー企業のトーハツが、給水機の形の消しゴムをノベルティとして持ってきていたことが、考えられる。学生は多くのブースを回っているようだったが、特に UNIDO は 2~3 名の職員が常にブース内にいて、職員から声をかけていたので、そのことが理由でないかと考えられる。国際機関エリア全体のブースを見回すと、半数くらいのブースで、学生ボランティアが活躍していて、職員らしき人は多くても 2 名程度のブースが大半だった。また、学生ボランティアがいないブースは、パンフレット等が机の上においてあるのみで、殺風景なブースも多くあった。

グローバルフェスタ当日には、普段あまり話す機会のない UNIDO 東京事務所の職員と話すことができ、学びの多い時間だった。他にも UNIDO 東京事務所のパートナー企業の KOMATSU とトーハツの海外事業部の担当者を呼んでいたため、日系民間企業に所属しながら、国際的に働くキャリアについても聞くことができた。また、UNIDO のウィーン本部で勤務をしている KOMATSU の案件を担当している職員も視察に来ていて、私が作成した SDGs パネルを評価してくれ、2018 年の夏に、本部でのインターンシップに参加しないかと声をかけてもらった。このように、グローバルフェスタ当日は、様々な人とキャリアについて話す機会があり、非常に実りの多い時間を過ごすことができた。

(UNIDO ウェブサイトより引用)

図 9　トーハツのノベルティ

(UNIDO ウェブサイトより引用)
図 10　クイズの様子

(UNIDO ウェブサイトより引用)
図 11　グローバルフェスタの入り口

(UNIDO ウェブサイトより引用)
図 12　UNIDO ブースの様子

【インターンで得たこと】

正直な感想を述べると、自分の意思で J-BINGO プロジェクトに参加したにも関わらず、インターンシップに参加するまでは、就職活動につながらないインターンシップは自分の時間を無駄にしてしまうのではないかと感じていた。しかし、インターンシップを終えて思うのは、この経験は自分の人生の大きな分岐点になったということである。以下の 2 点がインターンシップを通じて学んだことである。

①貢献できることがあるという自信

英文の履歴書を書く際に、自分ができることを記載する欄があったのだが、今まで様々な経験をしてきたにも関わらず、何を書けばいいか分からなかった。自分が今まで行ってきた活動を通じて何を学んだか、次の活動で何ならできると言い切れるのか、ということが、分からなかったのである。インターンシップに応募するまでの過程において、自分がアピールできることは何なのかを整理でき、実際に、UNIDO 東京事務所でのインターンシップで実践できたことで、貢献できること

があるという実感を抱くことができ、自信を持てるようになった。村上次長には、まるで企業で働いたことがあるように、報連相などがしっかりできる点や頭の中のアイデアを形にできる点などを評価していただき、大学に入学してから、ほとんどの時間を費やしてきた、大学サッカー連盟での活動は、間違えではなかったと確信できた。そして、今までの活動をインターンシップにつなげれた。

②自分のバックグラウンドを活かした仕事に就くこと

インターンシップは、「私が今まで築いてきた価値観を大切にして生きるべきだ」ということにも気づかせてくれた。UNIDO 東京事務所の職員の中には、海外の大学を卒業し、海外で就職した人、日本の大学を卒業後、日本で就職したが、その後、海外の大学院に進んだ人など、様々なバックグラウンドを持った人がおり、皆自分のバックグラウンドを生かした仕事をしていた。日本の社会では、個性やそれぞれの考え方は、他の国と比較するとあまり尊重されないのではないかと感じていた中で、このような多様なバックグラウンド、多様な考え方が存在する環境でインターンシップをさせて頂いたことで、「自分の中の思い」を尊重したいと思うようになった。また、UNIDO 東京事務所での働く環境に対して「まるで海外にいるような居心地の良さ」も感じた。このことについて、村上次長らにも話をしてみたのだが、みな同じように感じているようだった。今までは日本で就職することしか考えていなかったが、海外も視野に入れて、自分のバックグラウンドを一番生かすことができる環境で働きたいと思うようになった。

以上がインターンシップを通じた学びであるが、反省点もある。それは、もっと多くの人と関わりを持つべきであったという点である。多くの国際機関の事務所がある国連大学ビルに計 8 日間ほど通ったが、UNIDO 東京事務所の職員以外とは、関わりを持たなかった。同じフロアの国連広報センター東京事務所には、学生ボランティアが多く勤務していたので声をかけてみたり、UNIDO 東京事務所の職員に知人を紹介してもらうなど、もう少し活動範囲を広げて、色々な話を聞いてみても良かったのではないかと反省している。

5-4. 坂倉(J-BINGO プロジェクト 2017～2019 年度在籍生)のインターン体験談

【インターンの概要】

勤務先：UNIDO（国際連合工業開発機関）東京事務所　国連大学ビル内８F

期間：8月27日～9月29日

日程：週2～3日

時間：9時半～17時半

※今回のインターン期間は夏休みにもまたがっていたこともあって、フルタイムでの活動を行うことができた。さらに夏休み後は、授業がない曜日を使って活動を行なった。

業務：グローバルフェスタ2018に向けての出店計画・準備、グローバルフェスタ2018の当日運営・撤去、UNIDO東京事務所主催セミナーの設営・運営補佐、Weekly Meetingの出席、セミナーで利用するデータの収集

【アプローチの方法】

どの国際機関のインターンシップを応募するに当たっても、まず、英語の履歴書が必須であるため、英語の履歴書(図 14、15)とカバーレター(図 16)の作成を行った。英語の履歴書は日本の履歴書とは異なっており、フォーマットが決められておらず、自由に自分をアピールすることができる。よって、日本語で作成した履歴書の英訳では不十分ということになる。私の場合、英語の履歴書では海外経験を中心に作成した。履歴書を見たときに海外経験があるというだけで有利になることがあると考えたからである。さらに自分の持っている能力やできることを述べ、それに対する根拠のような経験や実績も述べた。カバーレターも作成したが、これはアプローチを行う国際機関によって内容を適宜書き換える必要があった。

次に応募する国際機関を選定する必要があった。選定の基準は学部生でもインターン可能であるかということと、東京、関東圏内に事務所がある国際機関であるという点である。大学学部生でも応募可能なインターンシップは世界に多く存在しているが、今回はインターンシップ先が、自宅から通勤可能であるかという基準があるため、国際機関が絞られることになった。さらに、今回は学部生でもできるインターンシップだけではなく、大学院生向けのインターンシップも応募した。それらの国際機関は下記の(図 13)にリストアップした。学部生でもできるインターンシップ、かつ、関東圏内に事務所があるインターンシップを調査したところ、現在空席のインターンシップポストがあるのが、IFAD(国際農業開発機関)と UNICEF(国連児童基金)の二つの国際機関だった。この二つの国際機関に関しては、公式ホームページ上の応募フォームから応募を行った。さらに私は同時に現在インターンシップを募集していない複数の国際機関に直接メールでのアプローチを行った。メールの内容としては、このプロジェクト演習Ⅰ・Ⅱの J-BINGO プロジェクトの概要や目的を説明し、インターンシップをさせてほしいという意思を伝えた。メールには作成した英語の履歴書も

送付した。このメールでは、ストレートにインターンシップをさせてほしい意思を伝えるのではなく、夏季休暇中に、何かそれぞれの国際機関において手伝いできることはないかと、少しアプローチを変えて伝えた。さらに、UNIDO 東京事務所に訪問し、インタビューを行った際に、次長である村上氏に直接、英語の履歴書とカバーレターを渡し、インターンシップをしたい旨を伝えた。公式のホームページを通じて応募した UNIFEC、IFAD は応募してから連絡がなく不合格であった。メールでアプローチを行った、6 つの国際機関からは、残念ながら今回は、インターンシップの機会を与えることはできないという旨の返信を頂いた。しかし、結果的に、直接、英語の履歴書とカバーレターを渡した UNIDO 東京事務所から、通常では実施していない短期での、インターンシップの機会を頂いた。

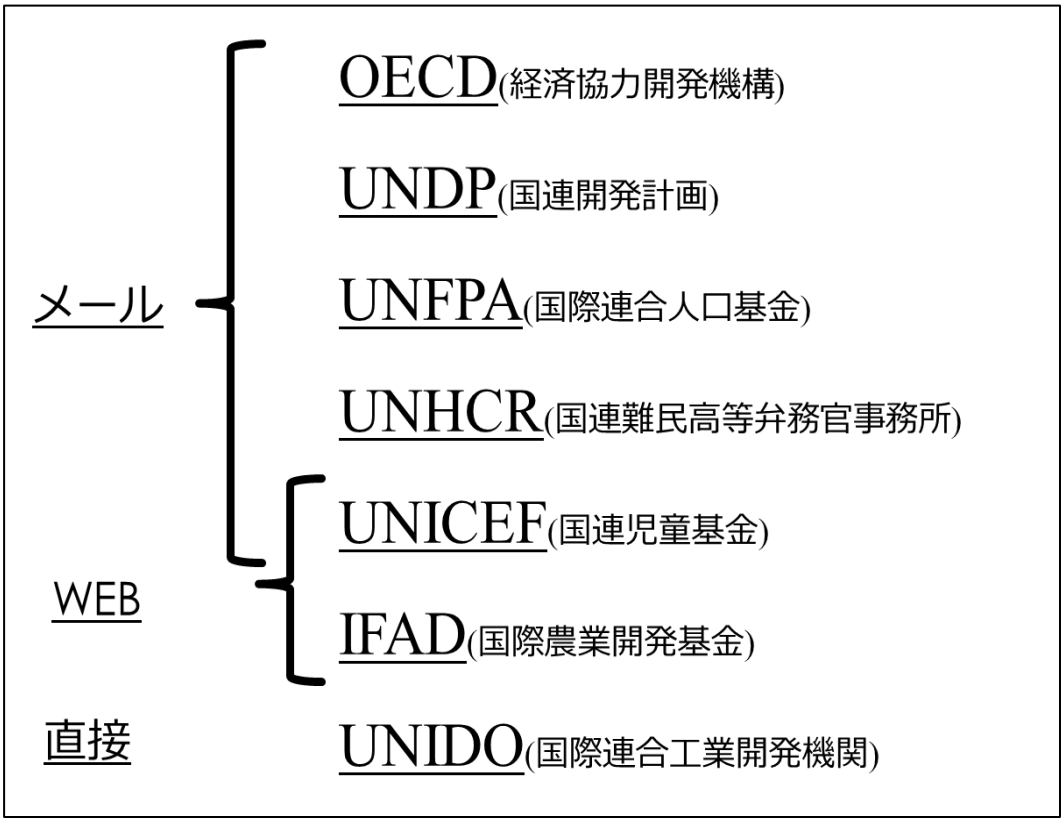


図 13　アプローチを行った国際機関

KEITA SAKAKURA, MR

[redacted] 252-0206
JAPAN
mobile: [redacted]
email: [redacted]

EDUCATION

Candidates for Bachelor of Social informatics - Aoyamagakuin university – Tokyo, Japan
(April. 2016 – received in March. 2020 expected)
Learning: Project management, Leadership theory, Public relations, Programming (Visual Basic, Java), Economics, Statistic, Jurisprudence, Psychology, Workshop design, English presentation

International English major - Meito high school – Aichi, Japan
(April.2013 – March. 2016)
UNESCO SCHOOL, ASP net (Associated School Project Network)
Feature: One-third of the total class hours are English lessons (twice of averaged Japanese normal course)
Participated a language training camp and contributed as a leader to performed English drama, Made the speech about Malala Yousafzai at the annual conference,
Participated to the conference at Korean affiliated school and made English presentation

SHAFSTON International college – Brisbane, Australia
(July. 2013 – August. 2013)

Received the certificate for advanced level English (Fluent speaking and writing skill)

ACADEMIC EXPERIENCE

Gave the presentation in English about ESD (Education for Sustainable development) to Korean students in Korea

- Took a presentation in front of a Korean student as a representative of the school in English
- Distinguished the characteristics of each member and worked efficiently by separating the roles

Made English presentation once in two weeks in high school

- Presentation skills are being enhanced
- Used to making English presentation

図 14　坂倉の英文履歴書（ページ 1）

WORK EXPERIENCE

STAFF in Japanese restaurant
(Foreign customer come to the store once in two days because of US army base nearby)
(April. 2017 – Present)

- A responsible person of foreign corresponding
- Planed and achieved to making English and Chinese menu and English service manual

→Achieved higher level of foreigners satisfaction

Management and operation staff for events
(May.2014 – March. 2015)

- Guided visitors and helping to progress of events
- Guided foreigners by using English

SKILLS

- Language: Japanese/ native
  English/ fluent
- Computer skills/ Microsoft Office: Word, Excel, Power point
- Excellent presentation skills
- Strong Leadership skills

FIELDS OF INTERESTS

- Diplomacy
- Trade
- Politics
- Computer and information

図 15　坂倉の英文履歴書(ページ 2)

Keita Sakakura
[redacted]
mobile: [redacted]
email: [redacted]

UNIDO Investment and Technology Promotion office, Tokyo
UNU HQs Bldg. 8F, 5-53-70, Jingumae, Shibuya-Ku, Tokyo 150-0001

July 25, 2018

I'm writing to apply for the Internship.
Please accept this letter and the attached resume.

I am very interested in economic support to developing countries and I really want to get a job related to the support of developing countries in the future.
I am belonging to the department of social informatics at university so, I have knowledge of information field and I can use Microsoft Office, Word, Excel, Power point. I have foreign experiences such as experience of studying abroad in Australia and making English presentation about ESD (Education for Sustainable Development) in Korea representing school. As a leader of presentation in Korea, I distinguished the characteristics of each member and worked efficiently by separating the roles. I would be able to effectively contribute to the team and organization.

I am available to meet you anytime. I can be reached at 080-1623-2962 or a8116107@aoyama.jp.

Thank you very much for your review and consideration. I look forward to making a valuable contribution to your organization.

Sincerely,

Keita Sakakura

図 16　坂倉の Cover letter

【業務の内容】

・　業務概要

主なインターンシップ業務内容としてはグローバルフェスタ JAPAN2018 での UNIDO ブースの企画、運営である。その他にも UNIDO 東京事務所開催のセミナーやイベントにも参加した。そして、インターン期間中は毎週月曜日の朝に開かれるウィークリーミーティングにも参加した。このミーティングは基本的に全て英語で行われ、資料なども全て英語ベースのものが使われていた。ミーティング内容は、現在 UNIDO 東京事務所が行なっている各種プログラムの進行状況の報告やイベント開催の報告など、主に UNIDO 東京事務所スタッフ全員が、共有しておくべき事柄について扱われていた。このミーティングを通じて、様々な議論が交わされることによって単に報告だけでなく、他のスタッフからの意見などを仰ぐことによって、新たなアプローチなどを発見する狙いもある。

・　業務内容

グローバルフェスタ JAPAN2018 での UNIDO ブースの企画、運営について述べる。今回、インターン生として採用された背景として、学生ならではの意見やアイデアによって、グローバルフェスタへの出展計画を考えてほしいという点がある。グローバルフェスタとは国内最大級の国際協力イベントであり、国際機関はもちろん、国際協力を行なっている政府組織や NGO、企業などが一同に会するイベントである。UNIDO 東京事務所もこのイベントに広報を目的として毎年出展を行なっている。2017 年度は国際機関や国際協力に興味がある若い世代を中心に二日間で 12 万人が訪れた。今回のインターンシップではこのイベントに向けて主に活動を行なった。

・　オリジナルハイチュウ

今回のグローバルフェスタへ出展する上で意識したのは、若い世代にどうやったら UNIDO について知ってもらえるかという点である。まず、過去の出展企画書などを確認し、毎年どのような形で出展しているのかという状況把握から行なった。そこから毎年 UNIDO ブースを訪れてくれた方にノベルティグッズを配布していることが分かった。過去のノベルティグッズとしては、UNIDO のロゴ付きボールペンやクリアファイル、昨年度のロゴ付きのマシュマロなどがあった。今回もノベルティグッズを配布することを決めたが、何を配布するかが一番の課題であった。他のブースでも、クリアファイルやボールペンなどは配布されており、ありきたりなノベルティアイテムでは、

他のブースと差別化ができないと考えた。そこで、昨年のロゴ付きマシュマロのアイディアをベースに、お菓子などの軽い食品の配布という結論に至った。キャンディーやクッキー、マカロンなど様々なアイディアが出たが、結果的にオリジナルデザインハイチュウを作成することになった。この結論に至った理由として、若い世代に馴染みのあるお菓子であることから、それを目当てでブースに訪れる人が増えるのではという予測に加え、他のノベルティ食品に比べて、ラベルデザインの自由度が高いということがあった。オリジナルデザインハイチュウの中身はグレープ味の市販されているハイチュウだが、外側のラベルを全て自由にデザインできることから、より、UNIDO について印象できるデザインをしやすいと考えた。

全面に大きく UNIDO のロゴだけを配置するというシンプルな案もあったが、うに丼という UNIDO を捩ったものを全面に大きく配置することによって、手に取った人の注意を引き、結果として UNIDO の名前を覚えてもらうという狙いがある。さらに限定という文字を配置することによって、より集客率を上げる狙いもある。今回のグローバルフェスタでは SDGs についての関わりをどのようにアピールするかということも、大きな課題となっていたこともあり、SDGs のロゴに加え、UNIDO が一番貢献している項目 SDGs 9 番のロゴも配置した。このオリジナルデザインハイチュウを 300 個発注したが、作成に当たって、見積書の依頼から、デザイン、発注まで全て自分達で行なった。

図 17 オリジナルデザインハイチュウ　完成品

・　オリジナルタオル

毎年のイベント当日の写真などを見ているとスタッフの統一感がなく、来場してくれた方との区別がつきにくかった。スタッフの人に話を聞きたいけど、誰がスタッフなのか分からない状況や、呼び込みをしていても、そこの機関のスタッフなのか分からない状況が生まれてしまう可能性があった。それらの問題を解決するために、スタッフの統一感を高めるものが必要であると考えた。全員同じ T シャツを作って、統一しているブースもあったが、他のブースと差別化を図るため、T シャツではないノベルティアイテムを作成することにした。その際、出たアイデアとして、キャップやベストなどがあったが、一番手軽に身につけられるタオルを作成することにした。グローバルフェスタは夏に行われることもあり、タオルの使用回数が多いことも採用理由になった。このタオル(図 18)はオリジナルでデザインし、見積もりから、デザイン、発注まで自分達で行なった。UNIDO のイメージカラーである青を基調に UNIDO のロゴなどを配置した。首からかけることで、タオルの青色や、UNIDO のロゴが見えるようなデザインになっており、スタッフの統一感を出すためには最適である。

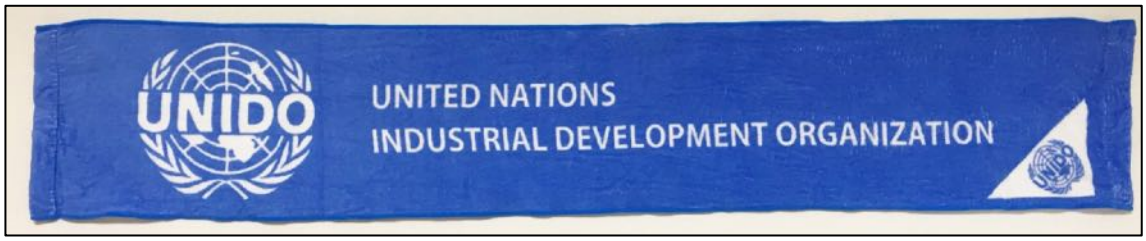


図 18 オリジナルタオル完成品

・　展示パネル

ブース内でより UNIDO のことを知ってもらうことを目的として、当日の UNIDO ブースにて展示するパネルの作成を行なった。パネルは日本企業とそれぞれの国のパートナーシップ事例、キャリアアプローチのパネル、そして UNIDO 東京事務所スタッフの一日という三種類を作成した。日本企業とそれぞれの国のパートナーシップ事例のパネルは UNIDO の活動を紹介する上で必要不可欠なものであり、UNIDO が主に行なっている活動をより分かりやすく、具体的に伝えることはできないかという考えから作成した。このパネルでは、日本企業とそれぞれの国とのパートナーシップを、パンフレットなどに掲載されている情報よりも、一般の方々にわかりやすい内容に一部変更して作成した。さらに、パンフレットに載っていない、今回のグローバルフェスタで焦点となっている、SDGs との関連性のセクションを新たに追加し、より SDGs との関連性を強調した。今回は

様々なパートナーシップ事例の中から一般の方に馴染みの深い企業の例を 3 つ選出し、3 種類のパネルを作成した。キャリアアプローチと UNIDO 東京事務所スタッフの 1 日というパネルを作成するに当たり、まず、学生や若い世代がどのような情報を知りたくて、ブースを訪れるのかを考えた。結果的に、どのような経緯があって現在 UNIDO 東京事務所で働いているのかや UNIDO 東京事務所スタッフが、普段どのような業務を 1 日の中で行なっているのかを知りたいのではないかと考え、これらのパネルを作成した。キャリアアプローチのパネルは次長の村上氏の協力の元、作成した。UNIDO 東京事務所スタッフの 1 日というパネルは実際に UNIDO 東京事務所スタッフの方の 1 日を取材させて頂き、1 日の活動内容を時間毎のチャートでまとめている。

さらに、より魅力的に UNIDO について伝える手段はないか、また、社会情報学部としての強みを活かせないかを考えた結果、コンピューターを使ったコンテンツを作成をすることにした。このコンテンツは iPad を媒体としており、ブースを訪れた方が気軽に手に取って、UNIDO の情報を観覧できることをベースに作成した。コンテンツには、パネルなどには載っていない UNIDO についての基本情報、SDGs についてのより詳しい説明、UNIDO が貢献している SDGs9 番についての情報に加え、公式プロモーション映像やフォトギャラリーなども観覧できるようにした。さらに、ブースに来場した子供向けに iPad 上で、UNIDO に関するクイズができるようにした。他にも、UNIDO の活動がよりわかりやすいように、フォトギャラリーも作成した。

オリジナルハイチュウは 300 個発注したが、これは例年の UNIDO ブース来場者数の 300 人をもとに算出した。オリジナルタオルは 30 枚発注した。UNIDO 東京事務所スタッフは全員で 19 名程度であり、グローバルフェスタ当日に、ブースにいるスタッフは多くはないが、他の用途にも使えるということで、今回はスタッフ数よりも多い発注となった。インターンシップ期間中は時間が限られていたこともあり、全ての作業を効率的かつ、先のことを見越して行動する必要があった。特に、オリジナルデザインで発注を行なったハイチュウやタオルは、納期などを逆算して早めに作業を行なった。

図 19　iPad を使ったコンテンツ

図 20　フォトギャラリー

・　グローバルフェスタ当日

2018 年のグローバルフェスタは台風の影響により、当初の 2 日間の開催の予定から、1 日だけの開催になった。オリジナルハイチュウやパンフレットを 2 日間分見越して発注したこともあり、1 日で全てを配り終える必要に迫られた。当日は朝から小雨が降っていて、午後からは本格的に雨が降り始めた。毎年、2 日間で 12 万人程が訪れるが、今回は台風の影響もあり、1 日で約 4 万人の来場者であった。これらのことから、最終的にハイチュウが余ってしまうことが懸念されていたた

め、より積極的にブースへの呼び込みを行なった。ハイチュウは UNIDO クイズという、事前に作成したパネルクイズを使って、答えてくれた人に配布をする形を取った。このクイズは 3 問の簡単なものであり、中のパネルを見れば答えられる内容にした。これにより、より多くの人にブース内のパネルを見てもらうことができ、結果的に UNIDO に関する知識をつけてもらえた。ブースを訪れる層は若い世代が多く、多くが将来国際機関では働きたい、国際機関に興味があるという学生だった。ブースには UNIDO 東京事務所の村上氏もいたことから、キャリア相談に来る学生も多かった。そんな学生の層に、キャリアアプローチのパネルと UNIDO 東京事務所スタッフの 1 日のパネルは、特に見られていたように感じられた。これはパネル作成時の狙い通りであり、パネル作成の意義があったと言える。

ブースを訪れていた中年世代はパートナーシップのパネルを見ていることが多かった。これは実際にどのような会社と技術が世界に通用するのかという社会人的目線からの興味であると考えられる。ブースには親子連れも多く来場し、その多くがハイチュウ目当てで来場していた。子供に iPad を渡して実際にクイズをしてもらうと、楽しそうにクイズに挑戦していた。逆に若い世代や中年世代にも iPad を渡してみると、より親しんでいる媒体であることから、パネルよりも観覧時間が長かった。ハイチュウは昼頃には半分程度減っており、午後 3 時 30 分ごろには全てなくなった。その後、パンフレットとクリアファイルもなくなった。今回のグローバルフェスタ出展では、2 日間が 1 日になるという事態にも関わらず、とても多くの人が UNIDO ブースを訪れた。この要因として考えられるのがハイチュウである。より親しみやすく、知名度が高いお菓子を配布することで、集客率の向上に繋がったと考えられる。さらに、デザインが独特であると噂になっていたのも狙い通りであった。今回のグローバルフェスタでは、より多くの人に UNIDO について知ってもらえたと言える。

図 21　グローバルフェスタの入り口

図 22　UNIDO ブースの様子

図 23　クイズの様子

図 24　各種ノベルティ

【インターンで得たこと】

UNIDO 東京事務所でのインターンシップを通じて、調査だけでは分からない国際機関が実際に果たしている役割を実感できた。インターン期間中に、何度か UNIDO 東京事務所主催のセミナーに参加した際、実際に日本の企業の方々と海外の企業の方々が、商談を進めている場面を多く見かけた。この商談が生まれるきっかけを作ったのは UNIDO であり、UNIDO が果たしている役割は社会にとってとても重要なことであると感じた。さらに、それぞれの企業が UNIDO を信頼しており、これも日頃のスタッフの尽力のおかげで成り立っていて、また、その信頼の上にセミナー参加

や商談成立があるのだと感じた。

インターン期間中にスタッフの方々とお話をする機会が多くあった。その中で、それぞれのスタッフの方々が様々な働き方をしているとことを知った。私は今まで、１つの会社に勤め、そこで定年まで働くことが世の中のベーシックであると思っていたこともあり、週に３回は UNIDO 東京事務所で業務を行うが、他の日は別の会社で業務を行なっている方の話を聞いて、世間で言われている働き方が必ずしも１つで、こうでなければならないというわけではないことを学んだ。そして、私にとって最も大きかったことは、自分のキャリアを早い段階で考えることができたということである。私は将来国際機関で働きたいという目標があり、実際にインターンシップを行うことによって知った、キャリアアプローチの仕方や、これから何を意識して、そのような道に進んでいくべきかということを早い段階で意識できたのが大きな利点であった。これからも国際的に働くということを意識してキャリア形成をしていきたい。

5-5. 橋本（J-BINGO プロジェクト 2018～2019 年度在籍生）のインターン体験談

【インターンの概要】

勤務先：UNIDO（国際連合工業開発機関）東京事務所　国連大学ビル内８F

期間：9月3日～29日

日程：週2～3日

時間：9時半～17時半

業務：グローバルフェスタ2018に向けての出店計画・準備、グローバルフェスタ2018の当日運営・撤去、UNIDO東京事務所主催セミナーの設営・運営補佐、Weekly Meetingの出席、セミナーで利用するデータの収集

【アプローチの方法】

・　履歴書の作成

履歴書を作成する上で、どのような経験がアピールポイントとして列挙できるかを考えた。その中で、履歴書にどのように記載すれば、国際機関へアプローチをする上で武器となるか、さらなる分析を行った。その結果、以下の経験が大きなアピールポイントとなりうるのではないかと考えた。

● 社会情報学部での学び（応用的な PC スキルや、分離融合学部として幅広い分野の知識あり）

- キャンパスガイドボランテイアでの経験（高いコミュニケーション能力とリーダーとしての経験）
- アルバイトを通して学んだこと（ビジネスマナー、目標設定意識）

1 つのアピールポイントが、社会情報学部の強みである。特に文理融合型の学部として幅広い分野の知識があるという点を推していきたい。第一に、どのインターン先でもマイクロソフト社のアプリケーション（MS Office Word, Excel, PowerPoint 等）が使えることが前提条件である多いが、社会情報学部では、1 年次前期までに、大学が定める基準まで上記のアプリケーションが操作でき、マスターレベルまで使えることが条件とされている。また、昨年度の「プロジェクト演習Ⅰ/Ⅱ」の授業では、校内の購買会を運営している IVYCS の手厚いサポートを受けつつ、「購買会の持続的な売上増加」をテーマに掲げて、自分達で売る品物や値段などを決めて、実際に自分達の手で販売を実施するという、本格的なプロジェクトも実施した。学校の授業の一環で行う以上、様々な制約の中での実施となったが、私達のグループなりに知恵を絞って行った結果、全体の中でもトップの評価を頂くことが出来たこのような、先生によって先導されるのではなく、グループが主体となって課題解決に向けて取組み、解決方法の提案を行うまで、本格的なレベルで取り組む授業はなかなか無いことから、これは社会情報学部の特色であり、強みであると言えると考える。

2 つ目のアピールポイントが大学に入学して以来、所属し活動を続けているキャンパスツアーガイドボランティア（以下 CTGV）での活動である。この団体は、青山学院大学入学広報部直属の団体で、学生の代表として、青山学院大学に興味を持っている中高校生やその保護者に向けて、学生目線で大学の魅力をさまざまな形で伝えている。メインは私たちが普段利用しているキャンパスや、どのような学生生活を日ごろ送っているかについて、ツアー形式で発信するツアー活動である。去年には設立 10 周年を迎え、学長から直々に学生表彰を頂いた実績も存在する。一般のツアーでは、私達スタッフ 2 人程度に対して、ツアー参加者 30 人ほどを引き連れて案内することとなる。そのため、常に大勢に向けて配慮を払うこと、大人数の前で話すスキルが要求される。また、その時のツアーの参加者によって、雰囲気が異なるため、その都度、話し方に工夫を凝らす等、自らの立ち回り方を変える必要があり、日頃から高度なスキルが要求される現場で活動をしている。その他、18 年度は 6 月に実施された理系女子の高校生向けに絞って、青山学院大学の魅力を発信する「Aoyama Rikei Girls Fair」の CTGV 独自企画のリーダーとして、企画の立案から、当日の総指揮を行った。実施をしていく中で、反省点などが盛りだくさんの結果となったものの、今までリーダーとして人を動かす経験を本格的に行ったことがなかったため、この経験はマネージメントスキ

ルや企画力向上に大きく役立ったと考えている。その他にも、16年度は、オープンキャンパス等のイベント時に配布する、キャンパスマップの内容構成やデザインの考案を一から行うプロジェクトに参加したり、とにかく幅広い経験を積み重ねてきている。

最後のアピールとして、大学に入学してからずっと続けてきている、書店でのアルバイトの経験も挙げた。始めた当初は仕事を覚えることに精一杯で、接客業をする上で必要とされる表情やマナーについて、お客様から指摘されたこともあった。それでもめげることなく、社員や先輩の接客スキルを自分なりに少しずつ噛み砕いて、吸収することによって、社員から信頼を寄せて頂き、次々と仕事を任されるようになり、新人教育も任されるようになった。

この経験で、社会で働く上で必須とされる基本中の基本のビジネスにおける、マナーやスキルなどをしっかりと身につけたこと、その他、小売業ということで、どのようなプロモーションが、現場で実施されているかを日頃から目にしているということ、余り機会は多くないものの、外国人のお客様が来店され、何か質問などを受けることがある場合には、率先して対応するように務めるなど、ただの学生アルバイトと考えずに、日頃から目標意識を設定して取り組むようにしている。

以上の強みがインターン先で貢献できるポイントとして履歴書(図25)に記載をした。

・ カバーレターの作成

カバーレターとは履歴書に同封する書類であり、国際機関や外資系企業に就職する際の提出物の１つとして求められるのが通例である。志望動機や自己 PR など、英文履歴書で書かなかったアピールポイントを記入する。採用担当者が最初に目を通す書類であることからも、重要な書類である。内容としては、自分がその就職先にいかに適していて、会社の役に立てるかを PR するものとなる。転職時であれば、今までの職務経験等を改めてカバーレターでアピールすることが通例であるというが、私は職歴がない学生であるため、いわゆる一般的なカバーレターとは、アピールするポイントを変える必要があった。結局、英文履歴書と一部重複する形となってしまったが、改めて、希望の職種や志望動機、社会情報学部としての強みと CTGV での活動経験をアピールポイント、最後に、カバーレターを読んで頂いたお礼と面接の依頼を記載した。一番始めに目に触れる書類であることから、なるべく簡潔にまとめることを何よりも心がけた(図26)。

Mitsuhiro Hashimoto

[redacted] Japan
Mobile: [redacted] Email: [redacted]
BIRTH DATE: 13/12/1997

EDUCATION

April 2016 – current: Aoyama Gakuin University, Japan
Bachelor of School of Social and Informatics
(received in March 2020 in expected)

Related skills

Public Relations, Social Research, Media Literacy, Web Content Making, Project planning, Statistics, Psychology, Economics, Sociology, Web technology, Programming with Visual Basic/JAVA etc.

EXTRACURRICULAR ACTIVITIES

April 2016 – current: Campus Tour Guide Volunteers as the leader
(officially organized by the university)

- As student representative, working as PR manager in the university
- Planning event, following over 30 members
- Having effective speaking skill in front of many people
- Received a student prize through daily activity from University president last year

WORK EXPERIENCE

May 2016 – current: Part time sales staff at TSUTAYA Shoten (Bookstore) Tokyo, Japan
- Supporting foreign customers on behalf of our store
- Having strong interest in entertainment
- Having fundamental business manner though this experience

SKILLS

- Language
  - Japanese(Native)
  - English: Fluent in business situations
    TOEIC Score 775, July 2017 (dramatically improved from 520 taken in April 2016)
- Advanced user of Microsoft Word, Excel, Access and PowerPoint
- Strong communication and interpersonal skills in Japanese and English

FIELDS OF INTERESETS

- Project Planning
- Public Relation

図 25　橋本の英文履歴書

Mitsuhiro Hashimoto
[redacted]

United Nations Industrial Development Organization
Investment and Technology Promotion Office
UNU HQs Bldg
5-53-70 Jingumae
Shibuya-Ku, Tokyo
150-0001 Japan

July 25th , 2018

Dear Hideki Murakami,
I am writing to apply for internship position with the division of Project Planning at United Nations Industrial Development Organization

I am college student as the third grade, majoring Social Informatics at Aoyama Gakuin University. I am currently working on a project, which is one of the courses of the School of Social Informatics, to promote a personnel contribution for international organizations from Japan. During the investigation, I have found that not many Japanese know much about international organization. I thought through this internship I could learn how it is like to work in international organization. I hope to with your organization's assistance in some extent.

I have been taking part in Campus Tour Guide Volunteer since I enter this college. As student representative, we are working as PR manager in the university. Specifically, we are giving a campus tour for high school students and its parents, planning event and managing staff. Throughout its experience, I have strong communication and planning skills to contribute your organization.

I would hope to enjoy having the opportunity to talk with you more about this position, and how I could use my skills to benefit your organization. Please let me know if you have any question. I would very much appreciate. I can be reached at [redacted]

Thank you for your consideration.
Sincerely,
Mitsuhiro Hashimoto

図 26　橋本の Cover letter

・　インターンシップ先決定までの経緯

前期6月から、いくつかの国際機関に対して、夏季休業期間中にインターンをさせて頂けないか、ウェブページに掲載されている機関の連絡先へ、メール連絡等を通じて、直接アプローチを試みたものの、やはり公募で全体の学生に向けて募集をかけている以上は、応募者全員に公平を期すため、このような形では受け入れることは難しいとの回答ばかりであった。

7月25日4年生の岡田さんの特定課題演習の教材作成に向けての材料として、UNIDO（東京事務所の次長である、村上さんにインタビューをするとのことで、私も同行させて頂いた。そこで、私と坂倉は予め作成しておいた英語と日本語の２種類の履歴書を渡して、何かの業務で、インターンシップをさせて頂けないかとお願いをした。

その後、村上さんから９月に開催されるグローバルフェスタの出展に向けての準備をしてくれる学生を募集しているとのことでお声掛けを頂いた。インターンシップを行うに当たり、改めて面接をさせて頂きたいとのことで、東京事務所へ赴いて、この J-BINGO プロジェクトの意義やプロジェクトに参加することとなった経緯、国際貢献に興味を持ったきっかけ等を話した。結果、その場で是非来てほしいとのお返事を頂くことができた。早ければ 8 月の終わり頃から来てもらっても構わないとのことであったが、予定の関係上、私は 9 月の第一週目からインターンシップとして参加させて頂くこととなった。

【業務の内容】

ブースの出店計画を立てていく中で、まずは出展目的・昨年までの取組内容について調査を進めた。UNIDO は基本的に企業との取組みが多いため、一般の方からの認知が薄い。そのような中で本イベントは、UNIDO が参加する中で唯一、一般の方向けのイベントとなるため、UNIDO の名前を知ってもらい、身近に感じてもらうことを出展の第一目標とし続けている。よって、出展内容は基本的に UNIDO の存在を知らない人に向けて、①UNIDO の名前を覚えてもらうこと、②UNIDO がどんな活動を行っている国際機関なのかのアピール、③UNIDO と日本の関わりについてのアピール、の３点をメインとしている。

・　ノベルティ作成

年度によって取組み方は様々だが、活動内容に関する簡単なクイズを用意し、答えてくれた方に対して、UNIDO が制作したグッズを渡すというのが定石であるようだった。実際に、来場者の方

からも好評とのことであったので、今年もオリジナルノベルティを作成して、クイズに答えてくれた方に対して、配布をすることにした。いくつかの業者に見積もりを依頼して考えた結果、UNIDO のロゴをプリントした、オリジナルハイチュウを配布することになった。ハイチュウにした決め手として、単純にもらえて嬉しいものであることがブースを訪れてもらう上で大きいのではないかという点である。デザイン案を私たちでいくつか用意して、事務所の職員の方々にアンケートを取って最終案を決めた（図 27 参照）。毎年２日間で、300 名程度のブース来場者がいるとのことであったので、300 個発注した。なお、「うに丼風味？」とのプリントがあるが、実際の中身は一般的に販売されているグレープ味である。UNIDO と、うに丼をかけて少しウケを狙ったデザインとなっている。

また、過去の開催の様子を見た所、特別スタッフ内で服装などが統一されておらず、ブーストしての一体感が薄いのではないかという考えから、ブーススタッフが、共通で身につけることができるものを制作することに決めた。話し合いで、キャップやユニフォームなど様々な意見が出たが、最終的に首からかけられるタオルに決めた。タオルに決めた後も、デザインを我々で話し合い、職員の方々にアンケートを取って、最終デザインを決めた。UNIDO としての体裁を保ちつつ、ロゴを配置することで UNIDO としてのブースをアピールすることができている。

図 27　設計したオリジナルハイチュウ

図 28　デザインしたオリジナルタオル

・　パネル製作

次に、展示を行うパネル内容についての計画を進めた。グローバルフェスタは老若男女問わず、訪れるイベントであるとのことであったが、その中でも、特に国際貢献に興味・関心のある中高生が多いという過去の声に基づいて、それらの学生がどのようなことを知りたいと思うかを考えた。結果、①具体的にどのような仕事をしているのか（UNIDO 東京事務所スタッフの一日）、②今現在、国際機関で働くに至るまでどのような過程があったのか（キャリアパネル）、③UNIDO の中の東京事務所として、具体的にどのような実績を残しているのか（UNIDO 東京事務所の実績）、以上の３点に絞ってパネル展示を行うことに決めた。

スタッフの一日パネルでは、事前に許可を頂いた上で職員の一日を密着させて頂き、それらを時系列で分かりやすくまとめた。文字だけだと伝わりにくい部分も存在するため、適宜写真を用いて、イメージが湧きやすいようにした。インターンシップをさせて頂くにあたり、UNIDO の取組み内容などについて、事前学習は進めていたものの、実際に働かれている方のスケジュールは、イメージが湧きにくい部分があった。このパネルを制作することで、私自身としても、スタッフの方の具体的なイメージを持つことができたため、かなり意味のあるパネルになった。

キャリアプランのパネルでは、大学卒業後にどのようなキャリアを積んで現職に至るのかについて、分かりやすく紹介を行った。特に、国際機関で働くまでの経緯は、様々なものであるため、このパネル内容が正解ではないが学生が気になる部分に違いないと考え紹介を行った。その他、スペースが余ったため、現在の仕事において、どのような点にやりがいを感じているのか、パネルを見

た学生へのメッセージを添えた。

・　デジタルコンテンツの作成

作業を進めていく中で、案外作業が早く進むことに気付き、更に何かできないかという話が上がった。クイズの質を高める、紹介ムービーを作成するなど、いくつか案が挙がったが、時間的に難しいということで、パネルで紹介しきれなかった内容（SDGｓや活動を紹介する写真等）を紹介することに決めた。それらの内容をどうやって紹介するかだが、はじめは、紹介するパワーポイントを予め作成し、プロジェクターを用いて投影する案があった。しかし、ブースという限られたスペースで行う場合、来場者の動線確保第一では難しいなど、問題があったため、不採用となった。

他に何かいい案がないかと考えたときに、CTGV での活動をふと思い出した。我々の団体では、イベント時に足が不自由な方向けに模擬的なツアーを体験してもらうことを目的として、iPad にツアーに近い内容を準備して楽しんでもらう企画が、毎年行われていた。案をチームに共有するといい反応を頂き、早速 iPad で紹介することに決めた。iPad については、持っている人がいなかったため、法人向けに貸出を行っている企業からレンタルし、PowerPoint の内容については、私達で精査し、作成することにした。完成したものを事務所のスタッフの方に確認して頂くと非常に良い反応が得られた。あえて、PowerPoint で作るという、PC スキルに長けている社会情報学部生らしさを活かすことができた、非常にいい機会になったのではないかと考えている。

・グローバルフェスタ当日

当日は、来場者をブースに呼び込むことに注力した。遠くからでもブースの存在感を感じてもらえるように「クイズに答えてハイチュウをゲット！」という掲示を行い、興味を持って、こちらのブースに目を向けてくれた来場者がいたら、積極的にこちらから声を掛けるようにした。「UNIDO って知っていますか？」という導入から、まずはクイズに答えてもらい、分からない答えがあれば、中のパネルに答えがありますといった形で、作成したパネルをしっかりと見てもらう機会も設けた。生憎の雨で、想定していたより少ない客足であったが、前を通りかかった来場者には、必ず声をかけた。ハイチュウというチョイスがヒットしたためか、学生に限らず、子供連れの家族や年配のご夫婦など、幅広い層にクイズを答えてもらえた。また、話を聞いて更に興味を持ってくれた方については当日、村上さんが一緒に運営を行ってくださったので、直接話しをする場を設けることができた。この点においても、なかなか国連職員の方と話す機会はないため、いいセッティング

ができたのではないかと思う。

順調かと思われていたグローバルフェスタだったが、午後を過ぎた頃から雨足が強くなり、運営から 2 日目（9 月 30 日）の開催が中止との連絡が入った。当初は 2 日間で 300 個のハイチュウを配布する予定であったが、1 日ですべて配布しなければならなくなった。そのため、それ以降は急ピッチで来場者に声をかけるようにした。我々の努力の成果もあってか、最終的に終了の 1 時間前にはすべてのハイチュウを配り切ることに成功した。更に、UNIDO の活動内容をまとめたパンフレットなども 300 部すべて配布することができた。

結果的に天候に振り回されてしまうこととなったグローバルフェスタであったが、思った以上に来場者の方からの反応がよく、無事に終了したことが何よりも安心したというのが、率直な感想である。来場者の層を見ていても本当に幅広い層で、高校の課題で来ましたという高校生や大学のゼミで国際関係を学んでいる学生など、ブースに訪れた方の前提知識なども、もちろん異なるので説明に差異を加えるのが大変だった。その他、UNIDO ならではとして、昔勤務されていた企業で、UNIDO の技術移転支援にお世話になったことがあったので来ました、という方もいらっしゃった。空き時間は他のブースがどのような出展を行っているかを見学した。大学のゼミとして、NGO 団体としてなど、幅広い出展が行われていた。改めて、国際貢献の形・規模は様々なものであると感じさせられた。

図 29　展示の様子

図 30　ブースの様子

・　その他の業務

今回、我々のメインの業務はグローバルフェスタに向けた出展準備であったが、その他の業務についても同行させて頂くことができた。1 つ目が UNIDO 東京事務所主催の南インドビジネス懇談会のセッティングである。これは 9 月 3 日（金）に実施されたもので、インド、チェンナイを本拠とする、印日商工会議所（IJCCI）とその会員企業が来日する機会を捉えて、開催された。インド進出に興味がある日本企業と日本企業とのビジネスに興味があるインド企業、約 20 社が UNIDO 東京事務所のセミナールームに集うというものであった。この日が初勤務日であった私は、右も左も分からない状態で準備を進めることとなった。定刻が近づくと続々と担当者が訪問され、一気にビジネスらしいムードが漂い始めた。全く関係のない私が緊張してしまう事態であったが、会が始まると、リアルなビジネスマン同士の商談を目のあたりにすることとなった。このインターンシップの前に、いくつか民間企業のインターンシップを経験したが、それらはインターン生向けに会社の良いところを見せがち、という話を耳にしたことがあった。それに対してこのセミナーで見た姿は、リアルな姿であることは間違いなく、非常にレアな経験ができたのではないかと、個人的に考えている。

ウィークリーミーティングは毎週月曜日に開催される 30 分程度の会議であり、各部門を受け持つスタッフ同士で、互いの進捗状況の確認のために開催されるものである。もともとは、日本語のみで行われていたミーティングであったが、英語力を落とさないようにと、現在は極力英語を使っているという。勤務初日が月曜日であったため、右も左も分からない状態で、このミーティングに

参加させて頂いたが、当然の様に英語を使いこなすスタッフの皆さんの雰囲気に圧倒されてしまった一方で、国際機関で働くということは、この程度のことはできて当然なのだな、とインターンシップ初日にして、何か自分の中で決心がついたタイミングであった。

【主な参考文献】

- 外務省「国連外交　2015 年～2017 年国連通常予算分担率・分担金」

  http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jp_un/yosan.html

  2019 年 1 月 31 日アクセス

- 国際連合「PERSONNEL STATISTICS」

  https://www.unsceb.org/CEBPublicFiles/CEB_2014_HLCM_HR_21.pdf

  2019 年 1 月 31 日アクセス

- UNIDO 東京事務所「グローバルフェスタ JAPAN2018 [東京]」

  http://www.unido.or.jp/outcome/seminars_events/6198/

  2019 年 1 月 31 日アクセス

6. おわりに

近年、グローバル化に対応するため国際人材を育成する必要があると言われている。しかし、国際機関で働いている日本人職員の割合は、全職員の 2.5%に過ぎない。加えて、国際機関やグローバル企業などで働くのは、未だハードルが高いと考えている学生が多く存在する。また、興味はあるが、国際的に働くためのキャリアパスが分からない学生も多く存在するとの指摘もある。

そこで、国際的に働くことに興味のある学生のための補助教材として、本テキストを作成した。本テキストでは、第 2 章で、国際的に働くための選択肢について提示した。第 3 章では、国際的に働く日本人 10 名のキャリアパス及び、彼らが考える国際的に働くために必要な能力、経験について調査を行い、その結果をインタビュー形式で掲載した。第 4 章では、インタビューの結果について、体系的に整理した。その結果、キャリアパスに関しては、十人十色のキャリアパスがあり、正解と言われるようなルートは存在しないことが明らかになった。反対に、必要な能力と経験に関しては、取材者の回答の中で、共通点があり、「語学力」、「コミュニケーション能力」、「柔軟性・多様性を受け入れる力」が必要であることを明らかにできた。第 5 章では、国際的貢献への一歩をインターンシップから始めるため、インターンシップに求められること、J-BINGO プロジェクト所属の学生によるインターンシップ体験談を記した。

本テキストを通じて、これから J-BINGO プロジェクに参加する学生をはじめ、国際機関やグローバル企業において働くことは難しいと考えていたり、国際的に働くためのキャリアパスが、分からない学生にとって、国連を含め、国際機関や民間企業におけるキャリアパスや学生時代にやっておくべきことを理解するための一助となれば幸いである。

謝辞

本テキスト作成に当たり、実施したインタビュー調査「国際的なフィールドにおいて活躍している日本人のキャリアパスおよび必要とされる能力や経験について」には、UNIDO 東京事務所の村上秀樹様、OECD 東京センターの村上由美子様、IOM 駐日事務所の佐藤美央様、JICA 青年海外協力隊事務局の梅本真司様、国境なき医師団日本の今城大輔様、アイ・シー・ネット株式会社の野間口剛様、株式会社プロジェクトアブロードの木村洋平様、株式会社 Selan 取締役の樋口亜希様、White Star Capital の長尾俊介様、牧浦土雅様にご協力頂きました。調査の実施にご協力頂きました皆様方に、改めて感謝申し上げます。

その他、今回の研究を進めるに当たっては、学内での発表等を通じ、青山学院大学社会情報学部の教員の皆様にご助言・ご指導頂きました。また、インターン体験談の作成に当たり、坂倉啓太様、橋本光弘様にご協力頂きました。その他、本テキスト作成に当たっては、J-BINGO プロジェクト所属の後輩達にもご協力頂きました。なお、本研究をまとめる過程にて発表した内容について、青山学院大学特定課題演習・研究優秀賞の栄誉を頂きました。ここに感謝の意を表します。

以上、皆様のご助言、ご支援、ご協力に対して深く感謝申し上げます。

国際的なフィールドにおいて働くには：
J-BINGO プロジェクト　テキスト(Ver1.1)

２０１９年３月２５日発行

■ 執筆者
青山学院大学 社会情報学部 J-BINGO プロジェクト
2018 年度卒業生　岡田 祐奈

■ 発行
青山学院大学 社会情報学部 J-BINGO プロジェクト
〒252-5258 相模原市中央区淵野辺５－１０－１
ＴＥＬ　　０４２－７５９－６０００（代表）